

# 女の言いたい放題誌

特集 子どもの出現

特別寄稿

西欧女性三態

特別寄稿

なめんじゃねえよ!

わいふ NO.227.



# 農文協

●内容見本呈  
(税込価格)

東京都港区赤坂7 6 1  
電話03(585)1141(代)

## 聞き書 山梨の食事

大自然の恵みを生かし、  
相模、武蔵、信濃、駿河との  
交流から花開いた甲斐の食文化

長寿県山梨を支えた食の心と技を  
県内六地区に聞き書取材。



★カラー写真豊富・A5判・29000円

●アトピーの本 第4弾！

## アトピーを治した

●松村龍雄の  
懇切治療記

食へもて治す  
子どもアトピー

★10300円

クルック博士の  
アレルギー薬本

★12500円

予防と治療の  
アトピー薬立250

★14000円

エプロン姿もキリリと決めて、ビーマン・ニンジン  
きざんだら 好き嫌いなんか飛んでつちやう！

坂本廣子の

## 台所育児

1歳児から包丁を

★1200円

ほめてほめて、またほめて  
ガミガミいうより一緒に  
作ろう！ 小さな手とお母  
さんのクッキング・レシビ。



父母と子の立場から教育・学校を考える雑誌

月 母と子 PTAやサークルのテキストに！  
刊 定価350円（年間定期購読4,200円）

## ●1月号の視点●親と教師の伝えあい

母と子 1月増刊号 (定価1,030円・〒56円)

## 子どもと読む 子どもの権利条約

父母・教師の手引き書！ なぜこんな条約が出来たのか？ 何が書かれているのか？

シリーズ 子どもを読む 1

## 子どもの思い

戸田 唯巳 著 (定価1,339円・〒260円)

「子どもが見えない」という父母・教師に贈る感動の20話！

子どもの人権——日本の現状と課題。父母・教師・弁護士等25人の証言。

## 子どもの人権

——立ち上がる父母・市民——

「子どもの人権と体罰」研究会 共編 (定価1,545円・〒260円)  
体罰と管理教育を考える会

ご注文は最寄りの書店か、直接小社へ

〒203 東京都東久留米市中央町5-4-8

電話 0424-74-9125 振替 東京0-89701

## 母と子社



●  
あなたのフリースペースです。

4

書いてますこんには⑪

奈良県生駒郡・高松恭子  
写真／文・本人

28

なめんじゃねえよ！

たまき久美

35

エッセイスト・クラブ

小林千歳・福田由利子・中松ミナ子

●特集 子どもの出現

10

子どもは授かりものと思いたい  
立花由利

40

祖母のいた日々 葉田野妙子

—ある共働き家庭の二十五年—

13

好奇心というもの  
重住麻悠

52

筑紫女大いに語る

—わいふ二六号各評

◎座談会◎

18

わたしの出産雑記  
杉浦真子

川谷由紀子・栗岡理子・島村雅子  
野口敬子・藤瀬文子  
帆足裕子・吉留優子

24

カツラを買ってあげる  
としみ・坂田

62

人間マングラ

匿名・高宮みか



連載

70 徹底ガイド・塾の教育システム

6ページくらいだ  
レポート・岩田和子

80 一人一芸

上野由紀子

82 ああこれが看護婦 川崎文子

夜勤ドキュメント

92 情報コーナー

94 母の戸籍 藤川洋子

101 西欧女性三態 法村香音子

106 フリースペース

西田淑子・宇野佳子

110 泥棒体験記 K・T

115 読んでみました

和田好子・鈴木由美子・田沼千恵

連載 4

118 オーロラと白夜の国 中田慶子

ルウェー生活事情

131 サープレシープ

望月緑

132 コミック●痛快ノ一般人③ 栗田笑

136 ブック情報

138 わいわいがやがや

匿名・関根裕子・芥川菜穂子

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

イラスト・梅村 蒔・カステラネンコ・小島佳子・田井亮子  
田沼千恵・田村幹代・西田淑子・堀切潤子・山田京子

書いてます  
こんにちは

奈良県生駒郡

高松 恭子



月一回ミニコミ紙を発行しています。  
"わいふ" 没になった人も載せてあげますよ!!

Writer Information ⑪

(ゼッケンと同じ色の



奈良大仏マラソンでボランティア(受付や走路員をやります)ランナースクラブの会長(右となり)と



動物が飼えないのでこれでがまん  
二三六号「愛しの『かば』へ」の越さん  
に負けない幼児性です。

上代から二十代、音楽以外楽しみのなかった私に、水泳は大きな喜び  
と自信を与えてくれ、さらに「わいふ」はたくさん友人を与えてくれ  
ました。月二回の文章教室(「わいふ関西」の勉強会)で大いに鍛えられ  
ています。

実りある四十代を過ごすため、今はひたすら体力作りに励んでいます。

夢は、一つだけ童話を書くことです。趣味の音楽鑑賞や旅行、「わい

ふ」への投稿で、少しでも感性を磨けたらと思っています。

私のような一介の主婦に、主張や表現の場を提供して下さい。「わいふ」

は、とても有り難い存在です。

二三四号「曜夜天目の鬼」の  
Kさんにもらったお茶碗。  
殖論は私の作品です。





♡仲よしの夫と



何でもやってみよう!!  
ジャスパー(カナダ)で  
急流下りに挑戦



お料理大好き主婦です



私を引っばってくれたスイミングスクールの友人たちとコーチ。十年前の写真です

これは私がとった唯一の  
金メッキメダルです。



日本人で初めてドーバー横断(単独)の大貫映子さん  
(右から二人目)と。1987年(英)のフォークストンにて



“わいふを紹介してくれた  
日比野 都さんと  
「仮面舞踏会」って  
ときどきこつやつて  
ハメをはずして  
遊びます。

## 被害少女の「目」で報道を総チェック

# 女子高生コンクリート詰め殺人事件

—彼女のくやしさがわかりますか?—

おんな通信社編 A5判 272頁 定価1545円(本体1500円+税45円)

- 憤りと悲しみと感謝 <中山千夏>
- 少女の死が照らし出したもの <丸山友岐子>  
客観性のない不公正な報道を1つ1つ実証。報道の性暴力をあばく。
- 座談会「息子をレイプマンにしないために」  
門野晴子／中山千夏／丸山友岐子 他  
学校・マスコミ批判から、強姦を生む男たちの精神構造、家庭内暴力への処方箋、学校のセクハラなど、事件の背景を語りつくす。
- 「報道被害」泣くの、やめよ <アメリカ・イギリス・日本の市民運動>
- 裁判資料〈論告要旨〉 マスコミへの要望書・マスコミからの返事など。

●直接ご注文は下記へ——

**社会評論社**

〒113 東京都文京区本郷2-3-10 お茶の水ビル  
TEL 03-814-3861・FAX 03-818-2808  
振替・東京 7-89969

**おんな通信社**

〒169 東京都新宿区大久保1-13-19-201  
振替・東京 8-175159

●この本の印税は、少女の死を永久に忘れないため「女の人権基金」とします。

**現代書館**

東京都千代田区三崎町2-2-12  
電話03(261)0778振替東京2-83725

価格は悪税別です

パンドラ編

新刊 16900円

**バトルセックス**

西部邁VS船橋邦子／栗本慎一郎VS田中優子／田原総一朗VS三井マリ子による性文化論争。読みごたえのある激論。

**季刊福祉労働48号**

新刊 9500円

特集・障害者は問う——スポーツ・天皇制 国体、パラリンピック、身スポ大会の問題を暴き、スポーツの姿を問う。

福島瑞穂・中野理恵インタビュー

好評発売中 15000円

**買う男・買わない男**

買春する男の姿や意識は女には実体として見えにくい。フェミニストの女が種々の年齢・職業の男に本音を聞く。

21世紀を織る女たちの会編

好評発売中 15000円

**母さんだいじょうぶだよ**

共働きが増えたといえ、家事・育児は相変わらず、母親にある。その母親を子供たちはどうみているのだろうか。

日本臨床心理学会編

好評発売中 35000円

**裁判と心理学・能力差別への加担**

「知恵遅れ」とされる人々が冤罪事件に巻き込まれ「犯人」にされていく過程に於ける心理学・鑑定の問題を究明。

●FOREBENEFITSシリーズ●

9500円

**精神医療**

文・長野英子  
絵・一ノ門ヨコ

新刊

「精神病」者を取りまく現状と病院、精神衛生法の実体を、自ら「病者」として入院した筆者が、白日のもとに晒す。



特集

# 子どもの出現

立花由利  
杉浦真子

重住麻悠  
としみ・坂田





# 子どもは授かりもの とりたい

宮城県仙台市  
立花 由利

## （赤ん坊、また欲しいけれど）

何となく結婚して、すぐに子どもが生まれた。一年たったらまた生まれ、年子の母は育児に追われた。三年たって、またまた生まれ、三児の母は忙しかった。

四人目が生まれたらあの赤ん坊のにおいを感じたいけれど、経済的に大変だ。一億円、手に入ったら産みたいけれど、持ち家がほしいので、一億五千万円あったなら……産めるかしら。三人目を産んでから病気になるって、まだ治っていないので体力的にも無理だろうと思う。でも健康に自信が持てて経済的に不安がなければ、自分の赤ん坊をまた産んでみたい。おむつがえを息子や娘がやってくれるかもしれない。私の胸の乳房、今は垂れ下がって役に立たないけれど、大活躍した時代もあった。時間がたつとゴチンゴチンにかたくなって、乳首の穴から細くて白い噴水になって乳がほとばしった。やっと子どもに吸われて乳房がだんだんや

わらなくなったとき、「ああ、気持ちいい」と感じた。あの感覚をもう一度味わいたい。赤ん坊が乳を吸う力は強かった。指は小さくてつるつるしていた。やわらかくて、あまったるいにおいがする赤ん坊をまた抱いてみたい。

ところが赤ん坊は大きくなってしまふ。今日も息子は私のことを「クソババア」と言った。肩をもませたら、わざと首を絞められた。すっかり顔立ちも変わってしまい生意氣中学生に変身してしまった。

「なんで、おれなんか産んだんだろう。好きで生まれたんじゃねえ」と言われ、思わずあせったこともある。

息子が言うとおり、人間は好きで生まれてきたのではないのだ。小さな卵子和精子が出会い不思議な力で大きくなり、にゅるにゅると外に出て乳をぐいぐい飲んで育つ。体が大きくなると自分の力で食べ物を得るために働くようになる。本を読んだり旅をしたりする。恋をして結婚したりすると子どもができる。孫が生まれたりする。「ハ

ワイに行きたい」と思ったら肺がんになったりする。「まだ死にたくない」と思っても死んでしまう。大昔、不老不死の薬をものすごい情熱で作らせた中国の貴人も死んでしまった。長生きの亀だって死なないものはない。

祖母が死んでから子猫が死に、下の子がいづつめた表情で言った。

「わたし、生まれてこないほうがよかった。どうせ死んじゃうんだもん」

子どもを産んだ私は、どう答えたらよいかわからなかった。

自分の体から生まれた子どもが成長していく過程を見るのは、小説を読むより映画を見るよりずっと楽しい。子どもの今の時間が自分の子ども時代と重なって、不思議な気分になることがしばしばある。「出会いと発見の旅」を毎日している。乳児、幼児と小さいときほど、子どもの表情は愛らしいものだし、「この子のためなら何でもできる」と思ってしまうほどだ。

しかし、自分の体から出てきた分身のような子どもでも「分身」ではない。

人格はぜんぜん違うのだから、その点を意識していれば、無用な干渉や必要以上の心配をせずにすみそうだ。あまり期待をすることもない。

小さくていいにおいのした息子は、今朝もムースのおいをさせて出て行った。靴のサイズは二十六センチになってしまった。四千グラムで生まれたので歩き始めの靴は十三センチだった。

## （子どもは「授かりもの」）

子どもって授かりものみたいな気がする。「作った」とも言えるのだから、「授かった」と思いたい。大きくなりつつある我が子を見ると、神様とか宇宙とかの存在を感じてしまう私の体から生まれた子どもたちは兄妹でありながら顔も性格も全く違う。夫のそれとも全く違う「授かりもの」なのだ。

テレビで「クローン牛」というのを見たことがある。イラクのフセイン大統領は自分と全く同じ人間をほしがっているとか。そのうちノーベル賞学者

の精子銀行どころか、クローンができることもありうる。障害者は役に立たないからと、遺伝子操作で生まれなくなるかもしれない。頭の良い人間、健康な人間、乳のよく出る牛、肉のおいしい豚、おとなしくて頭の良い吠えない犬……そんな立派な生きものしか生



きられない地球。それが人類が行き着く文明社会なら悲しい。科学ってそんな社会を目差しているような気がするの、私の思いすごしだろうか。

なんだか怖い世の中になっている。チェルノブイリの事故が日本に起きないとは断言できない。「そういう時代だから、子どもはいらない」という人もいるだろう。地球汚染が広がったり戦争もあるけれど、毎日たくさん子どもが生まれている。生きたり死んだり地球で、生まれるものがない。なったら、永遠の死が訪れる。生きもののいない死の惑星が広い宇宙にはどれくらいあるのだろうか。

私自身も生まれたくて生まれたわけではないけれど、せっかく生まれたのだから死ぬ前に楽しいことをたくさんしてみたい。生きている地球に触れたい。日曜日、娘と母校の学園祭に行くと、黄色いキノコの生えている芝生に寝ころがってきた。空は青くて、遠くの山々は緑色、校庭のモミジは少し色付き始め、空気が澄みわたり、何とも

言えず気持ちよかった。李白だったら、こんな景色の中でどんな詩を作ったことだろう。魯迅がもし生きていたならば、遠いイラクについてどんな詩を書くのだろうか……と、ぼんやり寝ころがって思った。チョコレートクレープを食べ終わった娘たちが、「早く帰ろう」とせかすのでスカートの芝をはらって立った。

学校の成績はよくないけれど元氣いっぱい娘たち。なまいきざかりの娘が言う。

「紀子<sup>きこ</sup>さまって、よく見るとブスだね、でも大金持ちになって、うらやましいなあ」

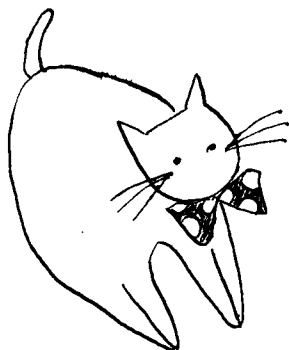
「あんたのほうがブスでしよう」  
「ママのほうがブスでデブだ」

ブス、デブ、クソババア、ウルセエ……。

母親役も大変なのだ。赤ん坊はすぐ大きくなり、バシバシとぶつかってくるので体と心にこたえる。子どもたちよ、早く大人になってどこかへ飛び立って行ってほしい。このごろ親の役割に疲れてきたところだ。



子どもは今まで、十分にかわいがった。もう親の手をあまり必要としなくなったので、自分自身に目を向けたと思う。一億五千万円があるはずもなく、赤ん坊のあのおいし思い出の中で感じていたい。



# 好奇心と いうもの

兵庫県神戸市

重住 麻悠(33歳)

（子どもを、産んでみたい！）

私は、何事も自分で経験してみないと気がすまない性質である。

高校生のころ、ロックバンドを追いかけていたが、いつも周囲を取り巻いているだけのファンでは、満足できないわけがない。そこで、大学受験のとき偏差値と相談しながらも、軽音楽部が派手に活動している学校を選んだ。そして、入部一年後にはしっかり紅一点のキーボード奏者として、バンドのメンバーになっていた。

念願だった二十代でのヨーロッパ行きも、新婚旅行がチャンスだと思うと、何としても実現させたくなった。冬のボーンラスを当てに親に前借りして費用をつくり、飛行機を信用できない夫をひきずって、夏休みの二週間ドイツをうろうろしてきた。

さて、次なる目標は、自分の子どもを産んでみることである。

おながが大きくなっていくのって、どんな感じなのだろう、赤ちゃんを産

むのって、本当にたいへんなのだろうか……「出産」というイベントには、まさしく好奇心をそそる事柄があふれかえっている。

私の体の中には、子宮も卵巣も存在しているのだ。

「あるものは、使ってみたい！」これは、私が、子どもを産みたかった最大の理由である。

ところが皮肉なもので、たいていのことは、自分の思いどおりにすすめてきた私だが、「妊娠」だけは、なかなか実現しない。けっこう仕事（教師）が忙しかったので、それほどあせりもしなかったのだが、さすがに結婚三年目医者に行ってみることにした。

検査は夫妻ともに受けたのだが、果たして、不妊の原因は私側にあった。卵管が両方ともつまっていたのだ。妊娠できるわけがない。数年前までの避妊を思い出し、虚しくなってしまった。原因は、小学校のころに患った「肺浸潤」かもしれないと言われた。

一か月のうちに数日間ごとの治療が

始まった。不快なのは当然だが、これも「妊娠」という経験をしてみたいがゆえ、何とか我慢した。

三か月後、レントゲンを撮ってみると、両方とも開通していた。十数年間も癒着していたものが、そう簡単にはがれるわけではないと思いこんでいたのだが、あの素敵な女医さんの技術は、実にすぐれていたのだ。

それから一年半後、市内の一等地にある学校に転動したとたん、まるで安心したかのように妊娠した。以前の勤務先は、生活指導のたいへんな地域だったので、妊娠できるような余裕がなかったのかもしれない。

しかし、私のマタニティライフは、よく雑誌の広告にあるような優雅なものではなかった。何しろ、十代になったばかりの多感な子ども達四十名余りを、毎日相手にしているのである。刺激的ではあるが、ヒヤリとさせられることもしばしばで、何度か流産しかかった。

就職して以来、何度うらやましい思

いで聞かされただろう……「産休」に入る人のあいさつを。二十代最後の初冬、私はやっとあこがれの「産休」に入ったのだった。

これではらくは堂々と専業主婦ができるのだ。長女が生まれるまでの六週間、私は、友人や妹と一流ホテルのランチ巡りをしたり、母と出産用品の買い物に行ったり、ほとんど毎日のように遊び歩いた。産院や保健所の「母親教室」にも、うきうきと参加した。ほこりをかぶったままになっていた、結婚式やその後アチコチに旅行したときのスナップ写真も、きちんと整理した。

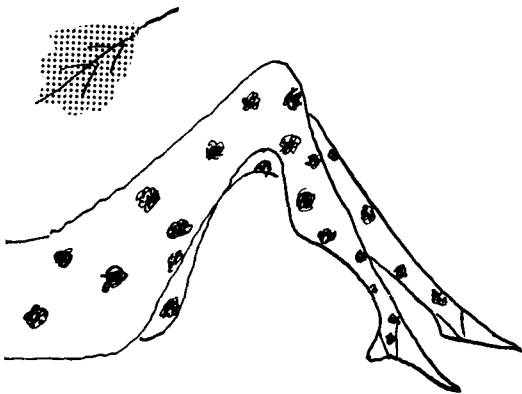
もう、しばらくは外で食事できないだろうからと、夫とフランス料理を味わいに行ったり次の日の朝、「陣痛」らしいものが始まった。

何事も経験してみたいのだから、できる限り自然出産しなかった。麻酔で眠っている間に生まれていたなんていうのでは、くやしい。

初産所要時間五時間。本人にとって

は、たいへんだったように感じたが、看護婦さんには「軽いお産でしたね」と言われた。

産んだ直後、抱かせてもらったときは、頭の形が何となくゆがんでいるのが気になっただけだったが、数時間後、きちんと産着を着せてもらい、ベッドの横に連れてきてくれたのを見たときには、これはとんでもない「宝物」ができてしまったものだと思った。こんなかわいいのがおなかの中にいたのな





ら、もっと大切にしていればよかった……とも思った。

それまで、夜は眠るものと思っていた私にとって、赤ちゃんが夜中も二、三時間ごとに泣くとは、知らなかった。すうっと眠りに入ったときに、ギャーという声で無理やり目を覚まされる。それが一晩に数回も。いったい、いつまでこんな生活が続くのだろう……。このときばかりは、世間のいわゆる「母親」となっている人達を尊敬した。こんな時期を、何とかやり過ごしただけでも、えらい。

### （仕事と子育ての両立は？）

長女が六か月をすぎたころ、なぜか私は、仕事に行くのも悪くないなと思いはじめていた。

母親と子どもと一対一の関係は、ときどき息苦しくなってくる。朝起きて、雨が降っていたりすると、今日は一日どうやって過ごそうかと気が重くなる。専業主婦の生活、あれほどあこがれていた、平日の朝の自由（仕事を持つ身

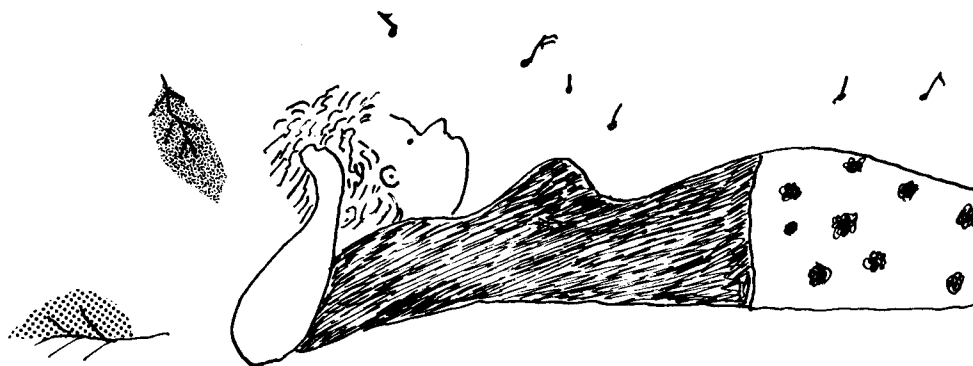
には不可能だった）も、それほど輝いたものではなくなっていた。

ここでもまた、私の悪い癖が出る。そう、仕事と子育ての両立は、いったいどれぐらいたいへんなのか、経験してみなくては……と思ったのである。育児休業を一年間終え、私は再び社会に出ていくことにした。

雨が強かろうと、風が冷たかろうと、毎朝七時前には眠りこんでいる娘を抱っこして起こし、食欲はなくても、何とか果物と牛乳ぐらいは胃の中へおさめさせる。やっとの思いで保育園の制服を着せ、玄関に出ようとすると「ゲボッ」とやられる。

以前、同じ職場だった子持ちの人が、なぜ遅刻が多かったのか、自分が経験してみようやく納得できた次第である。

仕事にのめり込んでいる間、例えば授業をしていたり、会議で煮つまっていたりするときなどは、完全に娘のことは忘れていたのだが、ほっとひと息ついた瞬間に、今ごろあの娘は、保育





園でどんな顔をしているのだろうと思  
い出す。そして、私はいったい何を  
しているのだろうと考える。自分の娘を  
他人に預けてまでこの仕事がしたいの  
だろうか、と自問してみる。

子どもを産むまでは、わりあい派手  
な仕事のしかたをして、キャリアをめ  
ざすつもりもあったので、自分でも、  
この心境の変化は意外だった。保育の

プログラムが終了する午後四時をすぎ  
ると、いてもたってもいられなくなる。  
職場から、たった二百メートルぐら  
いしか離れていないところへ迎えに行く  
のに、歩いているのがもどかしく、飛  
んで行きたい気分だった。延長保育な  
るとんでもない。どうしても遅くな  
る日は、母に頼んで実家へ連れて帰っ  
てもらった。

そんなころ、あっけなく二人目を妊  
娠した。第一子はあれほど待たされた  
のに、今度はいとも簡単にできてしまっ  
た。これは神の意志にちがいないと、  
勝手に解釈した。きつと、いったん仕  
事を打ち切りたいという指示だ。そ  
う思って二人目の育休に入ったら、年  
度末で退職しようと、ひそかに決意し  
た。

次女を出産した次の日、おっぱいを  
吸わせると、長女と違い実に強い力で  
吸いついた。彼女が吸いつくたびに、  
胸とは離れているはずの子宮がグイグ  
イと収縮するのを感じて、私の体の中  
にはこんなシステムが仕組まれていた  
のだと思い知らされ、感動した。

（専業主婦も味わい  
深い「寄り道」）

子どもを育てていると、夫婦の人格  
を再点検されているように思えること  
がある。以前はそれほど気にならなかつ  
た、夫のちょっとした癖や、ものの言  
いかたが、子どもへの影響を考えると

どうか、と首をかしげる時がある。それは私についても指摘されたりして、夫婦の紛争に発展することもある。

いや、「育てる」などというのは、おこがましいかもしれない。人間になる過程を見せてもらっているのだと思う。一歳をすぎた次女は、食べて、遊んで、泣いて、眠るだけの「怪獣」から、だんだんと「人間」になりつつある。「すねる」というような、高度な感情表現をみせてくれるようになってきたのだから。

もうひとつ、ささいな発見だが、子どもを連れていくと、どこを歩いていても怪しまれない。我が家は、新興住宅地にあり、日々、いろんな建物や施設ができていくのだが、乳母車を押し、散歩を装い偵察に行くと、まず不審な顔はされない。それどころか、向こうから話しかけられることも多い。知らない人とすぐに会話が成立するのも、子連れの特徴である。

同じマンションに住む他の子ども達も、三歳ぐらいになると、英語だ、ス

イミングだと通わされるのを見てると、あれも母親の好奇心かなと思ったりする。そういう私も、ソルフエージュだけはさせておきたいとか、長女と次女は違う幼稚園に入れてみようとか、けっこう好奇心を発揮しているのだけれど……。

仕事を辞めるときは、「次女が小学校に入学したら、活動を始めよう」と思っていたはずなのに、元来、外向きの性質はどうしようもなく、ときどき新聞の求人欄などを真剣に見てしまうことがある。四歳になろうとする長女は、もう親より友達のほうが優先されているみたいだし、次女だってあと二年もすればかなり離れてくるかもしれない……と、社会へ再デビューする時期を、どんどん早めて計算している自分に気づく。

専業主婦をしている今は、なんだか「寄り道」をしている気もちだ。もちろん、自分の意志でしていることだし、なかなか味わい深い「寄り道」ではあるのだが……。

## わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変(わ)る↓変わる 浮(か)ぶ↓浮かぶ 話(し)合う↓話し合う 気持(ち)↓気持ち 行(な)う↓行なう 表(わ)す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂「用字用語辞典」・朝日新聞社「朝日新聞用語の手引」に準拠しています。

◆投稿は必ず原稿用紙にたて書きでお願い致します。



# わたしの 出産雑記

東京都国分寺市

杉浦 真子

（はずかしながら妊娠  
したのはいいけれど）

二十八歳のとき長男を産んだ。

二十五歳で結婚してからしばらくは、  
夫も私もどうにも「親」という立場に  
気恥ずかしさを感じて、結婚前と同じ  
ように二人でフラフラ遊んでいた。

丸一年そんなふうにいると、  
周りが騒ぎ出した。

「真子ちゃん子どもわな」（私は三重  
県南部の生まれです）

「できへんのかな？」

こんなふう聞くのはもっぱら私の  
身内——。

「ようこんなこと聞くわ——恥ずか  
しげもなく——」

そのころ私は、「妊娠した」という  
ことは「ワタクシタチ、SEXをしま  
した」と言っているのと同じに聞こえ  
て（確かにそうなんだけど）——そ  
んな恥ずかしいこと、ようするけどよ  
う言わんわ——とひたすら思ってい  
たのだ。

しかし、私もそういつまでもカマト  
トぶつてもいられない。三十歳までに  
子どもを二人と何の根拠もなく思っ  
ていたから、それにはそろそろ支度を始  
めなければならぬ。

「妊娠したら、まあみんなには聖霊に  
よって身ごもったとでもいえばいいか  
——」とわけの分からぬことを考え  
て、そのころから人生の目標は「妊娠」  
の二文字になった。

「基礎体温」「排卵日」こんな専門用  
語が日常会話の中にポンポン飛び出  
して、いかにして効率よく妊娠するか  
——それがかりが頭の中にあった。

そして妊娠——流産。けっこう辛  
かったが今考えてみれば、それは新し  
い小さな命をなくしてしまったという  
高尚（？）な悲しみではなく、計画通  
りにいかなかった、痛かったというだ  
けの辛さにすぎなかったような気がす  
る。

その悲しみを乗り越え、またしても  
ニンシンへの道のりを歩むのだが、そ  
のところからは実家の母から嫁いだ姉ま

で加わって毎月生理のころになると、「どうやな、できたかな」と電話がかかってくる始末。あぐくの果てには、母と姉が「どうか、真子にひとりだけでいいですから子どもを授けてやってください」と神頼みを始めてしまった。そのおかげかわたしは、みごと聖霊によってみごもった！

今度は流産の危機もなく無事妊娠期間を過ごし、いよいよ予定日を間近に控え私は実家に帰った。そのころの私の心配は、今まで羊水という水の中で暮らしていた赤ん坊が、出てきたとたん今度はホントに肺で呼吸できるのかどうかということ、もう一つは経験したことのない出産の痛みへの恐怖だった。

その恐怖をなるべく和らげようと、たいしたことないって！と自分に言い聞かせようとしている私に、ナント東京の姉から心のこもったお言葉。

「あれは痛いよ。我慢強い私でさえ大変だったんだから、痛がりやの真子に我慢できるか心配しているの。耐えら

れるかなあ？」（実際私の目から見ても姉はガマン強い人だ）

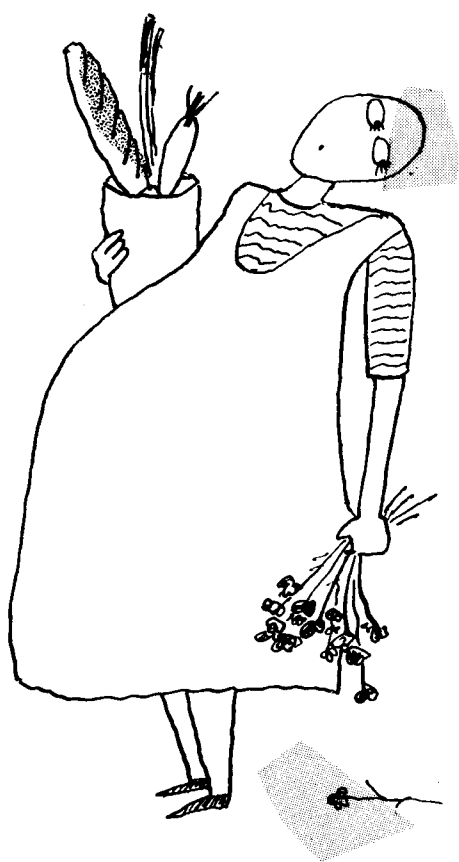
「それはないでしょ、あんなに子どもつくれつくれて言っときながら、今になって耐えられるかなあ、なんていわれたって耐えられなかったらどうすんのよ、こんなにお腹出っばっちゃんて、まさかこのまま一生暮らすわけにもいかないし、出すしかないしょ！」

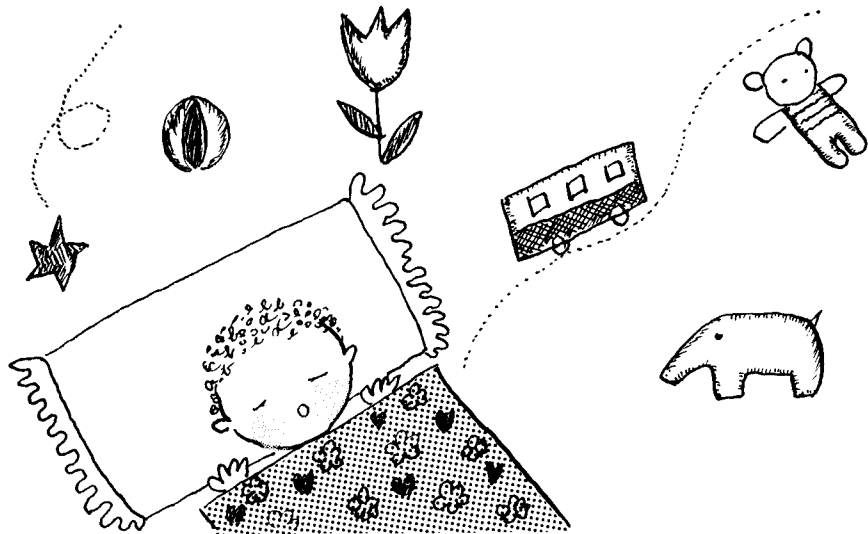
（今考えるとわが姉はちびまる子ちゃんのおねえちゃんみたいなのヤツだ）

とにかくもうそこに迫った出産の日を前に、この妊娠をなかったことにするわけにもいかず、とうとう陣痛を迎えてしまった。

最初の痛みがきたときに「しまった！」と思った。

「この痛みがますます激しくなったら





どうすりゃいいんだ！ 取り返しのこと  
かないことをしてしまった！」

### （カンドウ的でない出産劇）

名古屋から夫も病院に駆けつけ（そのころ私達夫婦は名古屋に住んでいた）、母と夫と私の大出産劇が始まった。

母は姉の出産のとき苦しんでいる姉のベッドの横で不覚にもグウスカ眠ってしまい、後でえらく非難を浴びたので、今度こそは眠るまいとリキが入っていた。夫もわざわざ病院まで駆けつけておいて眠ってしまったら後で私になんと言われるか、それが怖くて眠れない。夕方の六時過ぎに最初の痛みを覚えてからすでに七時間は過ぎ、お腹はもう休みなくガンガン痛い。「そうか！ これだったのか！ おねえちゃんと言った我慢できない痛みというのは、もう我慢できない！ 早く産まれてくれ……」

それなのに若い看護婦は余裕綽綽で分娩室の掃除なんか始めている。「なんとかしてよ！」私の殺気だった

様子を察して母は私を慰めようと、

「おねえちゃんのとときは二時に産まれたからきつとあんたも二時に産まれる、あと一時間やよ！ がんばんな！」

今から考えれば人の出産時刻などなんの参考にもなりはしないのに、その時はなんか真実味があって二時を目指してがんばった。

しかし二時になっても産まれない！  
「お母さんの嘘つき！ 産まれへんやんか！」

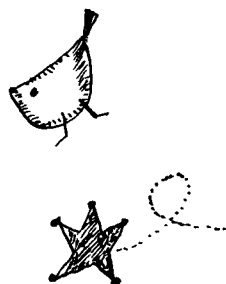
「あ！ 間違えた、間違えた。三時やったわ、しんちゃん。ごめん、ごめん」

わけの分からぬ母子の会話をよそに、夫は看護婦から言われた通り腕時計を見ながら冷静に陣痛の間隔を計っている。私はそんな落ち着いた態度の夫が気に入らない。

「誰が私をこんなふうにした！ 何で私だけがこんな目にあわなきやいけなの！」

このころになるともう自分のことしか考えない。子どものことよりもまず





この痛みから解放されたいというほうが先で、何でもいいから早く産まれてくれ！とひたすら願うばかり。

そうこうしているうちに隣の分娩室で経産婦がアツという間に子供を産み、そのついでにちよっと私のほうをのぞいた医者が、看護婦の「まだ、まだ」の合図を見てあくびをしながら戻っていくのを絶望的な気持ちで二度も見送った。そして朝の八時にとうとう産声を聞いた。

「やっとな産まれた！ もう痛くないんだ！ やったあ！ 終わったぞ……」

看護婦さんが「ほら、男の子ですよ」と赤ん坊を見せてくれたとき「へええ、これが産まれたの赤ちゃんか、こんなにしわくちゃでどうにかなんのかなあ」と思いつながら赤ん坊をながめた。

その日——八年前の十月四日、分

娩室の窓から見えた空は（今から考えるとどうして分娩室にあんな大きな窓があったんだろうと思うけど、まあいいか！）見たこともないような雲一つない青空だった。分娩台に乗ったまま、その青空を眺め「よし！ この空だけは覚えよう。何か誰かに聞かれたとき『あの時の空は——』なんてカッコいいもんね」なんてどうでもいいようなことを考えながら、そのまま眠ってしまった。

目が覚めたとき、徹夜の奮闘にもめげず、元気な母がもうすっかり他の患者さんとうちとけて楽しそうに話している。

私は自分のお腹を触ってみた。

へっこんでいる！ やったあ！ これでもうつ伏せになって寝られるぞ！ 痛みも取れたし、もう治った！ さあ帰ろう！ いや待て、そうだ、私は子どもを産んだ。そうそう確かにさっき産んだんだ。そうか一人で帰るわけにはいかないんだ。ということとは、こ

## 各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば「わいふ」文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館に申し入れて下さるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。

くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合わせ下さい。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せたい公民館にお申し入れいただくと思います。

れからずっと寝たいだけ寝られるという日がなくなるってこと？　ゲェーどうしよう！

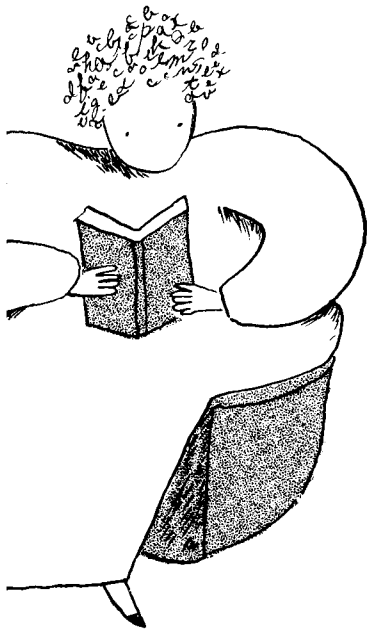
先のことが考えられず、その場に臨んでからコトの重大さに気付くのは私の悪いところだが、しかしこれだけは期限がない。こまったなあ！と深く悩んでしまった。

私が生きたのに気付いて母がニコニコしながら近づいてきた。

「カエル」

「ええ？　なんのこと？」

「赤ちゃんカエルみたいな顔してるよ」姉という母といい、私の身内は人の気持ちも知らないでとんでもないこと



を言う。

しばらくして私も新生児室にそのカエルを見にいった。付き添ってきた母が、「それ、それ」と指差しながら「な、カエルやろ？」と自分の見立てに間違いないことを自慢する。

「ホント、カエルやね」

あたりを見回してみると、どうも他の子のほうが可愛い。あっちの子のほうがよかったなあ——などとまるで作品展覧会を見るような気持ちで初めての我が子と対面した。

本を読んでも、テレビの芸能人の出産の喜び記者会見を見ても、誰でも異口同音に「とっても感動しました」と

か「母になった喜びが湧いてきました」とか言っている。だからそんなもんだ

と思っただけに、いたいこれは何だ！　私は陣痛のときも、子どものことより早く痛みから解放されることしか考えていなかったし、産まれたら今度は子どもを忘れてとととと帰るようになるし、挙げ句の果てにはあっちの子のほうがよかったなんて、わたしってオ・カ・シ・イ。わたしってヘン！

夕方夫が病院にきた。

「真っ赤な顔だね、赤ちゃんって。なんか変な顔だよ」

おとうさんとしての自覚を全く感じさせない言葉を残して、名古屋に帰っていった。

初めて子どもを抱いてオッパイを飲ませるときも、ただはずかしくて「ほんとに私この子の親として一生暮らすの？」と、子どものほうから逃げ出したいような情けないことを考えたりしていた。

そんな私も一週間の入院を終え退院

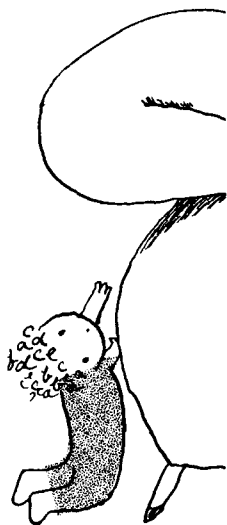
するころには、日に日に可愛くなつていく我が子に満足し、一か月検診で再びこの病院を訪れるときには、母も私もすでにばバカ、親バカに変身していた。

## （女性問題との出会い）

一年半後もうひとり男の子を産み、幼い子どもをふたり抱え、夜泣きが続くときは自分の母性を疑いながらも子供たちを溺愛していった。

しかし同じくらいの子どもをもった母親同士が集まっておしゃべりが始まると、私にとっては恐怖の出産感動物語が始まる。また話を合わせなければいけない。まさかあっちの子のほうがいいかと思ったなんてそんなこと言えやしない！

「そうよねえ、子どもを産むってカン



ドウよねえ」なんてことをヘラヘラと言いつながら「そうか、やっぱりみんなそうなのか。私ってやっぱりヘンなんだ」と確認していった。ところが、人間いつどこでどんな発見があるかわからないもので、公民館の編みもの教室に通ったことがきっかけになって、今までついぞ考えたこともない「女性問題」を考えるようになった。そこで知ったのは、母性神話は作られたものであること、そして私は女であると同時に、母であることと同時に、ひとりの人間であるということだった。

初めての出産のとき、人とおなじようなカンドウをしなかった自分をヘンだと思っていたのは、女には最初から母性が備わっていて子どもを産んだと同時にそれがフツフツと湧いてくるもの——といった間にか信じ込まされ

ていたからだだったのだ。母性神話が何のために作られたのかも知らず、甘く美しい言葉のひびきに負けて、私は自分の感性も自分自身も捨ててしまふところだった。

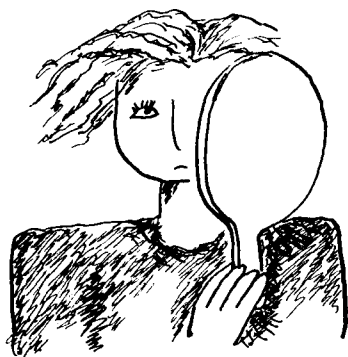
私は、私の人生を豊かに、そして大切に生きていきたいと思ったとき、そのとき初めて子どもたちをひとりの人間として大切に思えるようになった。

自分を犠牲にして子どものために生きることが子どもを大切にすることではない。また子どもは自分の夢や願いをかなえてくれる存在でもない。

私は私であり、子どもは子どもで、絶対の価値をもって子ども自身なのだ。そして夫も。

そして、その上でお互いがもっと豊かに暮らすために家族として一緒に暮らしていくのだと感じたとき、子供の存在がかけがえのないものになった。

今、私は子どもたちの人生と、私の人生を重ねていくこれからをとても楽しみにしている。



# カツラを 買ってあげる

東京都足立区  
としみ・坂田(47歳)

## (半人前の教師)

短大を出て、すぐ体育教師になった。二十歳そこそこの小娘が、血気盛んな中学生の担任になったものだから、父兄はいろいろ心配だったことだろう。

新米教師がいきなり中学二年の男女、四十二名の親がわりになったのだ。

学年の先生方もいつも気をつかってくれ、なんとか大きな失敗もなく過ごせたが、保護者会という今でいう父母会が、怖かった。自分の母親のような母親達に囲まれてしまうと、なぜか緊張してあがってしまうのだ。慣れないと言えどそれまでだが。

「まあ、お若い先生」とか、

「張り切っておられますね」などのお世辞ぐらいいは、話半分にきけるけれど、「なんとなく、頼りなくありません?」と言葉では言わないが、言いたそうな皆の眼がジッとそそがれると、冷や汗が流れた。

「やっぱりご自分で子供を育ててみなければ本当の先生にはなれないのよね」

と言う声が、耳元にきこえるようだ。直接私に言ったわけではないが、実際、今思えば行き届かなかった。

すっかり落ちこんでいる私を励ましてくれたのは、他ならぬクラスの子供達だった。

「どうして先生になったの?」

「そりゃ、子供が好きだからよ」

「一緒にバレーボールやろう」

「昼休み、場所とっておいてよ」と子供達なりに、元氣のない私を気づかせてくれたものだ。

私も自分の子供がほしいナァと思うようになったけれど、教師と泥棒は三日やったらやめられないの言葉通り、教師生活にどっぷりとつかってしまった。

持ち上がりといって、一年から二年、そして三年の卒業生を出して感激するという三年サイクルを二回くり返しているうちに、二十六歳をすぎてしまった。そのころ世間でいう、オールドミスになってしまふ。子供どころか結婚もできない。私はあせった。

しかしたで食う虫も好きずきなのか、隣の席の先生と、結婚することになった。担任の子供達も、

「先生よかったね、やったじゃん」と言ってくれたし、職場の皆が祝ってくれた。

私もほっとした。こんな私でもみていてくれた人がいたことがうれしかった。

はじめてのアパート暮らし。もどしたワカメがおなべいっぱいに入れてオロオロ、鍵を持つての生活も次第になじんできたけれど、次は「お子さんはいつですか」など、たびたび言われるようになった。よけいなおせっかいと言えなくもないが、二十代もあとわずかになってしまった。

三か月ぐらいして待望の妊娠をした。あまりつわりの苦しさもなく、林間学校やプールにも行ったりした。ところが、九月十七日の運動会の前日、夜中に激しい腹痛とともにあつという間に私の赤ちゃんは流れてしまった。

それからしばらくは、入院していた。

隣の部屋からきこえた新生児の「オギャーオギャー」という声が耳から離れず、立ち直れなかった。なんという不注意。やっとの思いで職場に戻った私に最初に声をかけたのは、またしても我がクラスのいたずらっ子。

「先生、ドンマイ、ドンマイ、俺たちがいるよ」

泣きそうな私をせいいっぱい励ましてくれた。それでも、電車の中でお腹の大きな人を見るときもうだめだった。やっぱり私は半人前の教師という思いが、胸をしめつけた。笑顔だけがとりの私の顔もひきつっていたと思う。

みかねた夫が、気分転換にヨーロッパ旅行に行くとうとプランをねった。私も暗やみからはい出るには、それもいいナーとやっと思えるようになった。予防接種に行く前日、調子が悪く、近くの医者に行った。「おめでたですよ、よかったですね」と。

私はポカンとして、自分の耳を疑った。

今度こそ我が子を手に抱きたいの一心で、ヨーロッパ旅行はとりやめ、大事をとった。

（母親になれなかったで半人前）

七月、鼻すじの通った娘をさずかった。バンザイ。これで一人前の教師になれるぞと思ったのは甘かった。

共働きの母親役は大変だった。母乳のころは夜中三時間おき、産休あけて九月の太陽を浴びたときはめまいを感じた。その上、断乳のガーゼからは時間があると、スタスタとあたたかい母乳が流れ、我が子と呼んでる気がした。フラフラしながら、仕事だけはきちんとやりたいという、私のギリギリの気持ちをもふにじる人事が起きた。二年生まで持ち上がったのに、中学三年生は持たせられないというところらしく、一年生におろされてしまったのである。ショックであった。

せっかく一人前になれたと思ったのに、子育て中の女教師は半人前あつか

いなのだ。また新卒のころに逆もどり、あー、どうしてこう女だけ貧乏くじなの？

ああもう本当にこのかわいい我が子とずーっと一緒にいられる専業主婦になってみようか。そんな気持ちの私に、ピンクの封筒が届いた。

「私は先生のような体育の教師になりたいです。いろいろ教えて下さい」

ああまた負うた子に教えられたのだ。二人目の男の子を育てるときも大変だった。二つ違いとはいえ、おしめのやっとなれた子がスカートをつかみ、ゼンソク気味の気むずかしい男の子を抱いての買い物なんて、肩が張って、もうビニール袋を投げだしたくらいだった。

疲れはててうたたねをして、しばらくして気がつくと、夫が二人の子をおフロに入れて食事をさせてくれていた。うれしかった。私ばかりと不満いっぱい態度をとっていた自分に、はっと気がついた。

あのころ、生活指導主任をまかされ

ていた夫は、毎晩帰りもおそく、あたりにどころのない私はヒステリー気味だった。

おひなさま、男の子のカブトも両方の親から贈られ、だんだん家庭らしくなってきた。しかし時間におわれる生活は、いろいろなところでひずみをおこした。

娘の扁桃腺手術のときは、病院から学校に通った。息子のヘルニア手術のときもそうだ。保育園が二人一緒に入れず、二か所をかけめぐったこともある。門にしがみついて、泣きさけぶ声を振り払うようにして、勤めにいくと

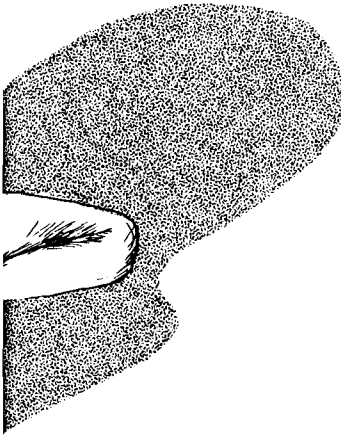
きは、こちらのほうが泣きたいくらいだった。幸い車の免許をとっておいたので、フル回転だ。

そろそろまた三年担任を持てるかなと思うころ、長男の保育園から呼ばれた。

「ときどきひきつけを起こすので、心臓を調べて下さい。保障できかねます」

わらをもつかむ思いで調べてもらったところ「異常なし」、ほっとしてお世話になっている女性の園長に報告したところ、

「お母さん、三分でいいですから、他のこと一切考えないで、お子さんをじっ





と抱きしめてあげて下さいね。子育て期間は短いんですよ」と静かだが、リンとした声でさとされた。

私ははっと気がついた。忙しい、忙しいが口グセで、次々かたづけていかないと一日がまわらなかつた。そんな親のセカセカした心が、幼い子供に深く影響していたのだ。私は自分から、三年担任をあきらめた。

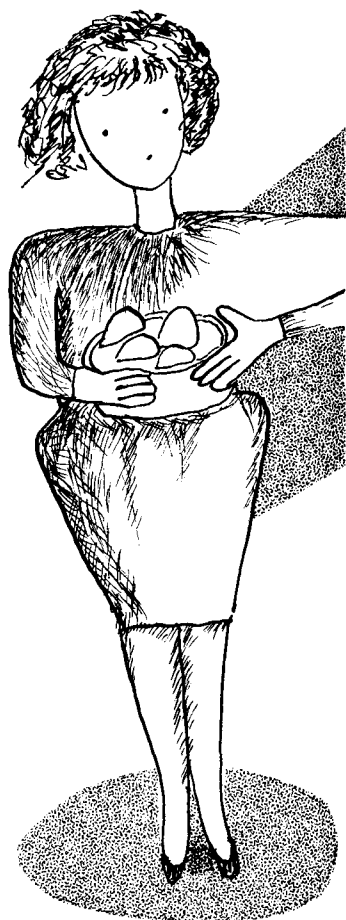
# （風 当 た り の 強 い 母 親 教 師）

しかし、子持ちで、なにかと言えば我が子優先のような女教師への風あたりは厳しかった。

「給料は同じなんだから、手伝ってほしいよナ。だから、女はだめなんだ」とか、

「女の担任って、だめよネ。何かというと早く帰ってしまつて、頼りにならない」など当たっている面もあるのである論できない。

もう本当に、限界だ。辞めよう。あっちこっちに「スミマセン、お先に」と



いうつらい言葉を使いたくない。同僚の女教師達は何くれとなくかばつてくれたり、励ましてくれたけれど、私の心は半ば決まりかかつた。もういい。

そんなある夜、クラススの母親がたずねてきた。「先生、肉ジャガとギョーザを娘とつくつたんです。そうしたら、先生のところに届けてと言つて塾に行つたんですよ」と湯気のたつ、タッパージュエアーを二つとり出した。私は不覚にもお礼を言うより泣いてしまった。先日、偶然、娘の靴をはいた。おしゃれな高一の娘の靴は、私にはもうブカブカである。息子は、もちろん私より

背が高い。あーよく育ってくれたなあーとしみじみと実感した。二人でしょっちゅうケンカもするけれど、仲よく笑いあつたりしている。

やっとこれで一人前の教師に本当になれたと思ったら、父が亡くなり、母が入院してしまった。ここ一番、母の世話はしなくてはと思つている私に息子が言った。

「母さん、僕が今度カツラを買つてあげるから、それまで大好きな学校でがんばりな」最近、私はぬけ毛を気にしていたのだ。

（え・田沼千恵）

# おれいじゃあねえち。

東京都国分寺市 たまき久美

十月X日 夜九時半

我が家の近くに某雑誌社デスクがお出ましになるという。フラフラ、フリーの身にとって、誠に光栄なことである。私は車をとばし、せかせかと駅ビル駐車場に車を残し、彼女に会いに出掛けた。

打ち合わせに女同士の語らいが入って、別れたのは十一時すぎ。戻ってきてみると、アレエ、駐車場が閉まっている。あゝあ、安い仕事して、これじゃあんまりだ。しょうがない。タクシーで帰るとするか。

「車で行くならくれぐれも気をつけるように」といった、うるさい亭主には内緒だ。

十月Y日 朝九時

保育園に娘を送ったその足で、駐車場に

車を取りに行く。駅ビル駐車場の入り口は、ご多分にもれず無人。出口にある事務所の窓口に近い。出口前の掃除をしている高年の警備員。窓口は中年、そばに若い体格のいい男。いずれも警備員の制服を着ている（そう、あなたの読みは正しい。私はこの方たちと、朝っぱらからひと悶着起こしたのだ）。

窓口に近づくと、B4サイズのはり紙が見えた。

「当社第〇条〇項の規定により翌日出車の際は五千円申し受けます」

金額だけは赤字でなぞってある。出口にだけこんなもの書いてどうするんだ！

ただでさえ、勝手に気分を害している気の短い私は、事務所の窓口にいるおじちゃ

んにつかかった。はり紙を指して、

「おたくはこういうことなさるんですか！」

するとおじちゃんも売り言葉に買い言葉。

「こういうことするって、どういふことだ！

ものごとにはキソクというものがあるんだ。

その決まりは守らなきゃならんのだ」

「その決まりはおたくが勝手に決めたものだといってるんです！」

「わからん人だな。勝手じゃない。会社の規則なんだ！」

「その規則は利用者からすれば会社が勝手に決めたにすぎないといってるんです！」

それにこういうことは、出口にだけポソボソ書かずに入り口にも書いてほしいでしょ。

閉場時間だってちゃんと書いてないじゃありませんか」

横にいた体格のいい若い男が口をはさんだ(後で聞けば大学生のバートなのだそう)だ。

「ちゃんと書いてあるじゃないか。見なかったのか。見なかったのなら、どこに書いてあるか見せてやるから来い!」

(おのれ、腕力に身を任せて生きてるから、口のきき方を知らないな)

「そんなもの、どこに書いてあるのよ!」  
そう言ってバカの後についていくバカ。

駐車場の入り口と入車カード発行機から一メートル近く離れたところにプラスチックの板。横五十センチ、縦一メートルほどの大きさの板に、数十行にわたる規定が書いてある。一字の直径が三センチもないような黒字で確かに営業時間は書かれていた。しかし「五千元」とはどこにも書かれていない。

「これが見えないのか!」

「車の中から、こんな小さな字がどうして見えるのよ!」

「見えるはずだ! この字が見えないような奴は運転なんかするな」

オノレエ、コヤツツ!

「五千元はどこにも書いてないじゃないの!」

「ウルサイ!」

「ウルサイとは何だ!」

事務所の窓口に戻りながら、怒鳴りあう。窓口の前に戻っておじちゃんに言う。

「駅ビルの管理事務所の電話番号を教えてください!」

おじちゃんはどうやらこの責任者らしい。怒鳴りあいを聞いて、コリヤイカンと冷静になったようだ。

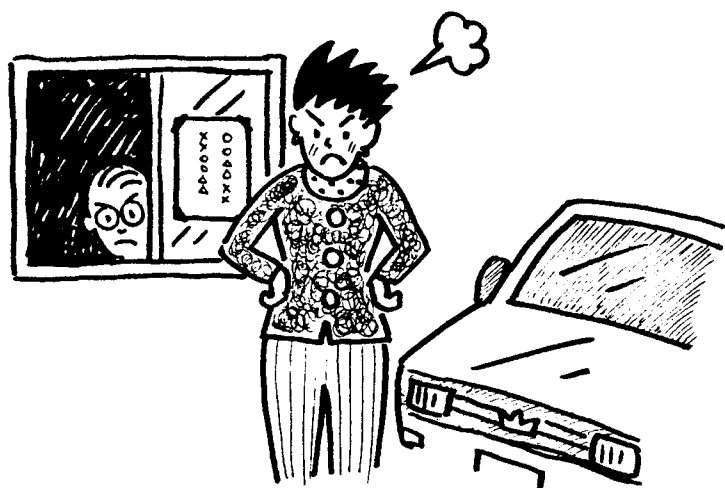
「今、調べますから、ちょっと待って下さい。内線番号ならわかるのですが、事務所はまだ開いていませんし」

あっちこっち調べている。時間がかかりそうだ。その間も若い奴は聞こえよがしに言っている。

「自分の非を認めずに……」

言葉にならないブツブツの中身は「女は」か「おばさん」か。男だったらこういう仕儀になっても文句を言わないとでもいうのか。男だったら、言葉じゃ済まないね。私に言ったことと同じことをもし男に言ったら、傷害事件になるんじゃないの。

それでも、とにかくお互い口に出さないことはひとつずつあった。むこうは「女のくせに」か「女というものは」であり、こちらは「客に向かって」という言葉である。



まだ電話番号がわからないらしい。ほんとにおじちゃん、しっかりしてよ！ うろたえてしまっているのだろうか。まさか！最初にケンカをかったのはおじちゃんなのに。

時間がかかりそうだ。その間に車を取りに行き、窓口の前に置く。車から降りてしばらく待つ。まだおじちゃんはウロウロしている。

これでは後ろから車が出てきたら迷惑になりそうだ。ビルの出口の邪魔にならないところに車を寄せよう。ビルの出口ぎりぎりまで、と車を徐行させ始めた。

「逃げるな！」

その途端、後ろから若い奴が怒鳴った。同時に駐車場の前を掃除していた高齢者も

「逃げるな」と叫んで箒で車の前をふさぐ。（このほうは元警察官なのだそうだ）

私、ワナワナ怒りで震えながら車から出て、

「逃げるなどは何だっ！ 失礼な！ いいかげんにしろっ！」

若い奴、

「金を払えっ！」

頭に血が昇りきって、私、

「払うわよ。払やいいんでしょ！」

事務所の中へ入って、うろたえているおじちゃんに問題の五千円を支払った。怒りで手が震えていた。もう、金の問題ではなくなっている。

クソォーッ！ このままでは済まさないからな！

領収書をくれながら、おじちゃん。

「すみません。最近電話番号が変わったものですから」

私だって電話番号くらい調べられるが「こちらで調べます、はい、さようなら」というわけにはいかない。

車のそばで待っているとやっぱり後続車が来た。

若いバカがまた怒鳴る。

「その車、邪魔だ、どけっ！」

「どけとはなんだ！」

「そういう奴にはどけでいいんだっ！」

「ナニイッ！ 口を慎めッ！」

私は幾度めかの怒りに体を震わせながら、とにかく後続車の邪魔になるからとビルの外へ出た。

車を降りてあのバカのほうを見ると、後続車の男と顔見知りらしく二人でこちらを向いて「へえ」とでも言うように嗤（わら）っている。

固く心に誓う。

このままで済むと思うなよ。女だと思っ  
てなめんじゃねえよ！

あのおじちゃんは、電話番号を調べるの



になにを手間取ってんだらう。時間稼ぎをする必要もないはずだし。

結局、交替にやってきた警備保障の車の中のオニイサンに電話番号を聞いた。

十月Y日 朝十時

カッカしながら、住まいに戻る。エレベーターホールの前で私を待ってくれていた人がいる。

「お茶に誘おうかと思って、待ち伏せしてたのよ。〇〇さんも来るんだけど、今日、仕事かしら?」

「十一時には出なきゃなんないんだけど、それまでいい? 私、今、カッカ来てるから、気をしずめないと仕事に行けない」「ワァ、どうしたの。おもしろそう」



ナスツ?というわけで事の顛末を二人に話す。

Aさんは「私も責任者出てこい」タイプだからよくわかる」

Bさんは「私だったら、『え〜っ』とか言いながら五千円払って、後ですつとグチュグチュ言うのよねえ」  
とのこと。

結局、その友人宅からビル会社に電話することになった。ビルの管理課の職員はお説ごもつともと私の話を聞いた。

「最後にもう一度申し上げますと、カードの発行機の上などの見やすい場所に、閉場時間とそれに遅れた場合の措置を大きく明記していただきたいことが一点。もう一点は、委託であっても、警備員の教育をしつ

かりしていただきたいということです」

「ご忠告、大変有難うございます。恐れ入りますがお名前を伺わせていただけませんかでしょうか」

私は名を名乗り、自宅の電話番号を知らせた。聞かれもしないのに、電話番号を言った意味、ちゃんと理解してるんでしょうね。そっちら改めて電話を寄越せと言っているんだからねっ! 私は「ご忠告」のために電話をかけたわけじゃないんだから。

電話を置くと、友人たちが言う。

「しっかり、落ち着いて言ってたわよ。女のコヒステリーとは言わせない。さすが場慣れしてるっ」

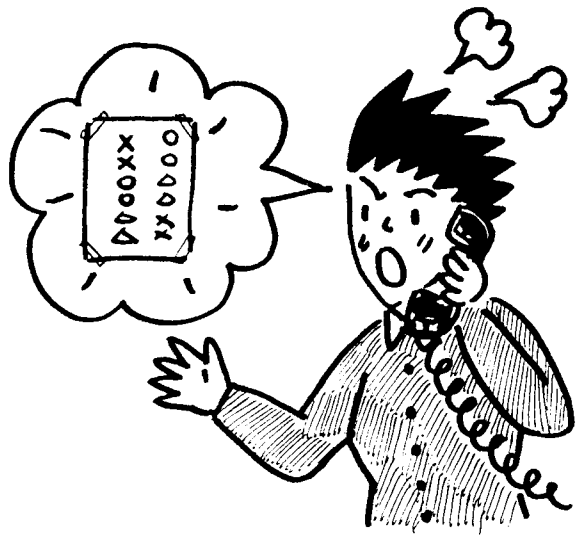
とおほめの言葉。そして言う。

「どうなったか、この結果教えてよね。楽しみにしてるから」

ブタもおだてりや木に登る。私は友人たちの声援と好奇と期待の眼差に見送られて、ちょいと溜飲をさげながら仕事に出掛けた。

十月Y日 午後五時半

仕事の帰りに娘を迎えに行き、勇んで家に帰った。今日ほど、留守電のメッセージ



を聞くのが楽しみだった日はない。  
ちょっとオー。駅ビルの管理課からの伝  
言入ってないよ。何してんのよ、ったく。  
親方日の丸だった元国鉄職員たちの会社と  
は言え、対応鈍いんじゃない。

電話をする。先刻の社員が出る。  
「今日三時ごろ、駐車場のほうへ参りまし

て、係の者に事情を聞いて参りました。確  
かにそちらさまがおっしゃったような事実  
はあったようでございます」

あほか！ そいで？

「大変申し訳ございませんでした。先程も  
申し上げましたように、私どもも駐車場の  
警備員に対する苦情が多くて大変困ってい  
るところでして。言い訳になりますが、人  
手不足で……」云々、かんぬん。そして、  
「これに懲りずにどうぞ、これからもご利  
用いただけますよう」

そう言われたって、もう懲りた。

それどころか、今の電話の応対にかすか  
な唾いのニュアンスを感じてしまったもん  
ネ。どうやら私が電話で「客に対して」を  
言ったように、警備員も「ものの道理がわ  
からん女が」と言ったとみえる。女のアン  
テナはこういうのに特別敏感なのだ。

クソォー！ ものの道理がわからん奴か  
どうか眼にモノ、見せてやろうじゃん！

ふつつつ勝手に沸き立つ私の感情、  
私は巳年でしたっこの。それでもって行  
動力あるの！

委託している警備会社の不行き届きだけ

にしてもらっては困るわね。ヒステリック  
に騒いだから、売り言葉に買い言葉になっ  
たと捉えるのはおかど違いだよ。

「何とおっしゃられてもお客様は神さまな  
のだから、と言っていました」  
だって。

神様であるらしい（私は神様どころか人  
間扱いもされなかったと思うけど）客が、  
最初になぜつかかったか、その原因をよ  
く認識していないようね。

よし、問題点がはっきりした。あの五千  
円が妥当かどうか、調べようじゃん！

「荻窪ルミネ」「吉祥寺ロンロン」「立川  
I.L.I.」「西武所沢」

近隣のこれらの駅ビル駐車場で、翌日出  
車に到った際の料金の規定を電話で問い合  
わせる。

いずれも、罰則的料金を設けていない。  
閉場時も開場時同様の計算をして、料金を  
支払うことになっている。

やったあ、これなら戦える、戦うなら  
口じゃダメよね。文書じゃなきゃ。

決まり！

またビルの管理事務所に電話する。

「他の駅ビルの状況を少し調べてみましたので、明日その資料を持ってお伺いいたします。どうぞ、よろしく」

もう七時になってしまった。かわゆい子どもたちがおなかをすかせて待っている。さあ、夕ご飯の支度しましょ。遅くなってゴメン。

## 十月Y日 夜十一時

ワープロで文書を打つ。要求項目は三つ。

- 閉場時間とそれに遅れた際の措置を、わかりやすい位置に大きく掲示する

- 「翌日出車五千元」の規定見直しを求める（近隣の駅ビルの規定を付記）

- 貴社ならびに委託する警備会社の被雇用者教育、モラルの徹底

以上の件について検討し、その結果を文書で報告願いたい。

文書はそんな主旨にした。

## 十月Z日 朝十時

そろそろ駅ビルに出掛けるべい、と支度を始めたときに電話が鳴った。

「〇〇駅ビルでございます。今からそちら

に伺いたいのですが」

「午前中に伺うと、昨日申し上げましたので私のほうから参ります」

「いえ、ぜひその前に」

「結構でございます」

押し問答の末に、出掛ける時間が省けるかと折れる。

三十分を過ぎたころ、二人の男がやってきた。一人は管理部長、もう一人は駐車場直接の担当者である係長。どちらも昨日の電話の相手ではない。彼らの謝罪が済んだあと、私は昨夜の力作(?)の文書をテーブルに広げた。彼らはちよつとギョツとしていた。

付け加えておくと、こちらも二人。昨日の友人たちではない人が偶然立ち合うことになった。

要求事項をさしながら、説明していく。

「五千元」の件になった。どうも部長のほうか飲み込みが悪いようだ。部長という職におつきになる輩は、話し合いの事項が理解できていても、内容を巧みにそらす高等技術を持つ方も多いらしいが、彼のはテクニクというわけでもなさそうだ。それな

ら噛み砕いて説明しようじゃないの。

「五千元が高すぎると言っているわけではないんです。例えば、荻窪のように都心に近い駐車場は一時間六百円ですから、十時間では六千円になります。五千円より高いですよ。それでも利用者は納得して払うと思います。時間通りの計算ですから」

「またよくございませうね。個人経営の駐車場で『無断駐車壹万円』というようなのは紙が。経営者のモラル（ほんとうはレベルと言いたかったが、心やさしい私は言えなかった）の低さがみえるようなはり紙だと思ふのですが、お宅様のなさり方もそれと同様でいらっしゃる。そしてそんな垢抜けないご商売を中央線や武蔵野線沿線の駅ビルはどちらもなさっていないということですよ」

どうやらわかったようだ。それでもまだ見当違いのことを言っておる。

「一応、私が責任者なんです、この規定は誰が作ったかわからない」だの、「資料の中の某駅ビルは警視庁から構造上の問題を度々注意されている」だの。

信頼に足る業者に委託できないのなら、

トラブルのもとになる規約を変えるのが賢明であろうという主旨が果たしてどこまで伝わったか、まだいささか不安ではある。

しかし、このあたりになると勝ちの気配が色濃い。もちろん私がどんな態度を取ろうと、彼らは頭を下げに来たのだから謝り続けるだろうが、こちらとしては納得して頭を下げてもらわねば、意味がない。

文書の最後に「以上の件に関して、検討の結果を文書で報告していただきたい」と記した。

「これらの件に関しましては、即答いただける問題ではないと思っております。期限は切りませんが、一か月もあればご検討いただけるでしょうか。その際には文書でご報告下さい」

ハハッと彼らは言って（ちよっと大げさだけど）、部長がその紙をポケットに入れた（なくさないでね。文書登録してあるから、いくらでも送れるけど）。

それから部長はうやうやしく、大きな包みを差し出した。

「どうぞ、お納めくださいますよう」

「いいえ、こういうものを頂いたら、私、

自分がヤクザみたいに思えてきますから、結構でございます」

「いえ、いえ、これはもう、よそさまのお宅にお伺いするときの常識のようなものでございますから」

「いえ、この結果を文書でお知らせいただければ、それで充分でございます」

「んでもございませぬ。資料まで揃えていただき、私どももいい勉強をさせていただきました。これは勉強代でございます」

「では、一旦頂きまして、この件を検討していただくときの会議のお茶菓子になさってください。これは改めて私のほうから差しあげます」

漫才のようなやりとりを真剣にした末、  
「どうしても持って帰れない」  
と、彼らはそれを置いていった。

「それでは、後日改めてこちらから何かを持参しなければなりませんから」と言ったのに。

中身は大味なクッキーだった。

電話で、この顚末を友人に報告した。  
すると彼女は言う。

「まづくったって何だっていいわよ。勝利

のクッキーなんだから。それ、冷凍庫に入れているよ。私、ケンカしたくなったら、そのクッキー、力餅がわりに食べに行くからサ」  
—— 嗚呼、類は友を呼ぶ。

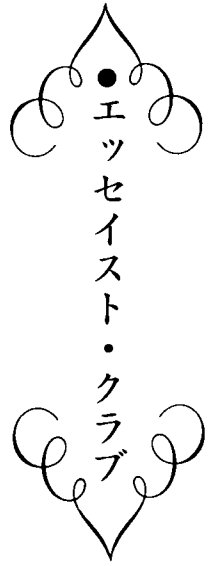
#### 付記

一週間近くたち、電車を使って私は駅ビルに出掛けた。駅ビル地下で小さい上等な菓子を買ひ、事務所に持参した（バカバカしいこの一件で私はまた無駄金を使った。が、私がねじり鉢巻きで稼いだ金だ。誰に遠慮がいるものか）。

部長は「会議」で席をはずしていたので、メモをつけて受付に置いた。その夜、帰宅すると留守番電話にメッセージが入っていた。また電話をするとの由。翌日、電話があった。不在の詫を述べ、  
「ご指摘のありました項目を初め、駐車場の経営や規定について大幅な再検討を致しているところでございます」  
部長はそう言った。

（え・山田京子）





## 出窓

大阪市東淀川区 小林 千歳

東に面したその出窓には、いつも花があった。物心ついてから三十数年間変わることなく、そこには切花か鉢植えが飾られていた。ところが、突然に花は消えた。

母が急逝して父と猫だけになったのだ。しばらくして、弟夫婦が小猫と犬二匹を連れて同居した。思いがけない悲しみの後だけに、この急な同居は遠く離れて住む私を何より安心させてくれた。だが、時々帰ってみると三人と四匹の葛藤は、生

活の中にじわじわと広がっていた。

先住の猫が、ちょこまかする子猫をうるさがっていきり立つ。それに犬が加わって、それぞれが牽制し合う。犬ぎらいの父がそれらを叱りとばす。しかし犬や猫は感情のままにふるまうせいか、じゃれ合うようになるまでに時間はかからなかった。

問題は人間たちのほうだった。生前の母が、「信男兵の古手は、目端がききすぎて困る」と私にこぼしていたくらいだから、海軍上がりの父にとって、若い弟夫婦との生活は相当にがまんを強いられたようである。ひっくり返せば、二人だけの気楽な暮らしに舅の存在は、それなりに気の重いことだろう。

ふだんの電話や手紙のやりとりでは、とても推測できないこれらの葛藤を、帰るたび目の当たりにしても、私には母の加護にすがってただ見守るしかない。



それでも一周忌がくるころには、父が犬の散歩を日課にするようになっていた。そして出窓には、義妹が博多人形を飾ったり、ぬいぐるみを置いたりし始めた。

やれやれと思う間もなく、同居二年目で弟は転勤になった。出窓には店屋物の空食器や古新聞、雑誌が積まれるようになった。ほこりもいっしょに積もりだした。

私は月に一度、様子を見に帰るのが精いっぱいだった。六十三歳という年齢と元海軍兵の気骨を頼りに、父を信じて月末がくると新幹線に乗った。ある時、出窓の隅にボタンを見つけた。シャツのボタン、パジャマのボタン、ホックと五つ六つが一行に並んでいた。とれたボタンを父がひと所に集めておいたのだ。口では何も言わない父だが、この不揃いのボタンの列には淋しさが並んでいるようで、泣けた。

一年もすると、父はすっかりひと通りの家事をこなせるようになった。

今年の夏、出窓には八体の仏像が並んだ。長年の趣味だった木彫に本腰を入れてまる四年。やっと父は公民館や森林センターで教えられるようになった。

この生活もいつまで続くかわからない。不安は

大きい。心配ばかりしても始まらない。これから先、父が出窓に並べる物をじっくり見据えていこうと思っている。

## 綿の種

東京都武蔵野市 福田由利子(73歳)

大阪の富田林に住む夫の友人M氏から、綿の種なるものを送って来た。

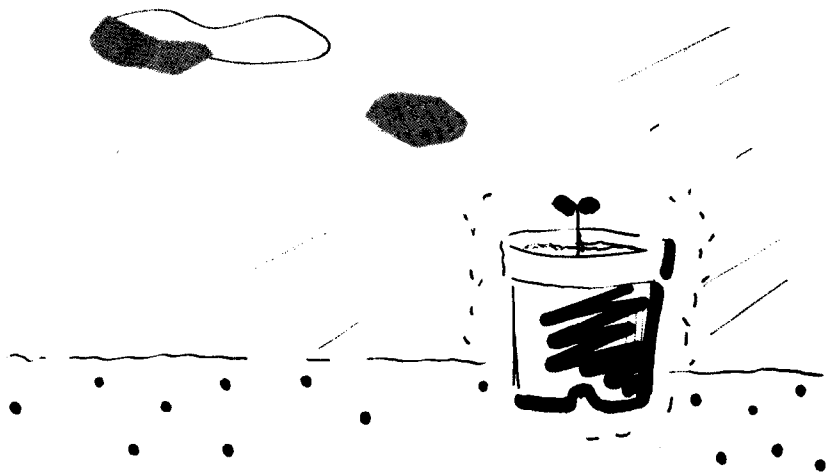
「市役所から綿の種を配布されました。貴兄の庭にも植えて下さい。夏には花が咲き綿もできます云々」とあった。四月の始めだった。

五粒の種は正露丸より心持ち大きく、黒くかたくて、表面はざらざらしていた。

猫の額ほどのわが家の庭には、とても綿を栽培するほどの余地はない。しかしせっかくの種をそのままにするのも申し訳なく、また一度も見たことのない綿の花も見なかった。

ともかくありあわせの素焼の朝顔鉢二つに一粒ずつ、残りの三粒は細長いプランターに並べて埋めた。八十八夜のころである。五つの種はそれから八日後そろって双葉を出した。

夫はそのことをMさんに知らせたが、十日過ぎ



でも返事がない。Mさんからの返信がこんなに間遠になったためしは、かつてない。

去年夫人に先立たれ、四百坪とかの広い家に独り住まいのMさんは病弱である。夫は彼の急病を心配した。

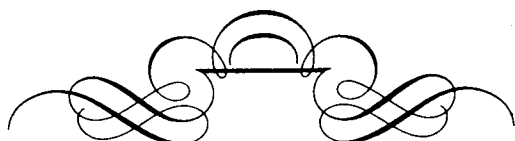
そんな折、同じ級友である吹田市のY氏から「このところMからの電話応答なし、君は何か様子を知らないか」と言ってきた。

多分に友人達から変人だと言われているMさんは、電話はY氏のみ、文通は夫だけとのことだった。

それから十日余りしてY氏から「Mは四国遍路に行ったらしい」と電話があった。「一言言って行けばいいものを、おかしい奴だ」と怒りながらも、遍路ならばと安堵した様子だった。夫は旅先からのMさんの便りを心待ちした。

綿の茎は蒼くみずみずしく、竹の菜箸ほどの太さで、真つすぐ七十センチほどに伸び、幼児の掌ほどの葉も繁ったが、それは私の想像していた綿の木とはかなり違い、いかにも弱々しい感じのものだった。

七月になってもMさんの消息は不明だった。私は毎日綿の木に話しかけ水をやった。悪い予感を打ち消しながら、Mさんの無事を祈った。



夫の急病に取りまぎれ、気が付いたときにはプランターの綿の木は水が切れ、八月の猛暑に、茎の先まで枯れてしまっていた。

鉢の二本は鉢底の穴から庭土に根を下ろし、生き延びてくれた。私は枯らした三本にわびを言い、鉢の二本に感謝し礼を言った。葉かげに小さなつぼみが二つついていた。

それから間もなくつぼみは花になった。花は茶の花ほどの大きさで、五弁の黄色の花びらは桜紙の様にうすく、少しの風にも破れそうだった。花は朝開き夕方にはしぼみ、三日もすると茶色に枯れていった。そして青い実ができた。

Mさん死亡の知らせを受けたのは、未だ残暑の去らぬ九月半だった。Mさんは四月十五日の早朝、徳島の第一札所近くの路上で亡くなっていた由、身元を証明する物は何もなく死因に不審な点もないため、行路病者としてだびに付され、遺骨は近くの寺に預けられてあった。七月初めM氏の息子さんが、警察へ捜索願いを出してから二か月余のことである。

花が枯れてから綿の木は少しずつ勢いをなくし、花のあとにできた青い実も色づき割れた。割れた実の中に黒い種が残った。種はMさんから送られた物より小さかった。そしてその黒い種を包むよ

うに、また種から吹き出したようにも見えるほんの少しの綿ができていた。少しねばり気を持った真白い綿は、はかなげだった。私はそれを小さな盆にのせ夫に見せた。

夫は無言でうなずき目に涙をためた。

「Mさん、ご冥福をお祈りします」私は写真でしか知らない夫の旧友にあいさつし、降るように花を散らす百日紅の根方に、綿をかざった二つの種をうめた。

## 娘の結納の日

大阪府豊中市 中松ミナ子(54歳)

この秋一番の秋晴れの今日は娘の結納の日であった。

商売では今までに実にさまざまな会席料理を作ってきたけれど、娘の結納の祝膳となるとかなり気を遣って、夫と息子はあれこれ縁起ものを揃えて献立を考えて今日に備えたのである。

約束の十一時、K家の三人が到着(仲人は結婚式当日のみ)、目礼を交わし座敷に通り三人はゴソゴソ結納品を飾りはじめる。

われわれが、せっせと料理の鉢を膳に並べてい

ると早くも飾りつけて完了。両家が向かい合って座し、お父様から「このたびは、ご丹精されたお嬢様を……」と形通りの口上を受け夫も「ごていねいなお言葉と……幾久しく受納させていただきます」で儀式はとどこおりなく済んだ。

そしていよいよわが家特製(?)の祝膳が両家六人の前に並べられ「乾杯!」。

弟が今日のために地元の名酒「真春」を届けてくれたが「ええ酒ですなァ」とあちらのお父様。汗ばむほどの室内にクーラーがようやく効き、最初の冷酒はのどに心地よいものだったようだ。



よく「同じ釜のメシを食った仲」と親しさを表現するが、こうして祝膳と一緒にするとつい幼い日の我が子の思い出話をお互いが披露したり、若い二人の幸せを祈ったり、すっかり打ちとけてほつとする。

写真を撮り合い「結納」はめでたく終わった。若い二人は今日を記念して京都へ出かけると言い、これを機にK家の両親も帰られた。

店を気にして飛び出していった夫の礼服を片づけ、床の間の結納の品が秋晴れの澄み切った光を受けて華やかに並ぶのをしばらくジッと見つめていると、(ああ娘もお嫁に行くのだ)と感慨無量だった。

しかしそれは束の間のことですぐさま、いよいよ夫と私のための残り人生到来なのだ!と叫びたいほどの解放感が心にひろがる。来春の結婚式が無事済むと本格的に息子夫婦に商売のすべてを任せることになっている。

そして私たちは夫の郷里へ移り住み、今まで働きづくめで疲れ果てた心身をゆっくり休める計画でいるのだ。万歳! 万歳!

三月三日の結婚式まで四か月余り……中身の濃い母娘ゲンカをくり返しておこう。

(え・カステラネンコ)

# 祖母のいた日々

ある共働き家庭の二十五年

埼玉県所沢市 葉田野妙子

明治二十七年（一八九四年）生まれの祖母が八十歳で他界してから十六年、私達姉妹は、今でも会えば、いつの間にか祖母の話をしている。祖母を懐かしむ気持ち達が私達の絆なのかもしれないとこのごろ思う。

共働きの娘夫婦を支え続けて二十五年余り。三人の孫を育て上げ、末の孫が大学に合格して上京するのを見届けるようにして床に伏し、それからわずか二か月後に息をひきとった祖母。自分に課した役目を果たし終え、静かに眠りについた祖母。私の記憶の中に生きているその姿をたどってみた。

## 女手一つで二人の娘を

祖母は、九州の田舎町で材木屋を営んでいた曾祖父母の末娘として生まれた。曾祖母が進んだ人

で、当時の田舎では珍しく、四人の娘は皆東京の女学校へ行っている。祖母は東京で和裁を学んだあと、家に戻ってしばらく小学校の教員をしたことがあるという。祖母とあまり年の違わない老婦人が、時折「先生」と訪ねて来ていたのは、そのときの教え子だそう。二人の姉は早世し、もう一人は他所へ嫁した。祖母は婿を迎えて家を継いだ。夫婦仲はよかったのに養子の夫と父親との折り合いが悪く、泣く泣く離縁して夫は家を出て行った。長女（私の母）が三歳、次女が生まれて間もないころだったそう。

以来、祖母は曾祖父の下で家業を手伝いながら二人の娘を育てていたが、両親の死後は商売はやめて、残された家作や土地を貸したり売ったりして生活していたらしい。これらは、祖母の生前にはほとんど知らないことばかりで、葬式に集まっ

た親戚の口から聞いたものだ。祖父に当たる人の話題は、我が家では何となく避けられていて、私もいぶかしく思いつながら、一度も尋ねたことはなかったのだ。

やがて、母は近隣のN市の高女を卒業すると、東京女子専門学校（現、東京家政大学）へ進学し、三年間を寄宿舎で送ることになった。母の妹はすでに十二歳のとき、N市に嫁いだ祖母の姉の家へ養女としてもらわれていたので、家には祖母一人が残ることになる。

当時のことを祖母から聞いたことがある。「わたしはあの子をどうしても学校の先生にしたかった。自分で食べていけるように。あるとき、近所の医者と呼ばれて、娘を一人で東京になど出すもんじゃないと説教されたけど、いいえ、行かせますときっぱり言ってやったよ」

戦前の社会にあって、しかも田舎（九州）の家に母親一人残る事情を考えると、そのときの決意のほどがうかがえる。

母は二十歳で帰郷すると、県立高女に赴任した。その年に太平洋戦争が始まる。敗戦までの三か月間、母は学徒動員の引率者として学校に泊まり込み、八十人の女学生とともに工場で労働したり、戦火の中を逃げ回ったりしたという。

戦後、新制高校となったN市の母校に転動した母は、別の高校の教員だった父と結婚し、実家で祖母との三人の生活が始まった。一九四九年（昭和二十四年）、元日のことだ。父、母ともに二十七歳だった。

その年の秋に私が生まれる。当時としては女性の労働条件に恵まれた職場であった学校も、今ほどには産前産後の休みは長くない。冬が近づいていた。

産休が明けると、祖母はねんねこばんでんに赤ん坊をおおい、母と一緒にまだ明けやらぬ道を駅まで歩き、汽車で三十分ぐらいのN市まで通うことにした。N市に着くと母は学校へ直行、祖母は市内の姉夫婦の家に赤ん坊を預けると、また同じ道を戻る。この家の夫婦も高齢であったが、ともに教育者で、昼間は養女である母の妹が一人で私の世話をした。

頼まれたらイヤと言えない気持ちの優しい、朗らかなこの叔母に、幼いころとても可愛がってもらった記憶がある。多分、若い叔母なりに精一杯赤ん坊を世話したのだろう。昼になると、乳児を抱いて学校へ。母は人の来ない昇降口の石段に腰かけて乳をふくませる。このときのことを、少女時代を別々の家で過ごした姉妹の、数少ない語ら

いのひとときでもあった、と後に叔母が話してくれたことがある。夕方、勤めを終えた母が、叔母の家に寄って赤ん坊を受け取り、おんぶして汽車で帰宅。この母娘三人のチームワークで、数か月間の授乳期を乗り切ったのだそうだ。

三年後に妹が生まれたときは、朝夕は母一人で子連れ通勤をした。末の妹のときは、さすがにこの通勤リレーに疲れたとみえて、粉ミルクで育てることにした。一九五五年（昭和三十年）生まれ。ヒ素ミルク事件の被害者と同世代である。

## 田舎の暮らし

祖母は家事一切を引き受け、孫をみながら裏庭で鶏を飼い、三か所の畑で野菜を作っていた。土間の勝手で、かまどで飯を炊き、つるべの井戸で水を汲み、あるいは、肥桶を天秤棒でかついで畑に運んだ。卵と野菜は季節を通じてほとんど自給だった。六十歳近い祖母が一人でこれだけの仕事をこなしていたとは、今の私には信じ難いことだ。

四歳になった私は、お寺が開いている保育園に入れられた。農繁期だけでも幼児を預かってくれるこの保育園は、共働きの我が家でも、祖母が四歳と一歳の幼児をかかえて今日の何倍もの家事をこなすには、願ってもないところだった。園児の

数は季節によって変わり、多いときは境内いっぱい子どもがあふれた。

この家での思い出に忘れられない場面がある。旧正月が近づくと、元日の丸もちとは違って長方形のしもちが木箱に入って並ぶ。食紅で桃色にそめたもの、くちなしの黄色、大豆の入ったもの、青のり、ゴマといういろいろあった。表面が乾いたところを見計らって、のしもちを端から数ミリ厚さに切り取る作業は父の役目だった。皆の見守る中、のしもちの厚みを幅にして短冊にし、それをいくつかに切っ•かき•もちを作るのだ。切りたてのかきもちはまだ中のほうにねばりが残り、もち網の上でやわらかくふくれた。乾燥したものより、生乾きのときのほうがおいしかった。

翌日、保育園から帰るとすぐに奥の二階の部屋に行く。普段は怖くてめったに入らない部屋の戸





を開けると、そこは一面花畑。部屋の端から端に渡した棚に大きな平ざるをいくつも重ね、そこに前夜の色とりどりのかきもちが並べられている。うす暗い家の中の、そこだけはほの明るい春の華やきがかった。昔話のおじいさんが森の中で道に迷い、うぐいすに誘われてたどり着いた一軒の家の中で、そっと引き出しを開けると、そこに春の野が現われ出たときの驚きにも似ていた。乾燥したかきもちが缶につめられ、日もちのするおやつになった。

家の裏手を流れる川の堤防拡張工事で、裏庭や倉がひっかかることが分かり、N市に引越すことになったのは一九五六年(昭和三十一年)の夏、私が小学校一年のときである。はがした瓦や、柱、建具の大半をそのまま使い、ほとんど同じ間取りにして建て替えた家だった。前の家より明るかったのは、壁を白くしたのと、南面に広い廊下を配して、ガラス戸越しによく日が当たるからだだった。それまで渡り廊下の奥にあった台所や茶の間は、一間幅の廊下をはさんで居間や座敷とつながった。ここではガスも水道も通っていて、台所仕事はかなり楽になった。転居した当初はかまどで炊いたご飯も、まもなく電気釜の登場で、味も変わる。母は祖母の労働を少しでも軽くと思ってか、新し



い電化製品が売り出されるといち早く購入した。テレビが床の間に鎮座するようになると、家中が微妙に変わってきた。床の間から居間へ、そして茶の間へとテレビも年々移動する。食事中の視線が変わり、会話が減り、大人の話を知らぬ顔で聞くのが好きだった私は、ちよっぴり寂しくもあった。

祖母は、料理番組で当世風の料理を覚え、すもうの取り組みを帰宅した父に報告し、夕食後は、「お笑い三人組」に大笑いし、推理ドラマでは父と意見を交わし、俳優や歌手の名前もたくさん覚えた。新しい家でもやはり庭の一角に鶏舎を作って三、四羽飼っていたし、近くに八十坪ほどの畑も確保した。自分では食べない卵と、季節の野菜は、ここでも祖母の手によったのである。

祖母のいた日々

五右衛門風呂からタイル張りになっても、しばらくはまきで沸かす風呂だった。これも遠からずガス風呂になるのだが、懐かしい。父方の叔父の製材所から定期的なまきが運ばれてくる。庭の隅に積み上げておき、必要なときに父が斧で割る。祖母はそれをさらに小さく手折り、紙くずと一緒に焚付ける。日曜日の夕方、子ども達はそばでしゃぼん玉を飛ばしたり、まきの燃える匂いをかいだりして夕食前のひとときを過ごすのだった。そんなとき台所には母が立っていたのだろう。

## 祖母の仕事

学校から帰ると、祖母は何かしら面白そうな仕事をしていた。「見てごらん」とも「手伝え」とも言わない、ほとんど他の者を意識しない仕事ぶりだったと思う。あるときは庭で着物の洗い張りをしていた。またいつの季節か、収穫したごまを根付きのまま干し、砂の入った一升びんでさやをたたいて実を取り出す作業をしていた。ゴザの上にさらさらしたごまがはじけ飛ぶのを見て飽きることがなかった。

冬が近づくと、父の丹前の綿入れや、ねんねこばんてんをほどこいて子どもの布団作りに精を出した。布団にびろうどで衾カバーを付けたりもした。

前年の私達のセーターをほどこいて、やかんの口から出る蒸気で毛糸を伸ばしていたこともある。夕食後は、母と一緒に毛糸のかせを巻いて玉にする。お正月までには、少し大きくて、新しい毛糸が交ざって色合いが微妙に違ったセーターができるのだった。

何より嬉しかったのは、袖口のゴム編みがキュッとすばまって、身ごろも袖もふっくらとなることだった。祖母は余ったくず毛糸を集めてつなぎ、暇をみつけては編み棒を動かして何本も腰ひもを編んだ。この他にも自分と母の着物の仕立て、子ども達のゆかた作りなどはお手のものだった。そのころの私達の服はすべて母の手製である。



両親の帰宅時間は五時半ごろで、母は途中で買い物をするのか、毎日のように、キャラメルやチョコレートなどの「おみやげ」があった。夕食は六時。父は風呂から上がると、六時きっかり食卓に

つき、五分でも遅れると機嫌が悪くなった。

日中、学校で同じように仕事をして、帰宅してからの過ごし方は父と母とでまるで違う。父がテレビの前でうたた寝をしたり、碁の研究に余念がなかったり、本を読んだり、もっぱら自分のために時間を使えたのに比べると、母は、祖母の夏服、自分や子ども達の四季の服作りと休む間もなく手を動かしていた。母の踏むミシンの音を聞きながら眠ることもよくあった。

四十代の母は、肩がこる、足がむくむ、目が痛い、頭が痛いと言ぐせのように訴えるのだが、かといって勤めを休んだのは盲腸の手術をしたときくらいなもので、私達の学校行事のために休暇を取るなどということにはなかった。母は大変勤勉な先生であつたのだ。

入学式や卒業式を初め、家庭訪問、学芸会、授業参観などは祖母の役目で、そういうときの祖母の着物からはナフタリンの匂いがした。帰宅するとまたいい匂いにたんでタンズにしまうのだった。家では、夏以外はいつも、地味な着物に大きな前掛けをはずしたことがなかった。鏡の前に座るのは白髪染めのときだけ。日に焼けた褐色の肌は一、二か所シミがあつたが、つやがありすべすべしていた。

学校行事への参加で、子ども達の先生や友人のことを知っているのも祖母だった。私は学校であつたことをよく祖母に話した。母は成績以外のことには余り関心を示さなかったし、友達の名前も覚えようとはしなかったから。中学のころ、転校する友達を駅で見送った話を、涙ぐんで熱心に聞いてくれたのも祖母だった。子どもは、しかし、日曜ともなると母にまつわりつく。いつも「おかあさんは？」と居場所を確かめていた。あるとき、祖母の節くれ立った手を嫌って母に握ってもらつたおにぎりに、かすかに化粧品の匂いがして食べられなかったということもあつた。

## きびしいとやさしいと

幼いころ、祖母は厳しいという印象があつた。母に叱られてベソをかく私をかばったり、慰めたりはしなかった。母親に代わって子どもを育てているという意識からか、孫を甘やかさず、母親と同じ姿勢をとろうとしたようだ。少し大きくなつてからは、よく「お母さんに言われたようにしなさい」と言った。子どもの教育や躾に関しては、あくまで母を背後から支えるという役に徹していたのだ。

母から毎月渡される生活費を祖母はとても大切に

に使っていた。無駄遣いを嫌い、本当に必要な物だけをよく考えてから買っていた。毎日決まった時間に魚売りや八百屋が来た。がっしりした体格の日焼けしたおばさんが、天秤棒をかついで魚を売りに来る。庭先で、井戸のポンプを押して金だらに水を張り、まな板を渡して魚をおろしてくる。そしてガラガラの大声で、浜の出来事や漁師の暮らしのことなどを祖母に語って聞かせるのだ。

特別な用と畑仕事の他は、祖母はなるべく家にいた。「私は留守番だから」と言うのだった。学校から帰ると、玄関先に腰かけて世間話をしていく近所のおば（あ）さん達をよく見かけた。そんなとき、祖母は大体聞き役で、ニコニコ笑いながら相槌を打っていたものだ。

N市の駅前から出るバスで数十分のところ（Q町）に、父方の祖母が長男一家と暮らしていた。父は五人兄弟の三男で、次男と四男一家もその町に住んでいた。毎年、この祖母は、離れて住む息子（我が家）に一月ほど滞在するのが習わしだった。家の祖母より二つ三つ年上で、足が弱いこともあって、病院通いの隠居さんの身分だった。我が家に来ても、忙しく立ち働く祖母に手を買すことはなく、きちんと和服を着て「お客」で

あった。二人は互いに相手を「おっかさん」と呼び合い、連れ立って街の呉服屋で反物を選ぶのを何よりの楽しみにしていた。

たまに二人で小旅行をしたりもした。Q町の祖母は、手は貸さずとも、家族の誰もが当然のごとく享受していた祖母の働きを、ことあるごとに評価するのだった。「おっかさんはいつも達者で羨ましい」で始まり、食卓に目を見張っては、「こんなにご馳走を作って大変でしたらう」などと誉めたりねぎらったりするのだ。

話し好きで、祖母を相手に、昔、観た芝居の話や近隣の噂話を面白おかしくしゃべって、止まるどころがなかったが、息の合った友人同士だった。

この祖母は、独特の節回しをつけて新聞を読んだり、私達にも、夜寝る前「お話」をしてくれたり、また違ったおばあちゃんの味があった。私達は、少し遠慮もあり、このときばかりは姉妹げんかやわがままも控え気味だったし、滞在中は父の機嫌がおおむねよいこともあって、我が家にとっ

ては歓迎すべきお客であった。

祖母は決して料理上手ではなかったが、一人一人の好物をよく覚えていて、手間をいとわずに工夫してくれた。運動会や遠足の、前夜から仕込んだ弁当、お彼岸のおはぎ、じゃがいものコロケ、

丸ごとのいかに米をつめて煮るいかめし、ふぐ（昔は庶民の口にも入った）やさよりのフライ、誕生日の赤飯やちらしずしは、「母の味」を持たない私の、「祖母のご馳走」として懐かしい。

穫れたての新じゃがや枝豆のおいしかったこと。祖母自身はとても粗食で、「ご馳走は好かん」と言って味見すらしない。一人、余り物の魚と野菜の煮付けや漬物で簡単に済ますへんな人でもあった。

月に一度、昔からの馴染の製造元からしょうゆが届く。配達のおじさんと、陽気で親しげな言葉を二言三言交わす。

あるとき「いつもお達者ですね」と言われて、笑いながら「はい、この年になってもまだおさんどんをやっちゃいます」と答えたことがあった。



七十も半ばごろだろうか。祖母がいつまでも元気で、何もかもやってくれると甘えていた私は、改めてその姿を見つめ直した。縫い物と畑仕事で背中に曲がり、私よりずっと小さくなった体。そして、時々、疲れたように長椅子に横になるようになった祖母の姿を。

私が高校生くらいになるところ、祖母は何日かかけて身の回りを整理したらしい。押し入れが片付き、タンスの上段の棚が妙にすっきりしていることに気がついたのだ。古い手紙の束や写真の類が庭の隅で灰になっているのも見つけた。以前、何気なく見た若いころの写真をまた見せてもらおうとしたら、「もうないよ」と言われた。

祖母は確かにある時期、自分の過去を片付けてしまったのだ。無性に悲しかった。その何年前か

に、押し入れの奥から、ひびの入った古いバイオリンが出てきたとき「家にそんな物があったの？」と私達は目を見張った。若くして亡くなった姉の物だと言って、祖母は懐かしそうに布切れでほこりをふいた。弦はボロボロで使いものにならない。数日後、祖母は街の楽器店で新しい弦を買ってきて、張り替えた。めったに街まで行かないのに楽器店で買い物とは、と意外な気がした。

「姉さんはとても上手だった」と言いながら音を合わせて、曲らしい一節を弾いたときはもっとびっくりした。「おばあちゃん、弾けるの？ もう一度やって」でも、祖母が何かを弾いたのはそのときだけ。あとはいくらせがんでも弾こうとはしなかった。バイオリンはいつとき子ども達のおもちゃになり、物置にしまい込まれた。それもいつの間にかなくなっていた。

## 祖母と私

一九六八年、大学生となった私は上京して寮に入った。第一志望の入試に失敗して、仕方なく行った大学ではあっても、若さと希望の出発だった。長女を親類のない東京へ送り出すのは、昔、母の前例があったにしても、一家にとっては重大事である。



ほどなく家族からの便りが届く。母からは主に、指示や日常生活の注意事項の列挙、父からは回数も少なく、一般的なアドバイスや用件を短く書いたものだったのに比べ、祖母からの手紙は、家族一人一人の近況や私の生活ぶりを案じる心情が細かく書かれていて、読むたびに鼻の奥がツーンとした。私はすぐに両親宛とは別に祖母宛の手紙を書くようになった。

折しも学園闘争真っ最中の学生時代は、挫折と孤独の当時お決まりの青春コース。良くも悪くも、生暖かい家庭の庇護から解放たれて迷い込んだ大都会と、混乱の季節の中で、見失った自己を求

めて悪戦苦闘を繰り返す日々。祖母の存在の有り難さに気づいたのは、実はこんなときだったのだ。

卒業後、東京で就職した私は、アパートで自炊生活を始めた。四年制大卒女子の就職状況は厳しく、男女差別に加えて、地方出身者には、大手企業の「自宅通勤者に限る」という二重の差別があって、口惜しい思いもした。ともかくも自力で獲得した職、初めて自分の両足で立ったという誇らしい実感。この年は格別に感慨深い。

学生時代には「卒業するまでは死ねない」と言っていた祖母だが、このころになると、私の結婚する日を心待ちにするようになる。手紙には必ずそのことが書き添えられるようになった。「あなたは優しい人のところに行かせてやりたい」いつだったかそう言った。祖母の万感こもる言葉だ。

祖母の手紙の一節は、たとえばこうだ。

——私は来る日も来る日もあなたのお嫁になる日のことを考へております。そのくせ私は何の方法も道もないのです。只良い縁がありますよう、お大師様に祈っているのです。

中略

私も八十歳だからまごまごしていると、お嫁になる日を知らないでこの世を去るかもしれません。Y子（妹のこと）までとはとも生きていませんの

で、あなただけはこの目で見たいものです。寝てもさめてもそのこと。

48・2・26（一九七三年）

——私を案じてのお手紙嬉しく嬉しくございました。八十歳だから老衰にしては早い、つまり夏負けでせう。涼しくなったら元氣が出ると思いますが。医師は貧血から来たのだから滋養を摂ればと言いますが、肉も魚も嫌いとおって仕様がな、玉子だけ、それで三日に一ぺんの注射をする事にしております。まだ死病ではないと自信を持っています。あなたが結婚するまでは死ぬ事はできません。

後略（原文通り）

48・7・20（一九七三年）

文末は、「老婆より」「ばばより」などとなっていて、ペンを持つ手が震えて文字が書きづらくなったと、これが最後の手紙となった。

別段、急ぐこともないとのんびり構えた（祖母の目にはそう映った）両親をせき立て、あちこちとつてを頼んで見合い話も用意させたが、しよせん、縁のないものは仕方がなく、わずかな命の残り火を予感してか、祖母はますます焦燥を強め、そのことばかり念じるようになった。そして話のまとまる気配もなく、日が過ぎていった。

祖母のいた日々

## 祖母は燃えつきた

祖母が亡くなったという父からの電話で、その春から一緒に暮らし始めた末の妹と、飛行機と列車を乗り継いで帰省すると、広島大学に行っていた中の妹がすでに茶の間でワーワーと泣いていた。四月に妹が上京するまでは何とか元氣だったのに、急に寝ついてしまったという。父からの葉書や電話であまり具合が良くないと知らされ、心配していた矢先のことだった。私が東京、次の妹が広島、そして最後の一人が東京へと巣立っていき、ほっとして体の力が抜けてしまったのだ。

孫達のいなくなったガランとして家の中で、祖母はどんなに淋しかったことか。もう何もすることがなくなったという思いは祖母の生命の火を弱らせてしまったのだ。

朝早く、父も母も在宅中で見守る中、眠るように逝ったと聞き、安堵する思いもあった。半年前の正月休みに最後に見た祖母の姿は、真っ白い髪を短く切りそろえ、仏様のような柔和な顔をして小さく頼りなかった。門のところに立ち、いつまでもいつまでも私を見送ってくれたあの小さい姿を思い出すだけで胸が一杯になる。

その夜は眠ろうとしても眠れなかった。涙が溢

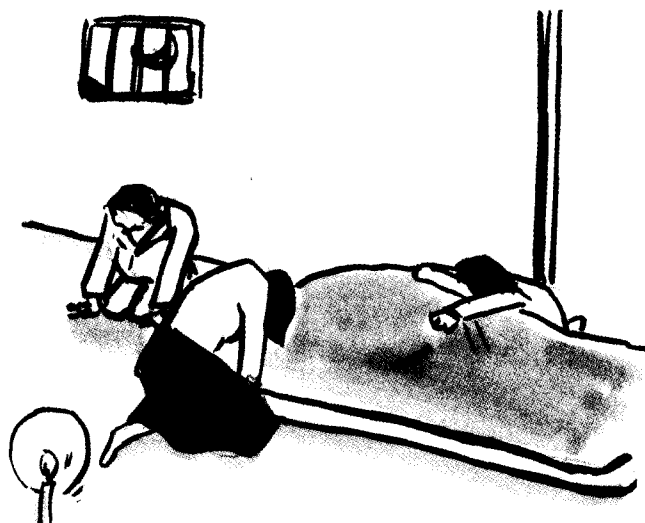
れ出して止まらない。おえつも抑えきれない。泣いているのは私だけでないことに気がついた。同じ部屋に寝ていた妹も、隣の部屋にいる下の妹もしきりにしゃくりあげていて、一晩中、誰一人口をきくことなく、それぞれの胸で祖母の死を受けとめた。

翌日の告別式。祭壇に祖母の写真が置かれる。写真嫌いで、やっと捜し出したピンボケ写真。読経が始まると、妹達も私も今度こそこらえきれずに大声で泣き出していった。「おばあちゃん」が私達にとって、どんなにかけがえのない存在だったかということ、その重みをそのとき、私達は支えきれなかったに違いない。

亡くなる前年だったろうか。帰省した折、「ちょっとおいで」と祖母は自分のタンスの前に私を呼んだ。開き戸から封筒を取り出し、「これをあんたにあげておく。死んでもうてからじゃ遅いからね」少し笑った目にみるみる涙がたまり、声が震えている。それまでも祖母はたびたび、「服代の足しにでも」と送金してくれていたが、このときは額も違い、その心情を察して私は胸をつかれた。「わたくしが渡すお金やら年金やらを、自分のためにはちっとも使わず、みんなあんだ達に送ってしまうの」母がため息まじりに言った。



この時のお金は形のあるものにしたくて、いつまでも残るもので、祖母の記念にと、ポリーナスを足してピアノを買った。住んでいたアパートの部屋に置けないかもしれない、今思えば無茶な買い物だったのだが、不思議なことにそれから間もなく結婚することになった私の花嫁道具として、何もない新婚の1DKのマンションにデンとおかれた



のである。

彼に出会ったのは、祖母が亡くなる少し前だった。といっても同じ職場だから、以前から見知ってはいたのだが、ひょんなことからつき合いが始まったのだ。縁とはそういうものなのか、初盆で帰省するころには二人の意志は固まり、彼は九州まで承諾をもらいにきた。両親に異存はなく、三日足らずの滞在で、式の日取りも場所も決めるという早わざだった。

祖母が亡くなってわずか五か月後、私が学生時代通っていた教会で、身内とごく親しい友人だけを招いてのささやかな式を挙げた。パイプオルガンの荘嚴な響きと、私が特別にお願いした素晴らしいソプラノの「アヴェマリア」にはどんな趣向もかなうまい。

祖母があれほど夢見、待ち望んだその日がこんなに早くやってくるなんて……。誰よりも喜んでくれるに違いない祖母に見せたかった。愚痴ひとつこぼさずに家族を支え、惜しみない愛情で包んでくれた祖母にせめてきちんと「ありがとう」と言いたかった。それにしても、最後まで私を案じた祖母の願いが、彼に引き合わせてくれたと思えてならない。

(え・堀切 潤子)

祖母のいた日々

座

談

会

# 筑紫女大いに語る

——わいふ三六号合評

## 福岡サークル 出席者

栗岡 理子

島村 雅子

野口 敬子

藤瀬 文子

帆足 裕子

吉留 優子

## 司会

川谷由紀子

私たちつて、  
リツチノ

司会 こんにちは。司会の川谷由紀子です。

じゃ、まず、自己紹介をしてもらいましょうか。

島村 久留米の島村雅子です。

藤瀬 福岡市の藤瀬文子です。

吉留 筑紫野市の吉留優子です。

野口 福岡市の野口敬子です。

栗岡 福岡市の栗岡理子です。

帆足 同じく福岡市の帆足裕子です。

司会 では、特集の「セカンドハウス持つてみたらば」から入りましょう。

島村 私はちょっと期待はずれでした。もう少し突っこんだレポートを期待していたので。

司会 それはセカンドハウスに対するイメージの違いということ？ それとも、よかった、よかった、びっくりだったから？

島村 うん、まあ、そうかも分かりませんね。

私の感覚では、セカンドハウスは維持費が大変、というのがあったから。また、年



収がいくらぐらいあれば、この千二百万円の家をやるのかとか、その辺、もう少し具体的な情報がほしかった。だから、こういう人たちはセカンドハウスを持っている人の一部分じゃないかなあって気がしたんですよね。よく分かりませんけど。

藤瀬 「釣りキチ一家の……」という方の場合、失礼だけど、具体的な予算とか本当に何もない状態から強引に、むしろ無謀な感じで入っていった、結果としては手に入れている。私は逆に、こういうふうに入っているのかな、とセカンドハウスに対して気楽さを感じましたね。

帆足 これを読んでから新聞のチラシが気になって、今朝も見てきたんですけどね、私はセカンドハウスのことを考えたことがなかったで、実感もなくサラリと読んでしまいました。

野口 セカンドハウスっていうと私の場合、市街地中心部にワンルームを借りるというオフィスの考えちゃうんですよ。私は環境の良い所に住んでいるから……。まだ田んぼもいっぱいあるし、釣りはいつでもできるし。福岡だったら車で一時間ぐらい走

れば別荘地ってあるもんね。週末に遠出しなくても。

司会 そうか。東京だから、普段月曜から金曜まで都会に住んで土・日に郊外へ行く。と。私たちってその必要ないものね。

なんとなく、そんなふうになると、私たちがリッチですね。(笑) 日中は都会的に生活をしていて、帰ってきたら郊外の生活を楽しめて。

吉留 主婦にとっても、自分の家庭だけじゃなくて、友だちとお金出しあって情報の集まりやすい都会にワンルームを借りるとか、そういう面があってもいいなと思いました。それと、いくら世の中に離婚とかシングルが増えてきたといっても、まだ一家団欒、家族の平和が最高の幸せだと考えているごく普通の人たちが多いんだな、ということに改めて気づきましたね。

## 「後顧の憂い」子育てのポイント

島村 ここに出て来ている方々は、みんないわゆる別荘地にセカンドハウスをもっている、というのとちょっと違うんですよね。



川谷由紀子さん

「ご近所に盆暮れの挨拶をする」と書いてあるけれども、これは初めて知った。

栗岡 そんなことを気にしないで住めるのがセカンドハウスだと思っていたけど。

島村 それから、セカンドハウスに行っても、(主婦は)自分が家事をしなくちゃいけない。

帆足 そうそう。あれはひっかかるね、やっぱり。どこへ行くにしても、そうなる。

司会 私たちだって解放されたいもんねえ。

吉留 ちよっと外出するにも後顧の憂いなく出なきゃいけないわけでしょう。

島村 でもね、それを考えていたら、いつ

までたっても出られないから、私は無視することにしてるの。

下の子が一歳のとき二週間家を空けたんですけど、帰ってきて空港に迎えに来たときの子どもの汚さっていったら……。だいたい皮膚が弱い子なんだけど、もうまっ黒になって、涙は出てるし、もう見事だね。ワァーッと思ったけど、こういうのは見ないことにしよう。

野口 洗いのものやってくれても、けっこう汚れが残ってるんですよ、ごはん粒とかね。だけど、それに目をつぶっていかないと、全部完璧にやらしてもらおうとしたら、やっぱり自立してこないからね。

吉留 家事能力とか生活能力が夫の身にくまで待っていようと思うほうが間違ってますよ。身につけようとも思ってないし、むこうは。

司会 聞いていたら、この次に話したいと思ってる「ワーキングマザーの憂鬱」につながっていくと思うので、そろそろそっちへいきましょか。

やっぱり子どもが、幼稚園や学校から帰ってくるときに母親がいらないというのを、元

専業主婦は一番気にすると思うんですよ。

いま私はちょこっとアルバイトをしているんだけど、夫にこの間求人欄の記事を「十時から四時までなんだけど、コレいいでしょう」と見せたら、「帰りは五時前になるね、そしたらカギっ子にさせるのやね」と言われて、「エッ、カギっ子? そんな言葉、まだあったの?」って。いまでも毎日カギっ子なんだけどね、うちは。

藤瀬 私が思うには、本格的に仕事に就いていないからいつでもいてもらえる、という気持ちの子どもの中になれば、しょっちゅうお母さんが出歩いていても、そんなに気にならない。だけど本格的に仕事に就いたとなると、子どもの気持ちはどうなるかなあ、と不安。

司会 でもそんなことばかり気にしてたら、自分が鬱々となってしまうでしょ。

藤瀬 そう。でも、子どもに言われたんです。「このごろ私たちは放ったらかしになっているんだよね」って。そのときに、ドキッとした。

司会 それは甘えじゃないかしらね。

帆足 子どもって、ちよっと言ってみたい



島村雅子さん

部分があるんじゃないかな。私も共働き家庭で育ったんだけど、母にそんなことを言ったらいいんですよ。だけどそんな記憶は全然ない。私は働いていた母って尊敬してるしね。だけど母はずっと気にしてたみたい。

だから、ちょっと言ってみて気をひきたいんじゃないかしら。

司会 親の反応を確かめたい……。

帆足 そうそう。そのときに優しい言葉をかけてあげれば、それでいいんじゃないかな。

司会 そのときに無視されたりしたら、ま

た次も尾をひく……。これは子育てのポイントですね。

## 三十代は 惑いの時期

野口 「ワーキングマザー……」、好きじゃ

なかった。それは文章とかじゃなくて、日

本人みんなが持っているところ বলে いうか……

……それを取っばずせばラクになるのになあ  
と思った。

帆足 この人、こんな状態で何で働いてい  
るんですかね。分からない。

栗岡 この人の憂鬱の原因というのは、別  
に子どもにあるわけじゃなくてダンナさん  
にもあるわけじゃなくて、自分自身のある  
べき母親像、それが一番の原因になってい  
ると思う。

島村 「私にはこの母性が並みの女性より  
欠けているような気がしてならない」と書  
いてあるでしょう。これはもう、母親は母  
性を持っているものという、しっかりした  
固定観念があるからこんなふうに言えるん  
であって、私と比べるとこの人のほうがずつ  
と母性があるって思うのよ。

司会 私もそう。こんなに真面目に考えた  
ことがなかった。

栗岡 私は次女が七か月のときにフルタイ  
ムでかなりきつい仕事を始めたんですよ。  
で、私もこの人と似た部分を持っていたか  
ら、だいぶ悩んだんです。だから山田さん  
の気持ちがすごくよく分かる。

吉留 一緒にいさえすれば子どもにとって  
幸せだ、というのは、親のエゴだと思いま  
すね。夫や子どもに尽くすこと、自分の時  
間を提供することが夫や子どもを大切にし  
ていることになるのかなあ、って。

司会 私、山田さんのを読んでいて、三十  
九歳というお年を書いてあるんだけど、三  
十代に共通した、三十五歳を境にした誰に  
でも共通する惑いというか、戸惑いがあっ  
たんだと思う。

三十代といったら子どももちょうど学校  
へ上がるし、同居するか否かの決断も迫ら  
れるかも知れないし、夫の仕事の先も見え  
てくるし、いろんな意味で落ち込むという  
か、最後の焦りがあるような気がする。今  
回、自分の心情の吐露というか、感性の部  
分を出したんだと思う。だから一番純粋に、

なぜ働かなくちゃいけないのか、って考えられたんじゃないかしら。

## 自分の身の丈と「やめる勇氣」

司会 というところで、次の「ドーバー海峡横断の夢」にいきましょうか。

島村 私、これが一番面白かったんですけどね。一つのことをずっと追求していく姿勢が、とても魅力的だなあと思いました。帆足 前号を読んだときは、この熱中ぶりがすごいなあと思ったんですけど、今回はちょっと拍子抜けしました。断念せざるを得なかったというのは分かるけれど、その過程があまりにも急速にボタツとしばんじやって。もっと苦労して諦めているのかなあと思ったら、すごいあっさりとバツと諦めているんですよ。

藤瀬 ドーバー婦人との人間関係の難しさで、ドーバー海峡にかける熱意が挫折するようないかな、そんな簡単なものなのかなあと思うんですよ。たった一人の人との人間関係で、緊張の糸がポツンと切れて、こんなにも簡単に諦められるのかと、私もアラツと



帆足裕子さん

不思議だった。

島村 私は自分にはできないことだから、いいなあ、素晴らしいなあと思ったんですけどね、でも、いつの間にか他人のペースでずいぶん背伸びをしていたってこと、よくありません？

本当はそこまでできないのに、ついついみんなから期待されて、やりますって言うて大変な思いをする、ってことがある。難しいなあ、自分のペースを守るということは。司会 やめる勇氣、というのがあるんじゃないかな。いままでずうっとドーバー海峡というものに後押しされてきたわけですよ。

病気になるたという事で自分の身の丈に気がつかれたのよ。

吉留 やっぱりそれだけで良かったんじゃないの。結果としてはね。結局自分を見つめるために何かに挑戦するわけでしょ、人間で。ドーバー海峡渡らなくたって、泳がなくなつてこの人はそこに達したんだから、大きな意味で得たものがあつたというふうに感じました。

司会 またドーバー海峡とは違ふかたちで別の目標を見つけたかも知れませんが、もう。

## 諦めからは何も生まれぬ

島村 「徹底ガイド塾の教育システム」というのは、私たち小学生をもっている親にとつては、とても役に立ちますね。

野口 ものすごく面白い。

司会 ずっと前、「わいふ」で東京の有名私立高校の連載があつたの、覚えてませんか？ そのときは、東京の人たちしか行けない、私たちにはあまり関係ないワと思つてたけど、今回の「徹底ガイド……」というの



吉留優子さん

は、「公文」でも「才能教育研究会」でも、全国レベルの内容だからとても良かった。

島村 私、この鈴木メソッドというのを読んで、とても面白かったんだけど、自分自身が教育に関っているから、母国語を学ぶ方法というのがものすごくためになった。

頭から文字で教えるのじゃなくて、繰り返し、繰り返し、耳から入っていったって、五感を通して育っていく言語というのがその子の母国語になるわけですよ。年中二十、三十の言葉が氾濫している国では、それが当たり前になっちゃう。ひどいところでは、部族の五十ぐらいの言葉を解さないと生き

ていけないって。生きていくのに必要であれば、結局身につくのが言語なんだなあ、と。

教育というものも、何とかそのようにもってゆけないものか、と問にかけているんですよ。

野口 最後にある親が鈴木氏に「うちの子どもになるでしようか」と聞いたら、「はい。あなたのお子さんは立派な人間になられます」って。日本の親に欠けているのはこういうことかな、と思う。

親は、一流コースののってエリートになるのを望む。皆が塾に行って学力が上がっていくけば、自分とこも塾にやらなければいけない、と思うのが母親でしょう。立派な人間に育てようというよりは、いい大学へ入って、いいところに就職させて、という人がまだとても多い。

島村 そうならないためにはどうすればいいか、というとな、周りの意見に惑わされない、自分の考えを持つことだと思うんですよ。でも日本人には「考える習慣」がないんじゃないかという気がするんですよ。

女だけじゃなくて、男も考えないんじゃないかと思うわけ。考えるとやっぱりいろいろ大変な問題があるから、ストレスがたまる。だから考えないでおこう、と。

帆足 中学校の部活だって、あれは時間が子どもにあるといういろいろ考えて悪いことをやるから、忙しくしてしまっているんですって。暗くなって帰ったらご飯食べてボタンと寝るように、クタクタになるまで。野口 それを知らないで、子どもは好きだからやっているって自分で思っている。

吉留 知れば知るほど怖いわねえ。ということは私たちも同じよね。

島村 よっぽど意識しとかなないと、つい流される。

フランスが一番個人主義が発達している国だと思うけど、この前クラスの交流会でフレネ小学校のビデオを見せたところ「確かに理想的ですね、だけど日本では無理ですね」と二十五人中、三、四人の方が言われたわけ。「どうせ日本では無理」と言わないで、なぜ「やってみようかな」と思わないのか。日本人って諦めがとても早いと思う。そこからは何も生まれないのに。

## 男女平等は 自分の夫から

島村 フレネ小学校には三歳から十一歳までの子どもがいるんだけど、クラスや学校全体の集まりのなかで、自分の意見を発表するってことを、小さいときからずっとなやめている。自己アピールもするし、自分の描いた絵を持って皆の前に立って、批評もちゃんと受ける。

だけど、日本人が大人になって外国に行くと、討論会をやるうとしても、何も意見がないんですね。

吉留 日本では自己主張イコールわがまま、目立ちたがり屋、そういうマイナスのイメージでしかとらえられなくて、私なんか特に女だから出しゃばるな、というふうになっちゃったんですよ。そうしたら黙るしかない。

場所を選ばないでワァーッと言っちゃうともう「何よ、あんた。あんたは」「何か勘違いしているの?」というふうになる。そしたら消極的にならざるを得ないですよ。周りの人がどんなふうに受け入れてくれ

るのか、ということを確認した上で意思表示をしないと、とんでもないことが起こってくるというのが日本だと思いますね。

司会 では、ついでに「ノルウェー生活事情」に移りましょうか。これはまだ連載されるんですね。

前は学校のことで、今回は男女平等のこととが主に書いてある。寒い国だから、男女がともに協力しないとやっていけないんでしょうね。

吉留 自然環境の厳しさも関係するでしょうね。

島村 先日久留米でシンポジウムがあった



岡岡理子さん

ときにお聞きしたんだけど、どうして北欧で男女平等が進んできたかというところ、人が少ないからだって。男だけでは足りないから女も働くんだって。それが大きい要因じゃないか、って言われたんです。

藤瀬 いま周りを見てみると、一人っ子とかせいぜい二人で子ども数が減りつづけているでしょ。この傾向がだんだん強くなると、日本もノルウェーと同じようになるんじゃないかしら。

それは大いに当たり前のことで、学校出てちょっと働いて結婚するんじゃないかって、私たちが子どもたちに、今の時期から一生をどんな形で仕事に関っていくのか、ということをお教え込んで身につけていってほしい。それが大事じゃないかなと思う。

吉留 だけど学校では男女平等だとある程度教わっても、結婚後は旧態依然とした生活が待っているんですよ。だからうちの主人に言うの。「あなたは男女は同等っていつも言うけど、給食当番なぜ一緒にしたのよ」って。「なんであなたは食べるだけで、自分の皿も片づけず、おはしはバラバラン、食い散らかしてどうして寝ころがれ



るのよ」って。どこが男女平等なの？」って。司会 そうね、トイレ掃除も男子はちゃんとしてたものね。

吉留 あなたは、お母さんの手元を離れてから結婚するまでの何年間かは、男は耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ飯の姿なんだと。男は本当はこうじゃないんだ、母親がしなくなったら妻が、妻がしなくなったら嫁がって、そんなふうに生きていくのが男だったら、私はもうついていけない、私はそんな人との生活はまっぴらご免だから別れましようって、何度言ったか分かりませんよ。

そのたんびに少しずつ家事分担ができてきたんだけど、でもねやっぱりイヤイヤながらしてるの。ガチャンと割れるお皿の数で分かるんですよ。(笑)

司会 共働きでも、夫が家事を分担してくれるのは三パーセントだというものね、二十代でも。

島村 まず男女平等というのは、自分の夫を教育することから始めないとね。

吉留 じゃないと子どもにも言えないですよ。

## 妻は働くのが当たり前、 ねぎらわれるのは夫だけ

吉留 「深夜のお迎え」ってあったでしょ。

私はね、夜迎えに行くのはもう止めたんですよ。私がね、年に何回かのお出かけをしても夫は送り迎えをしてくれないのに、洗濯物や食べた跡も全部残っていて、私の負担が減るわけでもなんでもない、ただ私が出て行ったという事実があるだけ。

友だちがね、朝晩ダンナさんを送り迎えするんだけど、夜はお風呂にも入れないの。いつ電話がかかってくるか分からないから。島村 これ「深夜のお迎え」、とてもイヤだった。

奥さんがね、こういうふうに家事をちゃんとやって子どもの面倒をみているから、夫は働けるわけでしょう。働いているのは夫だけじゃないんですよ。だから「ご苦労さま、あなた」って言うのは私、とてもひっかかる。私に誰が「ご苦労さま」と言ってくれるのかな、って。妻の私は働くのが当たり前になっている。ねぎらわれるのは夫だけ、という感覚をこの人は持っている

と思うんですよ。

司会 私も「深夜のお迎え」はそう思った。家も遠くに建ててもらっているからそれくらいはしなくちゃ、という……。

帆船 そうかな？ 違うような気がする。

吉留 私専業主婦だけど、結婚してから給料日には必ず、おしいただいて「ありがとうございます。ひと月間ご苦労さまでした」って言う。そうするとむこうは、ものすごく満足そうに笑うわけね。気持ちがいいわけですよ。(笑)

「何よ、これぐらい持ってきたって大したことにはならないわよ」じゃ、男も成長し



野口敬子さん



藤瀬文子さん

ないし、だから「有り難いわ」って。ただそれと同時に「あなたも一か月間家事ご苦労さまでした、って言ってくれない？」っていうの。

帆足 子どもは面白いですよ。自然に育てているとね、「お父さん布団あげりい」とか「お父さん、茶碗、洗い！」とか言うんですよね。変な意識を植えつけなきゃ、やっぱり最初はお父さんもお母さんも平等に思っているんですよ、子どもって。

島村 妻が夕食をつくらなくてはいけない、っていう呪縛から解放されると、とても

ラクね。外食してもいいんだと思うと。自分が仕事で遅くなったときに、いまから帰ってご飯つくって、と思うとすごく疲れる。藤瀬 「ほかほか弁当」でもいいよ、って言われたら、そこでホッとする。もうこれでいいよ、って言われたら。その気持ち嬉しい。

吉留 一緒に遊園地に行って、遊び疲れてクタクタになって帰ってきてね、子どもと自分はこちらが寝ているのよ。「夕ご飯、なあに？」って。私もクタクタなのに言っても分からないのね。そういうエネルギーは女には必ず残っているもんだと思っているのよ。(笑)

帆足 言わなきゃ、分かんない。(一同頷く)

## “わいふは主婦の思いを ぶちまけられる場”

司会 では、投稿に戻って「ぼけるが勝ち？」を。

私、死ぬ前にはぼけていたいなあ、と思った。(一〜三人同意)

吉留 ほら、飲みに行つて、できあがった

ほうが勝ちっていうでしょう。それといっしょじゃないですか、やっぱり。

司会 あと他に印象に残ったことを言ってもらいましょか。

「熱血! SCUBA・ラブソディ」も面白かったわね。時間とか料金とか事細かに書いてあって。全然知らないことだったから。

栗岡 一度やってみたい。きれいでしょね。

野口 私は「わいふ」を読み始めたばかりだからよく分からないんだけど、「青春と死」とか「父の残した文字」とか戦争の実体験のことを書いた文章って、上手下手じゃなくて、すごい臨場感がある。訴えてくるものがあるでしょう。だから、そういう年代の方たちの連載物とか一冊の本にしたものがないのかなあ、と思って……。

司会 戦後史っていうか、戦争体験みたいなもの?

野口 うん、そうそう。そういうものが欲しい。「青春と死」の最後の終り方が、すごく心に残る、心にしみてきたんですよ。司会 知らないことだもんね、私たちの。

## 女性学研究会編 ジェンダーと性差別

女性学研究第1号 性差別の撤廃のための理論を求める。2060円＋税260

## 上野浩道 知育とは何か

知識を生きる力に変える真の知育を探った日本教育史。2472円＋税260

## 有馬道子 心のかたち・文化のかたち

解釈の3類型から言語・文化・パーソナリティに迫る。2266円＋税260

## 織田元子 システム論とフェミニズム

女性抑圧の原因と解決法をシステム論によって探る試み。2163円＋税260

## D.カメロン／中村桃子訳 フェミニズムと言語理論

社会言語学、精神分析による言語決定論の可能性と限界。3193円＋税310

## J.ステイシー／秋山洋子訳 フェミニズムは中国をどう見るか

家父長制＝社会主義を撃ち、中国の未来を展望する。5150円＋税310

\* 定価は消費税込みです。



## 勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15  
☎ 814-6861 (調) 東京5-175253

吉留 自衛隊もこれから先どうなるかわからないけれども、もし戦争に加担するようなことにでもなったら……。

司会 みんな自衛隊に行かない。

吉留 やっぱ戦争はしない、とうたわな

いとね。

藤瀬 自分の国が危ないんだったら、少しは戦わなきゃ、という思いにかられるかも知れないけど、はるか彼方の自分の国とは関係のない問題で派遣されるのはねえ……。

吉留 戦争で失ったものを取り返そうとしたら、何十倍も時間がかかってしまうんですよ。だから、行かせない、作らない、自衛隊なんか認めない、という方向にいかないとおかしい。そういうつらい経験をしてきているんだから日本人は。

帆船 攻めるとか攻められるとか、もうそういうことを考えている段階じゃないと思うんですよ。

吉留 そうそう。イラクがどうの、というよりも地球全体の危機が来ているんだから。

藤瀬 宇宙から地球を撮った写真を見たときにね、なんでこんなにきれいな地球なのに、いつもどこかで戦争ばっかりなんだろう、なんか虚しさを感じてしまったのね。

島村 だけどもう、戦争がなくなつてね、いつ原発で国を滅ぼすか分からないんだから。明日にでも駄目になるか分からないでしょ。

吉留 そういう状況が取り巻いているわけです。だから、そういうのに加担しない、共鳴しない人間を育てていくしかない。私

はね、「わいふ」という雑誌が一握りの人たちのものじゃなくて、主婦が家庭の中にいて思ったこと、考えたことをぶちまけられる場、勉強できる場として、末長く続いていけばいいなと思います。

野口 これからも「わいふ」が続いていけばいいね。

(まとめ・宮前和)

●地元で合評会をやりたいとお思いの方、どうかお申し出ください。サークルでなく、個人のお申し出でも、三、四人の読者がお集まりくださればよろしいのです。(今回のように)遠隔地でもできますので、ご遠慮なく声をかけてくださいますように。電話で編集部までご連絡ください。



## 息子の性を めぐる

匿名

ある夏の夜、夫と訪問していた友人宅に十二歳の娘より電話が入る。声のこわばりと泣きじゃくる異様さから、何か大変なことが起きたことを直感した。

「早く帰ってきて。おにいちゃんがおかしいの。裸になって部屋を歩き回っているの」

今しがたまでの楽しい語らいのときが嘘のような現実を想像すると、恐ろしさでいっぱいだったが、その場を取り繕っておいとしました。家ではショックでワァーワァー泣いている娘と、電話の話が嘘かのようにきちんと服を着て普段通りに机に向かってい

る息子の姿があった。

娘から事情を聞くと、娘のスリッパをまといパンツもはずさず、ペニスをあらわに現われたという。やめてと頼んでも聞き入れず部屋を歩き回ったという。大きな身体にちょこんとしたスリッパをつけ、勃起したペニスを平然と出して妹の前に出るなんて、いったいどうしたことなのか。近親相姦、性倒錯、屈折した性、わが家にこんな恐ろしいことが起きるなんて。まだ、汚れない娘の将来に男性への不信、恐怖がつきまとうわないかと胸が押しつぶされそうだった。

しかし振り返ると、息子の性的な行為には、小学校のときから驚かされることが多々あった。妹のや、買った女性の下着にリンスを芳香剤がわりにつけて身につけたり、寝ている妹の下着を脱がせ、観察していたこともあった。マジックで自分の乳首を丸く囲み、グロテスクな姿をしているのをとがめたこともあった。まだ幼い少年の身体には、このような行為はちぐはぐであったが、すべてが事実だった。

中学時代、望んで入った運動部も、先輩にいじめられ長くいられなかった。勉強し

てどうしてもある高校へ入りたいと言いつ出した意欲をまずは評価してみようかと、塾に入ることを認めてやり、本人の受験戦争が始まった。

合格という目標にかけ、穏やかな日が続いていったように見え、過去を忘れ去ろうとしていた母親ののんきさ。めでたく念願の高校へ入り、リベラルな校風を満喫し、学生生活をエンジョイしているように見える息子姿に、これで一安心と、ほっとさせられていた。

嵐のようにやってくる性との闘い。少年の性との葛藤は大きなものらしい。女性の素肌の露な夏。初潮があり胸の膨らみも増し、小花やかわいい柄の下着を身につけ出した思春期突入の娘の姿が、妹という理性からはみでた存在として写ったのだろう。

また、幼いころから異様な行動をしては両親を困らせ、ときには宇宙人扱いもされがちだった息子に対し、精神年齢が高く、理路整然、しっかりものという両親の評価を受け、堂々と育ってきた娘。

妹に対しタブーな行為をした息子の心をゆっくり解説していくと、妹への嫉妬があっ

たことも否定できない。おかしい悲しい行為をしてしか親の注目を引けなくなってしまう息子がかわいそうだった。

あの夏の日から食欲が落ち、近所の子供たちのはしゃぐ声も、いつもなら仲間入りしている主婦たちの楽しげな会話も、うとうしいだけで、せめてわが子の前では平然と振る舞うことに気を配り、生きていた。

夫との関係も悲惨な状態だった。あいつは精神異常だと言って、翌日に息子を精神科へ連れていった夫。十五歳にもなって父親の断定に逆らえず、仕方なさそうについていく息子。

嘘、嘘、嘘。何でもあなたは自分のしたことが無意識でなかったのに、医者に行くのやってしまった行為の大きさに、後でびびってしまい、まさか意識的にですと言えないんですよ!! 何でも息子を病人扱いするの? 少し様子を見ましようよ。そしてもっと性をオープンに話し合える父子になってよ、と願ったのだが、夫の頑固なこと。自分の下した判断を迷ったりすることのない人なのだ。

幸いなことに、訪ねた精神科医は女医さ

んで、「思春期における逸脱症状で、定期的にありがちなことで、知的レベルの高い子に多く、息子さんはアンバランスなのです。もう、このことにふれてはいけませんよ」という診断だったという。ただ万が一、脳波に異常があるといけないので、大きな病院で脳波を取るように紹介状をもらった。夏の終わりに検査を受ける。

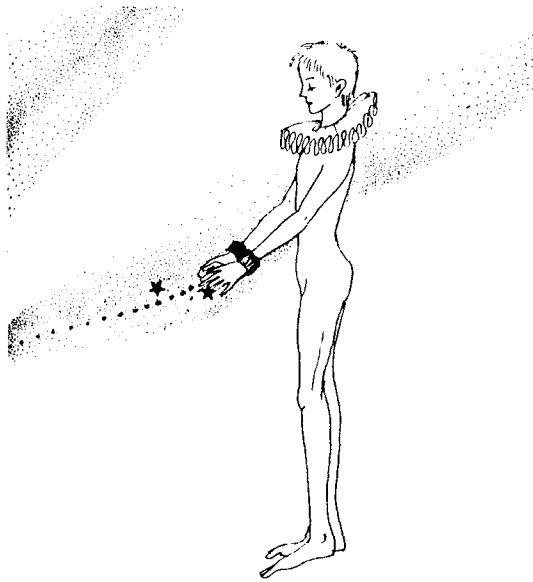
一回目は脳波、CTスキャンいずれも異常なしだったが、二回目に脳波に異常が出て、モヤモヤ病の脳波の特徴と似ているので、さっそく入院して、脳血管撮影をしようというのだった。その検査は簡単なものだが、三千分の一だが薬によるショック感染、下肢血管閉塞で血が足にいかなくなることもあるというのだ。おまけに本人に、「幻覚はありますか? 幻聴はありますか?」なんて聞く。

医者に対して憤慨している私に、夫は「あいつはモヤモヤしているから、びったりの病名だな。すぐに入院させて検査を受けよう。悪いところが分かかってよかったじゃないか」とあっけらかんと言うのだった。

私はあちこちの大きな書店の医学書コー

ナ―で、モヤモヤ病を調べた。聞いたこと  
もない病名を付けられて、すぐに納得でき  
る私ではない。たまたま検査を受けたら、  
こんなことを言われた。いつからこんな病  
気を持っていたのかも分からない。本当に  
血管撮影すべきなのか。病気であれば親の  
いるときに何事も起きないのが納得いかな  
いし、症状としては性的なことだけで、モ  
ヤモヤ病のいろいろな症状は該当しない。

納得いかず、最初の女医さんを、今度は  
私一人で訪ねた。目がきらきら輝いている



美しい方で、有名な東大の精神科博士のお  
嬢さんであった。母親としての私の気持ち  
をよく汲み取って下さる方だった。早く訪  
ねていれば、早く楽になれていたかなと思  
うほど、安らぐ時間だった。

夫が精神科へ連れていくという方針を出  
したとき驚いた私だったが、女医さんと出  
会えたことで、精神科医や、カウンセリン  
グの必要性を感じた。

一時間近く相談にのっていただき、会計  
はなんと八百四十円。私の気持ちたちが落ち着

き、何かを見出せて、たったそれだけなの  
だ。ありがたいなと思った。

モヤモヤ病という疑いを示され、夏のか  
んかん照りの道を病院から駅へ、百八十セ  
ンチもある巨大な息子と並んで歩いた。な  
んだか我々一家が、この息子の見えない頭  
の中のことで、右往左往している数週間が  
滑稽に思えた。今、隣にこの子がいる。今  
までだって頭がどうなっているかなんて考  
えたこともなく生きてきたじゃないか。

「ねえ、人間で分らないことがいっぱい  
だよ。分からなくてもいいじゃない？」  
と息子を仰ぎ見てつぶやいた。

次の夏をむかえるまでは地獄の日々だっ  
た。悩んで涙がこみあげ、何を口にしても  
胸が苦しくって、減らしたくても減らなかつ  
た体重があつという間に減った。

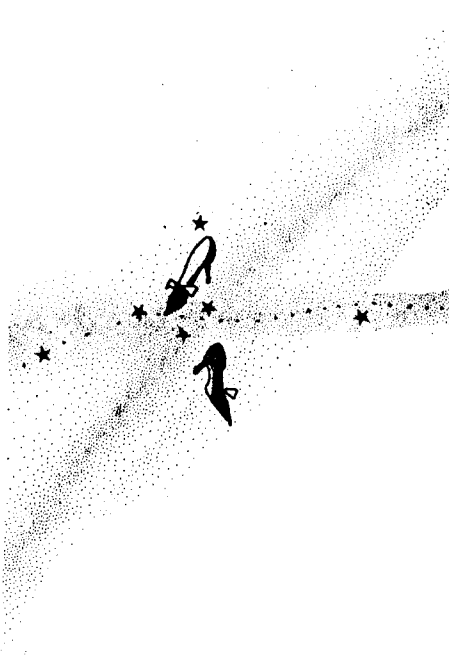
どんなことがあつても夫婦は同じ部屋で  
休みたいと願つても、戸一枚隔てたところ  
にいる息子を思うと別々の部屋で休んだり、  
セックスも階下の居間で座布団を敷いてと  
いう惨めな生活。

考えること、思いめぐらすことが頭から  
はみ出すほどで、寝ていても考え事の続き

をしていて疲れきってしまう。何をしても不安定で充実感など持てるはずもなく、お酒の力を借りずには眠れなかった。眠い、疲れたという夫に喧嘩を売って、むりやり抱いてもらったこともあった。そうでもない、安定しなかった。

息子をめぐる考え方の対立は、離婚ということにまで発展した。医者には任せるしかないと思う夫と、納得いかないと次のステップを踏めない私と。思い悩んでいると「ついでに、おまえも精神科でみてもらうといい」とまで言われる始末。

あれから三年経った。あんなにもめ合っ



た夫との間に優しい気持ちしが再び芽生え、互いに違う考え方をする人間同士が縁あって結ばれ、三人の子どもの縁も持ち、何とか暮らしていることの大きさに改めて気づき、感謝している。

気が狂うほどだった私がぶつかっていった夫。

「口に出して言ってくれなければ、夫婦であつても相手の考えていることは分からないよ。君の出す周波をキャッチできなくなつたから、別れたほうがいいかもしれない」と言われたときの寂しさ。

二人ともそれぞれ子どもを思つて悩み苦

しんだ結果だった。激して表面に出す私と、静かに内に秘める夫との違い。そんな違いがあつて当然だということが頭で分かっているが、実生活で認められなかった私には、息子のことがよい修行となつたのかもしれない。

少し落ち着いてきたころ、友人であるユニークな医者には息子の行動を客観的に話してみた。すると「じゃあ、おかまはみんな異常なの?」と逆に聞かれてしまった。正常、異常というもののラインはどこで引かれるのだろうか。

「役所の課長が女子トイレでビデオを持ち込み覗き撮影」となると負の記事になるが、かつて詩人の寺山修司が独身女性の部屋をたびたび覗いて捕まつたときには、芸術家にありがちなこととして、理解もされたように思う。

その友人の紹介で脳波の権威者がいる病院に、再び息子を連れていくことにした。「何の心配もあります。あれこれ心配せずに生活することが一番の薬です」という診断をもらう。

脳波一つでも医者によって、即入院と判

# 娘の就職

大阪府豊中市 高宮 みか

断したり、異常なだったり。そして患者は都合のいいように、自分にとって信じたいもののほうを選び、そちらを正常と判断するわけだ。私もまた、病気じゃないという母親の第六感に従い、正常という医者 of 診断にうなずいたわけだ。真実は、神のみぞ知るところなのだ。

人間なんて危ういところで生きている動物だ。私が、ある男と恋に落ちたときも、堅実な友人は「あなたにとって一番大切なのはご主人でしょ」と忠告してくれた。恋の病から抜け出した今も、その言葉は私には真理ではない。一番なんて、順番を付けることにも嫌悪感を持つが、そのとき、その男に命をかけていたのだから。

そして、何とか自分の選択した結婚、家庭という枠の中で、責任を持って妻役、母親役を演じて、人生という長い芝居を続けていくのかなと思うのだ。

息子を見てみると悲しいほど私に似ている。この親にしてこの子あり……。そう思うと、この先何が起きてもかつてのように大騒ぎしないだろうと思う。私も、息子も大きくなりました。

昨年の子の就職につづいて、今年は娘の番である。

娘は京都の私大に在学している。郡部にあった教養学部から下宿してひとり住まいである。

早い企業は三、四月から、自社のPRをかねてセミナーを開いてくれたり、大学まで出向いて勧誘にくてくれたので、娘はこれだと思う会社の説明会にいくつか行った。採用試験を受けさせてもらう意志を表明してきているので案内を待っているのに、なかなか連絡がない。はやる気持ちを抑えて問い合わせしてみると、今年度の採用はほぼ内定しましたとのつれない返事だったりする。

「やっぱり世の中、コネらしい……」

コネなしで頑張ってみる、と言っている娘も、何度かしょげた声をだした。

娘を売り込んで雇ってもらうほどのつてもない、甲斐性のない親には違いないが、世の中つまらないコネに縛られて不自由をしている人間の多いことも想像できる私としては、娘の肩を持ちたいのである。

「大丈夫！ コネなんかなくなつていまいに決まるわよ」

「ママ、のんきなこと言っているけど、知ってる？ 女子の就職悪条件ワーストスリー」

「そんなのあるの？ なに？」

「コネなし、浪人、親元離れた下宿生活」

馬鹿な！ それじゃあ、わが子はどうなるのだ！

高校時代をクラブ活動、文化祭、運動会の順に張り切って、受験勉強が後回しになった娘（二人の息子も同様）には、一年の浪人生活を暗黙のうちに（これがいけなかったと思わぬでもないが）許していた。

浪人時代を、生まれてはじめて孤独に、自分を見つめて体験した経験者である夫と私は、しなくてすめばそれに越したことはないが、浪人生活をうまく生かせば得難いよい体験となることを知っている。

親の目から見えて、娘は予備校の一年



間を、その経過から結果まですべて自分のよき体験として過ごした。なかったよりあったほうがよかった一年だった、と私が言ったら、娘は怒るだろうか。

下宿生活を決めたことにもいくつかの要因はある。通学に片道一時間半を要するが、物理的にも経済的にも無駄が多い。それが一番大きな理由だったが、大学生になったら自分の身の回りのことくらい自分でやって欲しい。親は最低の経済的な援助は保障しているのだから、それで充分だというのが私たちの考えである。

さいわい、娘も、大学生になることイコール親から離れること、と大学生になる楽しみの一つに親からの独立を数えていた。

コネの世の中であることについては、親切な忠告を友人から受けた。

優秀な男子社員のいるよい会社に娘を入れて、よい結婚を期待するのが親である、というあまりに通俗的ではあるが、熱意を込めた忠告を、屈辱ともなんとも言えぬ怒りに震えながら、私は一言の反論もしないで聞いた。

七月に入って、八割以上の男子学生は内定をもらっているようで、ようやく水面下で女子が動きはじめていた。都銀の事務職はコネのみだという噂で、銀行のギの字も言っていなかった同級生が親のコネでとりあえず内定だけとりつけている、というのを聞いて、娘はあ然としていた。

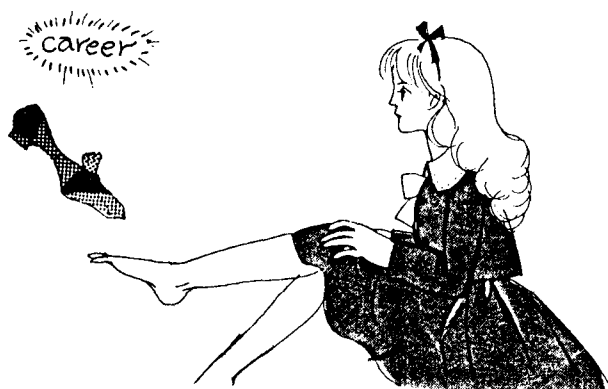
「銀行でお金を数えるのは苦手だし、流通で伝票整理もできそうにないし……。わたし、わがままなのかなあ」

「そんなことないわよ。ゆっくりでいいわよ。場合によったらお父さんにもう少し養ってもらおうよう頭を下げちゃえばいいんだから」

「そこまでは心配してないけれどさあ」  
大学を出たら完全自立をする、というわが家の取り決めも、親のほうからあやふやにしては示しものなにもつきやしない。

就職活動に入る前に、もう少し自分のしたいことをはっきり絞っておくべきだったのにそれができなかった、としきりに悔やみながら、それでも娘は情報関係、人材派遣の会社、メーカーなどに挑戦し、いくつかは最終面接までこぎつけた。

グループ面接で自己PRをしてください、と言われ、友だちが臆面もなく空暗記してきた自己宣伝を述べるのを聞いて、こりゃ



あ、負けた、と思ったという話は面白かった。

「それまでの体験で感心させられた他人の自己PRをメモして暗記しておいたのが、今日は完全に言えた、とその子が面接室でたところで言うんだもの」

面接する側から、

「当社の女子社員は二十五歳前後で社内結婚するか、そうでなくとも二十七歳くらいまでには結婚してほとんどが辞めてゆきます」と、聞きもしないことを言ったりする。

「若くって素直で早めに辞めてくれる女の子が いいのが分からないじゃないけれど……」

娘はため息をついていた。

住民票を見ながら面接官が、

「大阪で就職が決まったら、もちろんご両親のところから通勤ですね」

と、当然のことのように念を押す。

大阪で就職が決まったらどこに住むかについて、私と娘で話をしていた。

「うちの近くにマンション借りなさいよ」

「ママ、親と同居しないとダメじゃないけれど、結婚資金もなにも貯まらないんだって」

そうだろうと思う。

しかし、私は反対だ。

せっかく自分のことは自分でできるようになり、他人の中に入ってひとり立ちしてきたのに、経済的にも自立するときになって、身の回りのことを親に頼るようなことはさせたくない。

「毎日ご飯食べさせてもらいに来るかもよ」  
「食べさせてくださいと来る分にはいつでもどうぞ」

かあさん、めし！なんてやられる話を聞いたことがあるけれど、私はそんなのまっぴらごめんだ。

「貯金なんてできないかもよ」

いいよ、いいよ。結婚祝い金の百万や二百万なら出してあげる。

安い買い物だと思ってくらいだ。

私の感触では、娘も親元にもどる決心をつけかねている様子である。一度自由を手にした娘に、おいそれとはその自由を手放す決心がつかないことを私はひそかに願っている。

盆休みで日本列島を人々が右往左往して

いる八月中旬、娘は京都で頑張っていた。

「大学で職員若干名募集しているらしいの。受けてみる」

説明会には六十余名の応募者が集まった。

八月十三日、月曜日。第一日目は適性検査と個人面接があった。同日、夕方の七時から九時までの間、連絡を待つよう言われて下宿に帰る。その日はめでたく連絡があった。八月十五日、第二日目を迎えた。五十分間の、六名からなるグループディスカッション。テーマは「私の学生生活と職業観」。暑さと緊張でぐったり疲れて夕食用の買い物をすませ、下宿に帰って支度をしようとするのだが結果を待ちながらの夕食では食欲など感じない。

「ここが正念場でしょ、うなぎでも食べて頑張りなさい！」

電話という便利な機械で一部始終は報告があるが、こんなときは近いようで遠い大阪と京都である。

八月十六日、第三日目。またもや六人のグループディスカッション。今度のテーマは「国際化を迎えた大学と自分」。

人事部のおじさんが六人も並ぶ前で一時

間もやらされるというのだから、子どもたちもかわいそうだが、考えてみれば、盆休み返上の職員さんたちも気の毒だ。朝から始めて娘のグループが六番目だったというのである。

まだそんなに残っているわけ？

「電話ももらったわ！ これで今日は大文字の山焼きが見られる」

「そうそう、その調子。明日は明日の風が吹くわよ」

三日目もよい返事をもらうと母親としても欲が出てきた。

「このまま決まるといいわねえ！」

「勝手に期待かけないでよ」

八月十七日、四日目は個人面接連続二回だそうである。

夕方四時からの面接に娘は昼間などか電話をかけてきた。落ち着かない気持ちを持て余してもいたと思うが、前日までに提出していた短い論文や資料を再点検して、面接に備えていたらしい。自分の考えをまとめる相手役に私を使っていたようだ。

私も夕方の買い物を早めに済ますと、面接の首尾を早く聞きたくて電話の前で待機していた。

「駄目だあ、あきらめてちょうだい」  
六時前にぐったりつかれた声の電話がかかってきた。

一回目の面接では、大学職員になることの心がまえ、就職に対する両親の考えなどあたりさわりのないことをニコニコ顔で聞かれていたが、それが済んですぐに二回目

の面接にはいるや、専攻の法律、英語、英会話とぎっしりしぼりあげられたという。

「八時までに連絡なかったらすべておしまい、あーあ、ご飯食べる気にならないし、月曜日は解禁日だから、もう一度就職部へ行ってみよう」

その日、盆週間で早めに帰宅した夫とふたり夕食を食べている最中に電話のベルが鳴った。

受話機をとると、難関を突破した娘のはちきれんばかりの声が耳に飛び込んできた。

「ママ！ やったよ！」

「やったね！」

気象庁始まって以来の暑さという、一九九〇年の娘の八月は、こうして過ぎていったのである。

(え・小島佳子)

# 30歳からの

「高齢出産は危険？」に  
徹底回答！

# 出産

原田静枝



■生命をつくる妊娠のメカニズムを知ろう

■出産に適切な時期であるのか？

■ワーキングマザーのために

■子供を持つと決めたあなたへ

■染色体異常も判明する検査

■逆子で生まれるとき

■血液型不適合はなぜ問題か

■頼れる産科医学

■高齢出産の現場取材して

■生命を産む、出産の仕組みを知ろう

トクMAP&Pブックス 定価★1000円(税込)

徳間書店

〒105-55 東京都港区新橋4-10-1  
TEL03 (433) 6231

## 徹底ガイド

# 塾の教育システム ⑤すべーすらくだ

レポート・岩田 和子

### おかしな名前

#### 『らくだ』って何?

東京都文京区、JR駒込駅前のあるビルの窓ガラスに、「すべーすらくだ」と大きく書いてある。いったい何だろう? これだけでは何をするとするか、まったく分からない。

実はここは「勉強するところ」なのだが、いわゆる「塾」でもないのだ。分からない勉強を習ったり、難しいことを教えてもらうところではないのだから。だいたい何だった、「らくだ」なんておかしな名前をつけたのだろう。

このすべーすを主宰する平井雷太さんの命名の理由はこうだ。「ここでする勉強は

子供も楽、教師も楽だから、『らくだ』とつけたのです」

これだけでもこの「塾」が何かユニークなシステムを持っているらしいことが想像できる。

### セルフラーニングとは何か

私たち親の中でいったい何人が、かつて子供たちに「勉強しなさい」と言った経験を持たずに過ごしてこられただろうか。そして子供がそのとおりにならないことにいらだったり、(親の)思うように成績が伸びないのに悩んだりすることから自由でいられた人が、どのくらい存在するだろうか。「いくら勉強するように言ってもやらない

し、おだててもだめ、しかってもだめなんです。もう本当に疲れてしまってます」

こんなふうに言う親もいる。

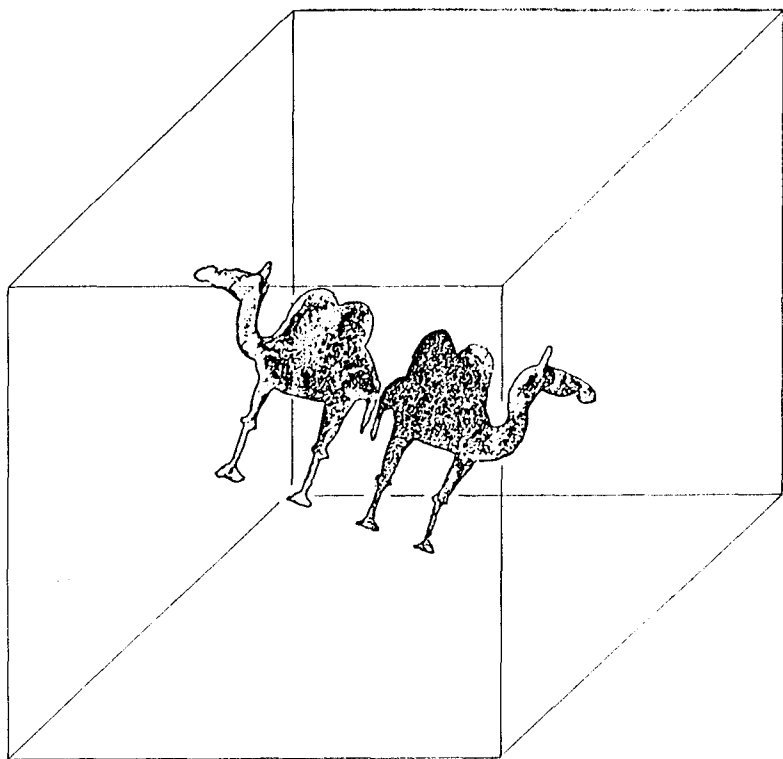
それならば、何も言わなければ?

「そんなことしたら、ますます子供が何もしなくなってしまうじゃないですか」

そうだろうか? 子供はみな、何もしないで怠けていたとばかり思っているのだろうか。

そうではない。どの子供も本当は勉強ができるようになりたい、成績だって悪いより良いほうがいいと思っているのだ、と平井さんは言う。

「勉強は本来自分のためにするもの。子供たちにはそれが分かっているのです。ところが『勉強しなさい』って大人に言われる



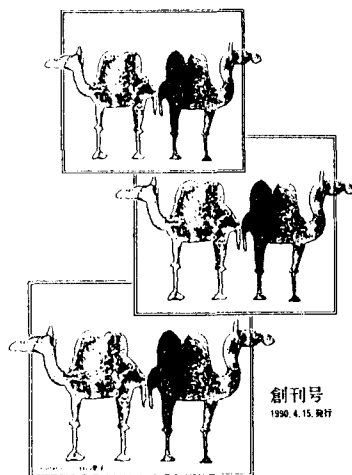
教えられることを  
待ちうけ  
学習を強いられる  
時代は終わった  
創造的な生き方が  
望まれる時代には  
今まで以上に  
自分から求める  
本当の学習が  
必要となる

と、本当はやらなくちゃと思っていても、やる気がなえてしまう。やるにはやっても、自分から進んでではなく、言われたからしかたなくやる、つまりだれか他の人のために勉強するわけですから、おもしろくもないし、身につかない。これを続けていけば、主体的に学ぶ姿勢はいつまでたっても現われません。

しかも自分から学んでいないために、できないと『教え方が悪い』とか、『学校が悪い』と人のせいにする依存的な人間になってしまいます。だからここでは一切『押しつけ・命令・強制』はしません。そうすると逆に、子供たちに自分から勉強しようという姿勢ができてくるのです」と平井さん。しかしそううまくいくのだろうか？　いくとしたらなぜなのだろうか。

「第一に勉強がつかいののは、分からないからでしょう。それなら分かるところから始めていけばいい。それも楽にできるような勉強を。私たちが使っている教材は算数・数学の場合、計算問題のプリントです。どの子も自分が案にできる段階から始められるようになっていきます。これを目安の時間

# セルフラーニング



内で、正確にやれるようにしていくわけですね」

それなら公文式と同じなのでは？と思われるかもしれない。確かにある点では似ている。ただし大きく違う点がある。

まずどのプリントをやるかは、基本的には自分で決める。先生はアドバイスをすることはあるが、「やりなさい」とは言わない。

次に自分でストップウォッチを使って、

かかった時間を計る。さらに自分で採点する。つまり学習者が全部自分でやるのである。

先生が何かを教えるわけではないから、分かる人と分からない人の差がつくこともない。成績を比べられることもないから、自分のペースで学習を進めていけばいい。

また、自分が「やる」と言っていたのにやらないでいても、先生はしからない。子供といえどもやれない事情があったのかも知れないし、コンディションが悪かったのかも知れない。あるいは自分で決めた宿題が多すぎたのかもしれない。そんな場合は次から少なくするという方法で解決できる。要は先生の勉強ではなく、子供自身の勉強なのだから、しかる必要は全然ないのだ。「やらされる勉強」でなく、自分でやればいいのだということを理解した子供たちは、言われなくともプリントを進めていく。

このように自分で自分の勉強する方針を立て、実行し、さらに自分で採点する方式、つまり他人に依存することなく自分で学習を進める方式を、平井さんは完全自学自習法「セルフラーニング方式」と名付けた。

ここに来る子供たちは、最初から自分で選択することを学ぶ。

「まず入会希望者には、こんなふうに言います。ここでの学習は段階に応じたプリントのドリルが中心ですが、訪ねてきた子供に、その子に合った段階のものをまず一枚やってみよう。そして『これならやってもいいと思ったら入会してみれば？ いやならまた来ればいいよ』と言うのです。その子自身に『やってみよう』という気持ちがないかぎり、入会は受け付けません」

プリントはやさしいものもあれば、高度なものもある。自信をなくしている子でも必ずできるものがあるから、たいていの子は「これならできる」と、入会していく場合が多いそう。中には何か月かたってからあらためて入会する子もいるという。

「それから先の学習も、『やりなさい』式ではなく、基本的には『自分はこれだけやる』と子供が選択していくようにしています。らくだ式の教材はそれが可能なように作ってありますし、また実際に多くの子供たちがそうやって続けているのです」

## 子供たちはどのように 学び、選ぶのか

「らくだ」が開かれる午後三時、子供たちがちらほらとやってくる。「こんにちは」と、ドアを開けた子供は、まず家でやってきたプリントを教室の隅の先生のところへもっていく。そこでこんなやりとりが。

「先生、家でやってきたやつ」

— あ、全部できてるね。時間は十分以内でまちがいの数も三個以内か。じゃ次のプリントやってみようか。それとも、もっとミスが減るまでやってみる？

かと思えば、

— あれ、全部やってないじゃない。忙しかったから？　じゃここで続きをやるうね。ということもあり、

— みんなやってあるけど、ちょっとまちがいの数多いんじゃない？

「うーん。ここちょっとむずかしかったんだ、だから時間かかってあせっちゃった」  
— まだ完全にはできないみたいだね。一つ前のにもどってみる？　それともう一度このプリントやってみる？

「もどるのやだ。もう一枚同じのやるよ」  
あるいは、

「あまり自信ないから、前のやってみる」ということになる場合もある。

プリントはB4判、大学ノートの倍の大きさで、算数の場合ここに三十〜百題ほどの計算問題が印刷してある。いわゆるガリ版刷りの手書き教材である。

一番上の左端に「小3—7」のようにナンバーが付いてある。小学校三年生で習う算数の七番目のプリントという意味だ。となりに日は日付欄や名前の他に、ミスの数とかけた時間を記入する欄がある。また仕上げる目安の時間が「10分」などと書いてある。時間と、ミスの数が習熟度を計るポイントとなるからだ。裏には、どうすればその答えになるのか、その計算のプロセスがすべて書いてあり、どこでまちがえたのかを自分で点検できるようにになっている。

今日ここでやるものを決めた子供は、棚からプリントを二枚抜き出し、あいている机に向かって始める。まず日付と名前を書く。次にストッブウオッチのボタンを押し、よいいどん、という感じでとりかかる。

終わると、もう一枚のプリントを裏返しにして採点。ミスの数、時間を記録表に記入して、まちがえたところを直し、再度点検してからまた先生のところにもっていく。おおよそ目安の時間内で終わり、ミスが三つ以内なら、合格ということになって、次のプリントに進む。しかし時間については、その子その子で特性があるので、多少加減することもある。もう一枚同じのをやるか、次に進むかなどについては、この時点で先生と話し合う。

このようにして、だいたいは一〜二枚をここでやって、後は家でやってくる分（宿題）を決める。宿題の決め方も、子供といっしょに考える。

— 今度来るときまでに何枚やってくる？

「一日二枚ずつ。だから十枚」

という具合だが、

「簡単だから、一日十枚やるよ」

と張り切る子もいる。しかし実際に十枚持つて帰れば三日と続かない。それでも「そうか十枚やりたいのか」と、その気持ちを受け入れ、

「とりあえず一日三枚ずつやってみない？」

ともちかけてみる。

それが可能とは思えない場合も、「ダメ」とは言わず、本当にできるかどうか話し合っ  
て決める。もしどうしても十枚、と子供が  
言うならその通りにする。その結果全部で  
きなくても、しかられることはない。自分  
で決めたことを自分が守れなかっただけで、  
先生には関係ないことだからだ。こういう  
場合には子供自身が無理なこと、無駄なこ  
とが身をもって分かるので、次からはちよ  
うどよい枚数が決められるようになるとい  
う。

らくだでは、どんなふうに勉強しようと  
自由なので、各自の取りかかり方もさまざ  
ま。いかにもてきばきとことを進めていく  
子。先生にまつわりついておしゃべりを楽  
しむ子。プリントを前にしても、なかなか  
始めないでぼーっとしている子。家庭や学  
校なら「何やってるの、早くしなさい!」  
と言われかねないケースでも、全く干渉  
ここへ来ているのは「やる気」があるはず  
だから、よけいなおせっかいは不要とい  
うわけだ。見ているとどの子もちゃんとやる  
ことはやっているのである。

先生はここでは教えるということはない。  
相談や質問を受けることはある。しかしそ  
れも子供が自分で考えて答えを出せるよう  
な受け答えをするだけで、指示はしない。  
まだ習っていないところでも、らくだ式の  
プリントは自分で考えればどうしたらでき  
るのか、その仕組みがわかるようになって  
いるからだ。

## 教材はこんなふうに 考えられている

らくだのプリントは、もともと平井さん  
が自分の子供が四歳になったときに、学校  
で算数が分からなくなることがないように、  
との配慮から作ったものだ。

「子供が勉強ができないからって、私がつ  
ききりで教えることなんてできないでしょ  
う。それなら子供が楽にできて、親も手を  
かけずにすませられるような教材を作れば  
いいと考えたのです」

次の図にあるように、プリントはこんな  
工夫がされている。





31) $\begin{array}{r} 86 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	41) $\begin{array}{r} 860 \\ \times 9 \\ \hline 774 \square \end{array}$	51) $\begin{array}{r} 862 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	61) $\begin{array}{r} 806 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$	71) $\begin{array}{r} 816 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	81) $\begin{array}{r} 865 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$
32) $\begin{array}{r} 97 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	42) $\begin{array}{r} 971 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	52) $\begin{array}{r} 972 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$	62) $\begin{array}{r} 907 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	72) $\begin{array}{r} 917 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	82) $\begin{array}{r} 976 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$
33) $\begin{array}{r} 69 \\ \times 7 \\ \hline \end{array}$	43) $\begin{array}{r} 690 \\ \times 7 \\ \hline \end{array}$	53) $\begin{array}{r} 693 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	63) $\begin{array}{r} 609 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	73) $\begin{array}{r} 619 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	83) $\begin{array}{r} 697 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$
44) $\begin{array}{r} 97 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	45) $\begin{array}{r} 971 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	54) $\begin{array}{r} 973 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$	64) $\begin{array}{r} 907 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	74) $\begin{array}{r} 917 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	84) $\begin{array}{r} 978 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$
41) $\begin{array}{r} 88 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	51) $\begin{array}{r} 880 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	51) $\begin{array}{r} 883 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	61) $\begin{array}{r} 808 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$	71) $\begin{array}{r} 818 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	81) $\begin{array}{r} 884 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$
42) $\begin{array}{r} 39 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	52) $\begin{array}{r} 390 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	62) $\begin{array}{r} 392 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$	63) $\begin{array}{r} 309 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$	72) $\begin{array}{r} 319 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	82) $\begin{array}{r} 395 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$
43) $\begin{array}{r} 89 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	53) $\begin{array}{r} 891 \\ \times 8 \\ \hline \end{array}$	63) $\begin{array}{r} 893 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	64) $\begin{array}{r} 809 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$	73) $\begin{array}{r} 819 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	83) $\begin{array}{r} 896 \\ \times 3 \\ \hline \end{array}$
44) $\begin{array}{r} 59 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	54) $\begin{array}{r} 590 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	64) $\begin{array}{r} 594 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	71) $\begin{array}{r} 509 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$	80) $\begin{array}{r} 519 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	81) $\begin{array}{r} 593 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$
45) $\begin{array}{r} 99 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	55) $\begin{array}{r} 991 \\ \times 9 \\ \hline \end{array}$	65) $\begin{array}{r} 994 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	74) $\begin{array}{r} 909 \\ \times 5 \\ \hline \end{array}$	81) $\begin{array}{r} 919 \\ \times 2 \\ \hline \end{array}$	91) $\begin{array}{r} 994 \\ \times 4 \\ \hline \end{array}$

たとえばこのプリントでは、37〜45までの計算をすると、次の行46〜54までの計算は難なくできるということが分かる。一の位のかけられる数は0か1だし、十の位と百の位の答えは前の行とまったく同じものとなるからだ。このような「しかけ」があとこちにあって、計算のマジックとでもいうようなものが会得できるようにしている。つまり計算法則を自分で発見することで、教わらなくともできるようになってしまふのだ。

## アンチテーゼの らくだ式

ここまでの説明では、やはりいくつかの疑問がわいてくることもあるだろう。いったいなぜそんなことをするのか、あるいはなぜこうしないのか、と。気付いたことを平井さんに質問してみた。

Q なぜ教えないのか。これではできない子はやはりできないままではいけないか？

「私はかつて別なやり方の塾をやっていた



平井 雷太氏

した。つまり懇切丁寧に、分かるまで教えるような塾を。確かにそれはそれでうまくいってはいました。しかし、一つ大きな問題があることに気付いたのです。『分かるまで教える』というのは親切なようでいて、実は子供の依存心を高めるだけだ、ということに。

子供が『分からない』という。それなら

『教えてあげよう』。そうすると子供は『分からないければ聞けばいいや』と思い込み、自分で解決しようとしなくなってしまうのです。子供たちは私の塾へきたときは勉強しますし、できたような気がするから満足して帰るのですが、一人になったら何もしない。これではかえって子供の自立心をそこなってしまう。だったら教えなくてもできる方法で、楽に勉強できるのが一番いいのではないかと考えたのです」

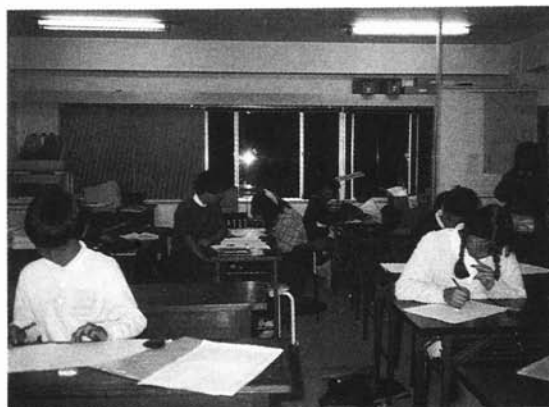
Q プリントだけでやっていても、考える力はつかないのでは？

「プリントで考える力がつくかどうかという点については、確かに自分の学年より下の内容は、単なる反復作業でしょう。しかし自分の学年より上に行った場合、学校で習っていないことをやるわけです。学校では計算の方法を教えてくださいますが、自分で考えるより先に習ってしまうから、なんとなく分かったような気になってしまいます。結果を出すことはできても、根本的に分かっている場合も多いのです。けれどプリントを先にやることになると、計算法則をな

んとか自分の力で見出していかなくてはならない。この点で考える力や自信がつくのです。

子供たちはだいたい一年以上来ていると、自分の学年より上の段階に進みます。こうなると格段に能力が伸びて、意欲的になっていきますよ」

Q なぜストップウォッチを使うのか。早



くできないばいけなののか？

「勉強ができる子のことを『頭がいい』っていいいますが、私はこれはこう言いかえたほうがいいと思います。つまり勉強がよくできるとは、問題の『処理能力が高い』ということだと。処理能力の高い子は、勉強がやさしいからどんどん先へ進み、低い子は、うまくいかないから、ますます停滞して、悪循環に陥ってしまう。」

しかしこれは、いわば体力があるとかないとかいうのと同じ。自分にとって苦手なところを何回か繰り返し学習すれば、問題を処理していく力がつくのではないか、と思うのです。

そこでストップウォッチです。子供たちがある段階の問題をすらすらとこなしていけるかどうかを、ストップウォッチで計ることで判断させる。そのために目安の時間というのを設定して、自分の習熟度を自分で計るわけです。初めは時間がかかってても何枚かやるうちに早く、正確に処理できるようになる。

しかし正確に早くできるようにするためにはストップウォッチを使っているのではあ

りません。これがあるから自分が見え、自分が見えることで次にどんなプリントを何回学習すればいいの、判断できるようになるのです。ストップウォッチで計らなければ、その判断はできません。だから、らくだ式にストップウォッチはなくてはならないものなのです」

Q なぜ先生が採点しないのか。子供にさせても大丈夫なのか？

「逆にききましょう。なぜ、先生は子供たちの採点をするのですか？」

それはたぶん、子供に自分でやらせては、間違えかもしれない。インチキをするかもしれない。そういう危惧があるからなのではないのですか？



つまり子供を信用していないから、そんなことをするんです。私はこう考えています。インチキをしたっていい。答えを写してやってしまってもいい。むしろできるよになりたい一心でそうしている、と考えることもできるでしょう。それはともかく、問題はその後です。

一度インチキをして先へ進んだ子は、必ずどこかでつまづきます。前のことがよくできていないのに、次のことをこなすことはできないからです。ついうっかり答えを写したばかりに、それ以来ゴマカシを重ねていても、どこかでごまかしきれなくなってしまう。そこで初めて、自分のしていたことの無意味さを知るのです。人からしかられるからではなく、自分自身の行ないから理解せざるを得なくなるわけ。

そんなとき、『どうしてこうなったか、分かるよね』と言うと、元に戻って、つまづいたところからやり直す子供がほとんどです。自分で気づくことを待ってやらずに、大人が『インチキしたな！』って言うてしまつと、かえって先生に見つからないようになごまかし方を考えたり、無駄なことに時

間やエネルギーを使いかねません。

もちろん、子供たちに向かって『インチキでもいいよ』なんて言いません。ただ、分からないところは裏の答えを見てもいいとは言っています。要するに分かればいいのですから。ただ、採点をするときに『見た』と分かる印をつけておくように、というルールはありますが。

どのように学習すれば本当に自分ができるようになるのか、それを子供自身が見つけることが大切なのです」

Q 評価はどのようにするのか？

「私は子供を褒めないし、評価もしません。確かに褒められればうれしいでしょう。でも、下手な褒め方をすれば、子供は褒められようとするあまり、本当の目的を失ってしまうことがあるのです。よく子供たちが『勉強したら〇〇買ってよ』なんていいますね。また、よい評価を得る（成績優秀のお墨付きをもらう）ために勉強する子も多いですね。逆に言えば、ごほうびがなければ、勉強の意味を見出せない子供も多いということではありませんか？

でも反対に、勉強にしろ、遊びにしろ、何かを成就したときの純粹な喜びは、他人がどう言おうと関係ないですよ。せっかく自分だけで喜びを味わっているのに、褒



められるとむしろ、ほっといてくれとさえ言いたくなるときもある。褒められるために勉強するなら、しないほうがいいんです。それに不遜ではないですか。褒めたり、評価を与えたりするってことは、上から見

下してるわけでしょ。相手が子供だとはいえ、人格を尊重しているなら、できることではないはずですよ。ただ、感動することは常にありますよ。そういうときは正直に『すごいね』と驚きを表わすんです」

Q 単純なくりかえしや、次になかなか進めないことで、いやになる子はいないのか？  
「それはいますよ。だれだってスランプになる。正常な反応ではないですか。」

私はこのときこそチャンスだと思っているんです。『やりたくないんだ』と言い出したなら、なぜそうなのか、いっしょにもっと深く考えてみる。子供が、何をづらいと感じているのか、本当に望んでいるのは何か、そうなったときこそ分かるんじゃないですか。

本当にいやだと思ったら、一回やめて考え直してもいい。勉強なんて、やろうと思ったときに始めればいいんです。一番いいのは、『だめじゃないか、ちゃんとやらなくちゃ』と上から押しつけること。これではますますやる気はなくなってしまいま

す。

私は、ここへくる子供のお母さんたちに、必ずこうお願いしています。『プリント、もうやったの?』『らくだへ行く時間よ』と、家でも言わないでください、と。

すべーすらくだは『教えない塾』と言われていますが、教えないだけではない、子供のために私たちがしていることは、何も『しないこと』だと言っているでしょう」

平井さんの言うことは、聞いてみると「なるほど」と感じさせられることが多い。これを実践している「らくだ式セルフフレーニング」は、従来の学習方法に対して、強烈なアンチテーゼを提示しているといっただよいのではないだろうか。

## だれでも入れる すべーす

今までここへ来るのは子供たちだけのよう  
に書いてきたが、実際はすべーすらくだ  
に来る人はさまざまだ。子供にしても案々  
こなす子、障害を持つ子、やんちゃな子、  
高校生から未入園児と、あらゆるケース。  
いや、子供ばかりではない。大人でもプリ  
ントをやっている人がいるし、外国人もい  
る。だれが来てもいいのだ。

主宰者の平井さんは、活躍の場を塾だけ  
に限っていない。いろいろな分野にたくさ  
んの友人を持つネットワークカード。その平  
井さんにひかれてここを訪れる人も多い。  
子供たちは、そんなオープンな雰囲気も

「変な塾」とおもしろがっているように見  
える。

すべーすらくだ

所在地

〒113 東京都文京区本駒込六―一五―一

河西ビル五F

Tel. 〇三―九四二―四六五九

会費 一月五千元(通信教育は六千元)

すべーす開催日 毎週月火木金

著書 「セルフフレーニング・どの子にも学  
力がつく」新曜社 一三三九円

(資料提供・すべーすらくだ)

●「押しつけない・強制しない・命令しない」指導で確実に学力のつく画  
期的な学習法「らくだ式」セルフフレーニングとは?本誌で詳しく紹介!

## 平井雷太 セルフフレーニング どの子にも学力がつく

田中喜美子・わいふ  
編集長すいせん

四六判ソフトカバー  
定価 一三三九円

「すべーすらくだ」に行ってみたら、ファミコンに熱  
中するようにスラスラ算数が解けるようになった子  
どもたち。「自己決定力」を育てる秘けつを教えます。

●私たちの家族観を一変させる  
フェミニズム社会学の話題作/最新刊

## 家族をめぐる疑問 固定観念への挑戦

D・ギティンス なぜ結婚するのか等身近な疑問  
金井淑子 問から出発して家族を根底から  
石川玲子 訊 問い直す 定価 二四七二円

新曜社

101 千代田区神田神保町2-10  
電03(264)4973振東京2-108464  
ご注文は書店か、小社へ前金で  
表示価格は税込です

# 一人一芸

## 投稿の鬼

神奈川県藤沢市 上野由紀子(27歳)

私の趣味は、ズバリ、投稿である。

投稿歴はかれこれ二年半くらいになるだろうか。本格的に始めたのは、現在二歳になる長男が生まれて半年ほど経ってから。「お子さんが小さいのによくやるわね」というようなことは、耳にタコができるほど、これまで何度となく人から言われたが、私の場合、むしろ子どもが生まれて、こんな慌ただしい生活をしているからこそやっている、と言っている。

出産の数か月前、仕事もやめ、大きなお腹を抱えて家でゴロゴロしていたころ、当時愛読していた「バブルーン」という妊

婦向け雑誌に、ほんの軽い気持ちで書き送った一枚のハガキ。「私のつわり克服法」という内容だったが、これが思いがけなく採用になったのが最初だ。

昭和六十三年八月に、長男が誕生。コイツがまた恐ろしく夜寝ないヤツで、我が家は彼の激しい夜泣きに大パニック状態！ 慣れない育児に日々悪戦苦闘の私はもちろんのこと、不眠が重なった夫までも一緒に、かなり重症のマタニティ・ブルーになってしまった。

当時は「出口のない迷路」に迷い込んだような毎日で、このまま赤ン坊の世話だけに明け暮れ、「自分」というものがないまま、一生をむなしく終わっていくような気がしていた。

生後三か月を過ぎるころから、息子の夜泣きがウソのようにおさまり、我々の生活もようやく落ち着きを取り戻した。

母親としての目で、息子を冷静に見ることができるようになったのは、このころからである。

年が明け、赤ン坊のいる生活にもすっかり慣れたころ、あるモデルクラブの「赤ちゃんモデル募集」のオーディションに行ったときの話を書いて、朝日新聞の「声」欄に送った。数日後、朝日の担当者から電話があり、「面白い話なのでぜひ載せたいと思います」との由。

親心を巧みに利用して、まだ歩けない赤ン坊の「レッスン料」十万円也をふんだくるモデルクラブの実態を書いたものだったが、ウケがよかったらしく、初投稿で難関朝日の「声」を射止めた。このときは採用を初めから意識せず、「とにかく誰かにこの話を聞いて欲しくて」書いたのがよかったようだ。この意気込みこそ採用につながると信じ、今でも初心として常に心に留めている。

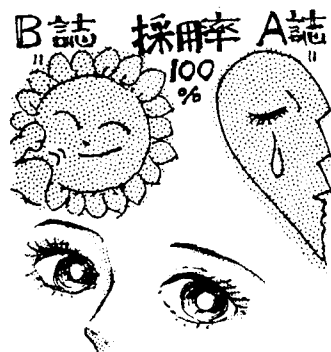
以後、私は「投稿の鬼」と化し、新聞は購読の朝日、雑誌は「わたしの赤ちゃん」「ベビーエイジ」などの育児雑誌を中心に書いては出しまくった。昨年の探

用本数は二十七本。今年は半年で二十本。しかし当然ボツも多く、秘かに悔し涙も流している。最近では、無料配布のPR誌の小さな投稿欄もしっかりチェックしており、毎日投函しないと落ち着かない。

キャリアを重ねるうち、自分なりの「各媒体別・採用の傾向と対策」もできてきた。難関は何といっても、朝日の家庭面「ひととき」欄だろう。毎日精読して研究した結果、家族ネタ、料理ネタ、社会ネタの三つが採用の傾向だというのが分かってきた。このネタで、いかに担当者の泣きどころをつくかが問題だ。

料理ネタで私の魚嫌いの話を書いて送った数日後、朝刊の家庭面を広げると、どこかで見おぼえのある文章が――。ヤッタ、採用だ！ 苦節（ボツ）八回。忘れもしない今年の五月二十八日のことだ。今年の目標はこれでクリアしたようなもの。戦利品は図書券三千円也。

この謝礼というのも、投稿の楽しみの一つである。だが、原稿料として現ナマをくれるところはおくわずかで、図書券ならかなりいいほう。掲載誌一冊、テレ



かなんてザラ。謝礼が特にゴーカなのは育児雑誌で、誌名人りのガーゼのハンカチや動物スポンジには涙が出た。

投稿を始めてよかったことは、それだけではない。新聞社を通じて個人的に手紙をくれた方と知り合いになれたり、友人が増えたことが一番の収穫である。そして「わいふ」と出会えたこと。もっと以前から読んでいたら、産後、あんなに落ち込むことはなかったかも。

自分の書いたものが活字になる喜びを味わいたくて、今日も原稿用紙に向かう私である。

（元・梅村 莓）

## ★わいふバックナンバー

（各号特集テーマ）

- 207号 わが家の経済史
  - 209号 わがふるさとの現代史
  - 211号 病院に入ってみた
  - 213号 私の夫の労働人生
  - 216号 海外赴任―その光と影
  - 217号 大人が学ぶとき
  - 218号 開花する性―私の場合
  - 222号 親の愛情子どもの迷惑
  - 223号 外国人とつきあってみて
  - 224号 我が人生の決断のとき
  - 225号 見合いから結婚へ
  - 226号 セカンドハウス持ってみたらば
- 定価二二八号までは四五〇円、二二九号より四六〇円。送料は実費負担で。※わいふ傑作選（定価一六〇〇円、送料二六〇円）の注文も直接編集部へ。Tel〇三―二六〇―四七七―一・四七七三

# ああこれが看護婦

## ■夜勤ドキュメント■

神奈川県 川崎文子

一九九〇年九月二十三日（日曜日）

■夜勤前日 二十二日は公休で起きたのは午前十時。午後には公民館で行なわれた「生涯学習問題市民フォーラム」に参加。その後の総括会議は失礼して十七時に帰宅。夕食は夫と二人で外食で済ませる。

明日は夜勤だと思うと、とにかく眠らなければとあせる。二十時には床についたものの二十一時、二十二時と時は過ぎ、とうとう睡眠剤に手を出す。

眼が覚めたのは六時、眠った時間を指を折って数えると七時間、駄目だ、もう一眠りしようと再び眼を閉じるがもう眠ることはできなかった。

例年欠かしたことの無いお彼岸のおはぎも仏様には悪いけど生き仏のほうが大事だから、と言いつて作らないことにした。午前中に墓参りを済ませ十二時に再び睡眠剤

半錠を飲んで仮眠に入ったが、うとうとしたころには出勤の時間になってしまった。

夫が初挑戦して炊いてくれた栗ご飯が用意してあった（夫は三連休なのだ）。

■十六時 家を出る。夫は眠気は大丈夫かとか、交通安全週間に入ったから気をつけろよとしつこく注意する。車でおよそ五分、太陽はまだ高くやけに眩しい。さるすべりの花がまるで相談でもしたようにどこの庭先にも咲いている。この間まではノウゼンカズラだった。どうして皆同じ花を植えるのだろうかと思いながら病院に着く。

更衣室に入ると「こんばんは」と挨拶、まだ十六時過ぎ、真昼間である。一枝ちゃんが「どうぞよろしくお願いします」とすまなそうに挨拶した。彼女は今年の新卒なのだ。そうか今日の相棒は一枝だったのか、年齢的にはちょうど親子の関係。内心しんどいことだと思いがちでも、



「こちらこそよろしく、がんばろうね」

■十六時二十分 職場に入る。三人の日勤者は、私たちの「こんばんわあ」に振り向きもせず「ご苦労さまー」の言葉だけが返ってくる。看護記録最後の追い込みである。

勤務時間は十六時三十分までだけれど、この十分が貴重なのだ。私と一枝は夜の注射の準備を始める。栄養の補給を目的とした点滴注射、発熱者などには抗生物質、四時間ごと、六時間ごと、十二時間ごとなどの時間注射、日勤者が用意したものを処方箋と首っぴきで再確認しながら準備する。汗でくもる老眼鏡を拭きながら、ドクターの乱暴なある時はミミズの這ったような横文字にじっと見入ってアンプル一本一本を照合していく。

今夜の点滴は十六人（日勤では四十数本）処方が異なるたびにデスボの注射器と針はポンポンと捨てられていく。昔はガラス製で割れるまで消毒をして使ったものだが、これがコストに跳ね返っていくわけか。

■十六時三十分 申し送り。日勤者の仕事が途中だったが「お願いします」と催促する。仕事がどんどん遅れていくからだ。看護室の真ん中に置かれた楕円形のセンターテーブルに日勤者と夜勤者が向かい合って並ぶ。このテーブルの高さは立ったままで胸の位置である。看護婦は立ったまま仕事をするようにできているらしい。

日勤者のリーダー格の人が看護日誌を読み上げる。日勤者の氏名、入院一名、退院者なし、食止め四名、経管食五

名、IVH（中心静脈から点滴を二十四時間持続している人）五名。重症者は〇〇さんと〇〇さん、要注意は〇〇さんと〇〇さん。外泊者は〇〇さん、外出者はなし。現在患者総数六十六名、女四十名男二十六名、担送三十二名、護送二十名、独歩十二名。

ソセゴン（麻薬に準じて扱う薬品）八本、金庫と鍵を受け取る。「連絡ノートは後で読んで下さい。詳しくはチャートで申し送ります」

私はAグループ、一枝はBグループの受け持ち。患者の容態を前々日に遡って説明を受ける。重症者や要注意のほとんどがAに属し、Aはリーダーでもある。六十四人のうちの三十四人がAに属する。患者の数の上でも質の上でもAはBに比べて負担は大きく、五十三歳の私はB係ということとはほとんどない。

チャートというのは一人一人の台帳のようなもので、名前、年齢、病名、身元引き受け先の基本的なことはもちろん、食事の種類、明日の検査項目、種類によっては明朝禁食や延食の有無、与えている薬の種類、それも定時のものか臨時のものかの別、注射の種類や時間の指定、とりわけ重症者は一時間ごとに体温、脈拍、血圧、尿量のチェックなどが詳しく報告される。一つ一つノートにメモをする。食事はどのくらい食べたか、便の有無、おしっこ回数etc…。それを三十四人分聞く。一人一人名前と顔を浮かべながら頭に叩き込む。「特別変わりなし」と一言で報告が終わ

る人は十人くらい。

聞き終わったのは十七時半。

■十七時半 いよいよ戦闘開始。まず冷蔵庫に保管してある食前薬（大抵は水薬）を目盛り通りに薬杯に準備する。十八時の夕食前に家政婦が取りにくる。

定時薬はキャスターつき配薬車に個人別に収納されているが、明日の昼までの三回分を透明な袋に入れて配る。赤線は朝、無印は昼、黒線は夜の分だと家政婦にしっかり教える。

いくら色分けしてあっても、薬の成分を知らない家政婦に手渡ししてしまう不安は拭えない（そういうことは考えないで割り切ろうと自分に言い聞かせる）。

「クスリです」と言って部屋に入ると家政婦は自分の患者の袋を持って配薬車に寄ってきて受け取る。

■十八時 患者の夕食が運ばれてくる。家政婦がお膳についた名前を探して運んでいく。私たちはほとんど関係ない。その間が私たちの夕食の時間である。

「一枝ちゃん、今のうちに行っていられっしやい」と言うとお四階の食堂に上がっていった。

■十八時十分 日勤帯で入院した八十九歳の腹痛の患者の家族が、「二日も連休で、詳しい検査もせずに寝かしておくだけでは心配だからM医大病院に移りたい」と言ってきた。当直医を呼んで家族の意志を伝えた。当直医は自分が診察して、X線の結果、腸閉塞の心配はないからと説明し

たのに、信頼されなかったのが不愉快だったらしく、

「僕もM医大の者ですが、救命センターの対象ではありませんよ、それでもとおっしゃるなら送りましょう」と言っただけでささとM医大の救命センターに連絡をとって患者を送ることになった。私も大賛成だった。家族が六人もついてきて大騒ぎ、その相手をしている暇などない。それでもM医大へのサマリー（手紙）を書いたり、電話をしたり、救急車の手配をしたりしているうちに、時間はもう十九時である。私は夕食を食べそこねてしまう。一人でも患者が減ってほしい。

## 危篤患者を集中治療室へ

■十九時 全員のバイタルチェックの時間。体温、脈拍、尿量、夕食の摂取量をノートにメモしながら、夕方の点滴のある人には点滴を、眠り薬、便秘薬、精神安定剤などの眠前薬（ほとんどの人がある）を配り歩く。脈をとりながら患者に語りかけ、容態を観察するのもこのときである。

N男さんのベッドサイドに立って容態の悪さに驚く。重症とも要注意とも聞いていない患者だ。臉を開いても反応がない。足は冷たいではないか。

「何時からなのよ」と家政婦を怒鳴ってしまう。朝からこんなだったけど看護婦さん忙しいそうで……と悪そうに言う。

即刻集中治療室にベッドを移動、家政婦に湯タンポの用

意をさせる。酸素マスクをつけて二リットルで流す。当直医を呼ぶ。家族にすぐ来るように連絡をとる。既に瞳孔が四ミリに開いている。当直医は血液のガス分析をやり酸素を五リットルに増量。尿量が今朝から二〇〇ccしか出ていない。腎不全だ（日勤者はどこを観察してるんだ、無性に腹が立つ）。

■十九時四十分 ピンポン、ナースコール。二〇五号室からだ。N男さんのバタバタで二〇五号室はまだ行っていない。八十歳S子さんの様子がいつもと違うから診てくれと家政婦がうろたえている。肺癌の末期の患者で主治医から既に家族に病状は説明されており「積極的なことは何もしない」ことになっている患者だ。呼吸が荒い。一分間に四十回、しかも規則的ではない。今までも何回かこうした状態になりながら蘇った人だ。S子さんの胸にモニターをつける。これは看護室にいながら心臓の動きが見える機械なのだ。家政婦には絶対に目を離すなと念を押す。

集中治療室はN男さんで満床。この部屋で見るしかない。今晚だ。いくらボケ老人ばかりでも十人部屋で死を看取るのは気持ちが悪む。ベッドを移動したってそれが死を意味することは誰でも知っているけど。

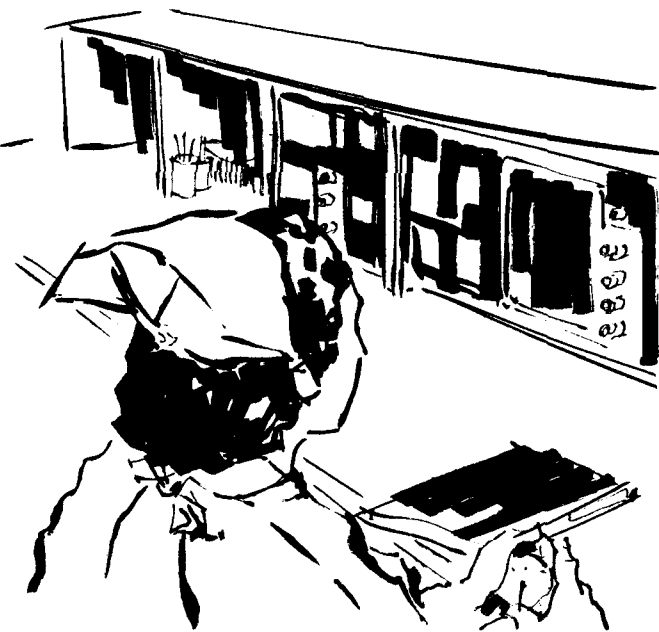
家族への連絡はもう少し様子を見よう。今までも何回も呼んでいる。私はN男さんとS子さんの間を走って往復するだけで、他の患者は一枝に「お願いね」で顔を見ることもできなかった。

■十九時五十分 救急車のサイレンが急に止まった。今夜の救急当番は三階の看護婦だと安心していたら、尿管結石の疑いで入院との連絡（入院は二階と決まっている）あり。六十六歳の男性。

「あなたのほうでとってちょうだいね」

一枝はけなげに「はい、わかりました」と気持ちよく患者の迎えに行く。日勤から渡された金庫の鍵をあけてソセゴン—アンブルを注射すると間もなく眠った。

■二十時 事務から電話で、さっきM医大に送った患者が





先方で診察の結果、救命の対象ではないからと戻されたというのだ。断わる間もなく、家族はさっさとものベッドに患者を寝かせているではないか。アツタマに来てしまう。「どこかお知り合いの病院なり、そちら様が信頼できる病院なり、どこへでも納得のいくところへお連れ下さっているのですよ」

「それがいいのです」

「ここが信頼できないのでしょうか？」（イヤミだとわかっているのだ）。

「M医大でこちらでよろしいといいましたので」（こっちは生きるか死ぬか二人の患者で飛び回っているんだ。八十九歳の腹が痛いだけのじいさまにつきあっている暇はないんだ）

「この病院は基準看護ではありませんのでどなたかご家族の方に今夜お世話頂くことになるのですが…」

「主人も仕事で疲れていますし、私も体が丈夫なほうではないものですから……」

「じゃああなたがおつきなさいよ」

悪くなったらこの病院のせいだといわんばかりに、不信をあからさまにしたまっただ孫（二十五歳ぐらいの医学生かな？）に言う

「おむつなんて僕でできませんよ」

（偉そうなことを言うな、たった一晚の世話もできないではないか）

「申し上げておきますけど、老人が寝れば痴呆は進みますし足のふらつきも始まります。ご家族のようなお世話を期待されてもできませんので、それを承知でしたらどうぞ」  
家族はさっさと帰って行った（こんな病院には任せられないようなことを言って、そんなに大事な人ならば一晩くらい面倒見たっていいじゃないの）。

家族のいる内に言えはいいのに、そのおじいさん、うんこがしたい、おしっこがしたいと騒ぐ。オムツをしてやるとオムツではできないと言うし、おまけに耳が遠くてこちらの言うことはよく聞こえないのだ。私も当直医もN男さんS子さん、他に二人の重症者、救急患者で手も足も四本欲しいのだ。じいさんには悪いけどオムツを二重にして睡眠剤を飲ませて眠らせた。

## 二人目の救急患者

■二十時三十分 また救急車だ。こんどは六十六歳の女性で全身がしびれるのだそうだ。即入院、埼玉から息子のところに産後の手伝いに来て疲れたいとのこと。

こんどは私が受ける番だ。アナムネというのを聞く。つまりいつからどうしてそうだったか。前にどんな病気をしたことがあるか。アレルギーは、喘息は、親は元気か、死んだなら何で死んだか、兄弟は、子どもは何人で元気か、タバコ、酒、義歯の有無<sup>etc</sup>……（こんなこと夜中にすることかい、日勤ですればいいのだ）。

体温、脈拍、血圧を測定してその間に全身の状態を観察する。

「手がしびれて、だんだん感覚がマヒしていく、大丈夫ですか、大丈夫ですか」と不安げに訴える。一見して過換気であることがわかる。酸素の吸い過ぎで血液中の酸素と炭酸ガスのバランスが崩れる症状で一種のヒステリーなのだ。ビニール袋を口に当てて息を吸わせて五分もするとすっかり落ち着いて眠ってしまった。ドクターも経験不足、脳の障害だと思っただけ（これで救急車が呼ばれたんじや消防の人も気の毒）。

■二十一時 消灯。出勤して一回も顔を見ていない患者もいる。何はさて置いても一巡しなければならぬ。おやすみなさい、おやすみなさいと部屋を駆け足で巡る。家政婦

たちに「お願いしますね」ともう患者の全面委任である。S子さんの家政婦には呼吸が乱れてきたらすぐナースコールよ、と念を押す。

■二十一時二十分 一巡して看護室に戻るとN男さんの家族がぞろぞろと泣きそうな顔をしてベッドの周りを取り囲んでいる。昨日まで自分でご飯を食べていた人だから、家族が慌てるのも無理はない。

夜分においでいただきましてと丁寧に挨拶をする。当直医を呼んでウンテラ（病状の説明）をしてもらう。ラッキーにも今日のドクターは「優しい君」のYドクター。N男さんの家族には椅子をすすめ、X線写真や検査のデータを見せながら丁寧に優しく詳しく今の病状を説明している。主治医がもっと早くにやっておくべきことでアルバイトの仕事ではないのに嫌な顔一つしない。

「万が一の場合はどうなさいますか？ 人口呼吸器をつけるという方法もありますけれどもねえ……八十二歳のご高齢ですからねえ……」

（積極的ではない彼の姿勢が嬉しい）。

N男さんの家族の表情に不満は感じられない。ドクターの説明に納得している。この手続きが私たちは欲しいのだ。病気の説明、家族の納得、最後にどこまで治療するかの場合である。これさえきちんとできていれば私たちの臨終の対応はそれで決まるからだ。

Yドクターは私に両手の人差し指でX印のサインをした。

私は右手の親指でOKする。それで決まり。

「どなたかお一人は残っていただき、あとはお引き取りいただきましょうか、それとも一階のフロアで待機して下さってもいいのですが……」長男だという人が残って全員帰って行った。

その間、注射で眠らせた尿管結石の患者が痛みが止まらないと何回もピンポンのコール、ソセゴンはそんなに頻繁には使えない。水を沢山飲んで石を流すしかない。薬で溶かすといってもすぐ効果があるわけではないといくら説明してもピンポン、ピンポンと呼ぶ。そのたびに足音をしのばせて走る。

■二十二時 N男さん、ケイレンが始まる。目玉を剥き出しにしベッドが揺れるほど全身ががたと震える。三十秒で終わった。ケイレンを止める注射をすると血圧が下がるからできるだけ使いたくない。

「もし一分以上続くようならホリゾン半分ね」とYドクター。

■二十二時十分 カルテが山のように積んだままだ。何一つ記録をしていない。私は食事もしていないのだ。

「一枝ちゃん、少し休もうか」

「私は平気です、川崎さんこそ休んで下さい、私が何もできなくてすみません……」

冷蔵庫から麦茶を出して立ったまま飲む。出勤してから一度も座っていない。めまいがする、天井が廻る、冷汗が流れる。一枝に気づかれないように冷水で顔を洗う。

■二十三時 温度板に十九時の体温を記入し、カルテの看護記録を書き始める。モニターを横目にみながら。S子さん、N男さん、M子さん、J男さん、四人の重症者のモニターが心臓の拍動を数字と波形で知らせてくれる。昔はこんな便利な機械はなかった。看護室にいながら、カルテを書きながら患者の状態を知ることができるのだから便利だ。それでも私はそうした機械に慣れていないからやっぱり心配で数分もじっとしてはいられない。

それだけでも他人の倍は疲れるのは分かっている。

■零時 定時の巡視。懐中電灯の明かりを両手で後に隠し、しのび足で各部屋を廻る。一人一人をそっと覗く。呼吸をしているかを確かめる。毛布をかけてあげ、点滴の滴数を



数え、タンがずるずるしていれば吸引する。尿袋の目盛りを読み、掌にボールペンでメモをする。

S子さんの呼吸が下顎呼吸に変化。額に冷汗が光っている。あと二時間くらいか。家族が病院までくる所要時間を計算、ぎりぎりまで待つ。

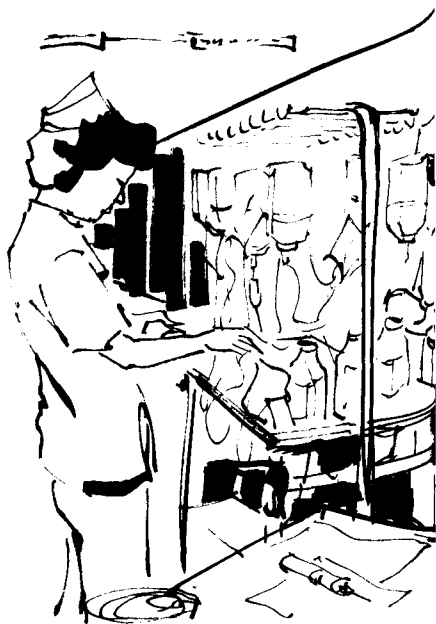
■一時三十分 モニターの波形を気にしながら、明日の点滴の準備を始める。四十数本のボトルに処方された薬剤を入れる作業だ。処方と薬品の照合、老眼鏡を何度も指の腹で押しあげながら黙々の作業である。アンプルを折る空気を割るようなボンボンという軽い音だけが深夜の看護室に響く。切ったアンプルを注射器で吸うしゅっという音、ガラスを捨てるガチャンという音、ほとんどがビタミン剤が種類の違うアンプルの数は二百本を越える。おかずを詰めたボトルは黄色にピンクに無色に白濁に染まって患者の部屋ごとに並んでいく。

## 二人の患者を見送る

■二時十分 S子さんのモニターの警報が鳴る。脈が一分間に五十回を割るとブザーが鳴るようにセットしておいたのだ。二〇五号室に走る。下半身は紫色、酸欠状態に陥った。時間の問題だ。酸素の量を五リットルに上げて家族に電話。電話のベルは二回で通じた。

「あと一時間くらいかと思われませんが……」

「明日の朝一番のバスに乗りますから」



「それでは間に合わないと思いますが……」

「もう、仕方がありません」

それで電話は切れた。

私はS子さんのベッドの横に椅子を引き寄せて座った。意識は全くない。瞳孔は満月のように開いている。脈はどこでももう触れない。本当は集中治療室に移したいのだがベッドが一つも空いていないのだ。家政婦にひそひそ声で他の患者に気づかれないうちにそっとやろうね、と耳打ちする。

蛾のような冷たい頬に両目から涙がずっと流れた。意識がないのにどうして涙が流れるのだろう。

一枝が走ってくる。

「モニターが二十に落ちています」と小さい声で知らせる

くれる。

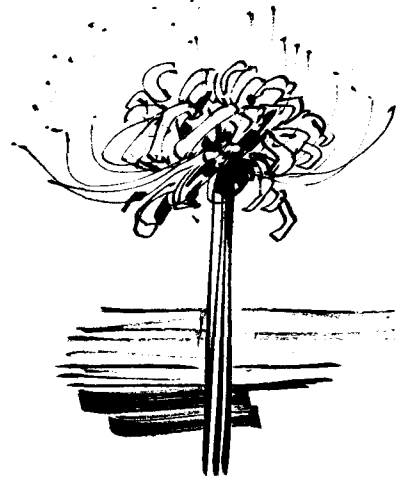
「もうドクターコールをしようか」

「はい、そうします」

間もなく呼吸が止まった。心臓のあたりを二、三回軽く叩いたが息は二度と吹き返さなかった。ドクターが心臓が止まるのを聴診器を当てて待った。S子さんの心臓が完全に止まったことを確認。三時三十五分。

カーテン一枚の隣に気づかれないようにバケツに湯を汲んできてS子さんの体を拭く。三人とも無言。死んでしまえばただの物体だと言うけれど一年近く接してきた人だ。

「Sちゃん」と呼ぶと機嫌のよいときは目を開けてみせてくれた笑顔が浮かぶ。痩せこけた手や足、床ずれのできた骨ばかりの背中が痛々しい。入歯を入れるのに二人がかりで手間どった。口が開かないのだ。肛門や口や鼻、耳に綿を詰め、紙おむつの上からT字帯を締めてタテに結んだ。白い着物を着せて両手を合掌させ、合掌が崩れないように



包帯で結んだ。数えるほどしかない薄い髪に櫛を入れて顔の形を整えて頬と口に紅をさした。

一枝と二人で仏様を抱いて霊安室に運ぶ。

軽かった。九月二十四日午前四時半。

S子さんの家族に電話、息を引き取ったことを報告、それでもすぐ行きますとは言わなかった（病院に來たのは八時過ぎ）。

■四時五十分 一息つく間もなくN男さんのモニターが乱れ始める。ついている息子は頻繁にベッドの側から消える。いたたまれないのか、淡泊なのか、煙草を吸いにロビーに降りる。たった一人の親だろうに、感謝することや詫びることはないのか。

吐き気がする。頭がボーとして体だけは動いているが思考力はまるでなし。さっき入院したヒステリーのばあさんのピンポンが頻繁だ。そのはずである。点滴が一〇〇〇ccも入っているのだ。おしっここのコルばかり、そのたびに便器を持って走っていく。すぐしてくれればいいのになかなか出ない。じっと待つ時間のじれったいこと。

一枝の患者のJ男さんの血圧が下がってきたと言うし、N男さんは一直線に死へ降下していく。予想以上の速さだ。いったん帰した家族を至急に呼ぶ。

ときどき呼吸が止まるけれど忘れたころにまた胸廓が微かに動く。そのたびに家族が「死んだのですか」とおろおろする。腎不全のN男さんが急変してまだ一日、いくら何



もしないと言われてもS子さんのようなわけにはいかない。数人の家族の目の前である。家族が納得するような死に方というものがある。

ドクターを早くから呼んで、心臓マッサージをしてもらう。私がベッドに乗って両手を重ねてN男さんの胸を押すと肋骨がボリッと折れる鈍い手応えがした。家族は誰も気がつかない。ほっとする。

看護室のモニターをガラス越しに家族の見える場所に向きを変え、ドクターがモニターの意味を説明した。モニターがゼロになるのを待った。あっけない死だった。意識もなく苦しみもせず眠るような死であった。九月二十四日午前六時零分。

■六時三十分 三十分遅れて全員の検温、種々の検査のための採血、持続している点滴の交換、最後の力を振りしぼって時間との闘いが始まる。

私は涙がこぼれた。何の涙なのかわからない。足はもつ

●田沼千恵・著

# ねえ、聞いてからだのはなし



★田親でもあり、消費生活アドバイザーでもある著者が、初期の少女たちの驚きや不安に具体的に答えた本です。生理の日の過ごし方・心配なことO&Aなど、学校生活やぐらしのなかで月経をとりえ、イラスト入りでわかりやすく語っています。

れ、めまいと吐き気、顔には冷や汗、それでも仕事を放棄するわけにはいかない。洗面もせず、化粧もしないひきつった顔を承知しながら病室を廻った。

機械的に患者の手首を十秒間持っただけで「おはようございます」も言えない看護婦。それを情けないと思う気力すらもうない。事務的に数字をメモリ、温度板に記入していると、ぼーっと気が遠くなるように睡魔が襲う。色鉛筆が何度も床に転がった。

採血した検体と伝票を合わせてノートに記録すると八時である。三十数人の看護記録はほとんどが未記入。残業だ。■八時三十分 日勤者が揃う。「ご苦勞様」と口々に労ってくれる。

■八時五十分 申し送り開始。終わったのは九時四十分。書き残した看護記録を書いてタイムカードを打刻したのは十時三十分。

(え・西田淑子)

子どもが  
自分で読む  
月経の本

全国学校図書館協議会選定図書／B6判／128頁／定価1000円(税込)／送料210円

アスク講談社

東京都新宿区下宮比町2の1  
〒162 ☎03(267)7341



## 「原田静枝さんと 話す会」の ご案内

「わいふ」仙台サークルのメンバーが中心になり「スイートボテト」というおいしそうな名前のグループができました。なんと「わいふ」の原田静枝さんが仙台にいらっしやいます！当日は再就職や女性の生き方について二十名ぐらいで話し合いをしたいと思います。

「わいふ」の読者のかた、どうぞ事前に連絡を下さい。

◆日時 十二月十五日(土) 午後一時～四時

◆場所 エルパーク仙台・五階会議室

◆ゲスト 原田静枝さん(再就職アドバイザー)

◆参加料 なし

◆保育 なし

◆連絡先 立花 〇二二二七  
八七五九三、宮坂 〇二二二七  
三三〇八四

## 「わいふから 巣立つて 働き出した 仲間たちへ

投稿する時間もなく、集うチャンスもなくなってしまつて……。でも、やっぱり「わいふ」は私たちのふるさと。そんな仲間の集いを持ちます。

これから子供を育てる人や、新しい方々も、あなたの方の先輩に会ってみませんか。

情報交換、最近の動向はもちろん、そんな堅いことだけじゃなしに、たまった心のおりを洗い流す集いにしましょう。

発起人は亀山和枝、高野貴子、原田静枝。

▼日時 一九九一年一月十六日(水) 午後六時

▼会場、料金は未定(新宿の予定)

▼申し込み方法 往復葉書に住所、氏名、近況を明記し、返信用には自分の住所、氏名も書いて左記にお申し込み下さい。

〒214 川崎市多摩区登戸一二九  
九 エスポワール一〇三

原田静枝 Tel&Fax 〇四四一九三  
三二七二九一

## 投稿誌「ぐりーむ」

二二五号で創刊のお知らせをしました隔月刊の投稿誌「ぐりーむ」では、引き続きライターさんを募集中です。

創刊号の特集テーマは「今、本当に女の時代か」、第二号は「今、私はコレが欲しい！」そして来年一月に発行予定の第三号では「あの有名人、ここがスキ、ここがキラリ」を特集します。特集以外にも自由投稿のページあり。肩の凝らない身近な話題、ミイハーチックな投稿も大歓迎です。

現在、メンバーは二十代、三十代の主婦が中心。あなたもぜひ仲間になって下さい。年間購読料は二千元です。

ただ今、第三号の原稿を募集中。とりあえず一冊読んでみたいという方はご連絡下さい。創刊号、第二号とも四百円(含送料)で至急お送りします。「第〇号希望」と、送金用紙ウラの通信欄に明記の上、左記まで。

◆郵便振替口座 横浜五二二三〇二二

◆加入者名 投稿誌ぐりーむ

◆連絡先 〒251 神奈川県藤沢市

大鋸一〇二四一四 小倉荘第一

一〇三三号 上野方 投稿誌く  
りーむ

## 私たちのための 女性議員を 応援しよう!

来年の統一地方選に向けて、  
女性の立場から一人でも多くの  
女性議員を各自自治体に送りこみ  
たいと思います。

次の地域にお住まいの方で、  
立候補者の女性を応援したい、  
あるいは詳細を知りたいと思  
いの方は各地域の世話人まで  
ぜひご連絡下さい。

△女性議員を自治体に送る女  
たちの会▽

(東京都新宿区市谷加賀町  
二一五一一三 田中喜美  
子)

所沢市立候補者 中嶋里美(家  
庭科の男女共修をすすめる会そ

の他で活動・職歴高校教師)

・世話人 石栗かつ子(〇四

二九一九八一六六三三)

文京区立候補者 永井よし子

(文京の教育をよくする会/平  
和を考える母親のつどい「たら  
ちね」の世話人などに活躍)

・世話人 高柳美奈子(〇三

一八二二一二〇九二)

杉並区立候補者 富沢よし子

(子どもの人権を考える会代表  
/高齢化社会をよくする女性の  
会などで活動)

・世話人 岡元美智子(〇三

一三九五一六四八七)

## 福岡サークルだより

田中編集長の講演以来、ぐっ  
と結束を固めた「福岡サークル」

は、本音で話せる仲間を募って  
います。次回会合は十二月中旬  
の予定。連絡してください。

tel〇九二一五六六一一六四

川谷由紀子

## 私のPR

### 会席料理

### 「溪聲庵」

### 開店のご案内

小田急線経堂駅の近くに、小  
会席料理の店を開きました。会  
合、お茶会、その他いろいろな  
お楽しみ会等にご利用下さい。

◆定員 十二名まで(八畳一間)

◆値段

貸席だけ 二時間五千円程度

料理付き 松華堂コース四千

円、ほうとうコース三千円

◆営業時間(毎日)

午前 十一時三十分~十四時

午後 十七時三十分~二十時

◆場所 〒156 東京都世田谷区経

堂一ノ三二ノ二(小田急線経堂

駅より徒歩四分)

◆電話 〇三二四二八一四四六

四「溪聲庵」大江貴美子

※ご利用の折は、必ず予約をし

て下さい。

## ルナ・カレッジ 東京へのお誘い

東京方面にお住いの主婦の皆  
様のご要望に応え、ルナ・カレ

ジ東京クラスが九月から秋葉原  
で開かれています。主婦の英語

の勉強を側面から支え女性の社  
会参加への応援をするルナ・カ

レッジ東京へ参加しませんか。

◆費用(授業料、教材費他含)

三か月 二万九千円

入学金 一万円

◆日時 十二月より三か月十回、

いずれも金曜日です(常設クラ

スにつき四月からも継続)

初級 十時三十分~十二時

中級 十三時三十分~十五時

◆場所 東京都千代田区神田岩

本町一岩本町ビル岩本町会議室

◆問合せ先 〒464名古屋市中種

区法王町二一五ルナ・カレッジ

tel〇五二一七六二一六〇三五

来年四月、東京での上級クラ

ス(午前)や横浜校も開く予定。

# 母の戸籍

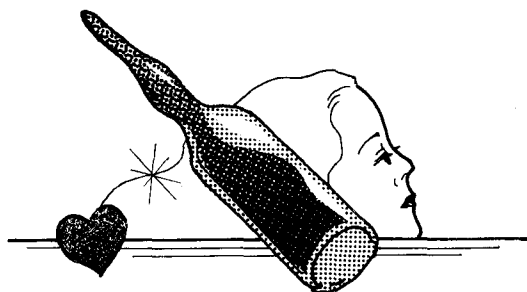
大阪府茨木市 藤川 洋子

## 突然の電話でタイム・スリップ

遠く「K市」からの電話は、三十六年も前に亡くした母を思い出させ、私を幼いころへタイム・スリップさせた。それに母方の縁の人達について不詳だったことがいろいろ分かった。日頃から不信心の私に、法事があってもきっと思い付きもしなかっただろうことをさせようとしている。その電話は、「K市」に祖父（母方）名義の不動産があり、その権利を引き継ぐのが現在「私」しかないのだというのである。信じられない。しばらくの間それだけで驚きであった。まったく実感がなかった。

戸籍上、「兄」であった従兄弟の家にその電話がはじめにあった。従兄弟は私の母の死後、私の家からすぐ除籍され、実の親元である親戚に「養子縁組」して帰った。祖父母に始まり、母の婚姻先の戸籍（私の実家）をたどり、「長男」として届け出されていた従兄弟に連絡が入り、私のところまで巡ってきた話である。

母は「K市」に生まれた。小さな寺の娘として育てられ、早逝した兄が一人いたという理由は定かではないが、母は年頃になってひとり大阪に出てきた。そして父と出会い結婚した。母の実家のその寺の名は「江西寺」。母の生い立ちほとんど分からず、こんなわずかな情報しかなかった。父との結婚生活はしばらくは幸せだったようだ。長年子が授からず、親戚から従兄弟をもらって「長男」として入籍した。その直後、私を宿したというから俗にいう「ひがめっこ」の存在に私はなる。しかし父が四十歳、母が三十歳を越してからの子で、その溺愛ぶりは周囲の非難的であったらしい。後々まで「わがままに育て



られた」とことあるごとに私は周りの者たちに言われ続けてきた。

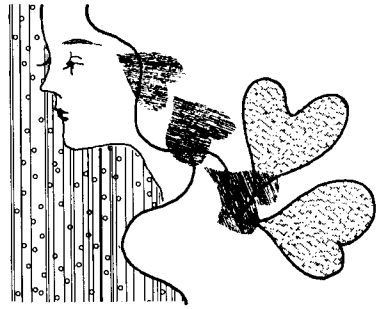
母は病弱であった。産後の肥立ちが悪く当時の食糧事情も重なってか肺結核にかかった。物心つくころ「ストレプト・マイシン」という言葉をよく耳にした。当時、結核の特効薬と言われていた。父は時折、そのアンブルの箱入りを買ってきて母に渡すと、母は「いつもすみません……高いのに……」と言っていた。父はうなずくだけだった。母はアンブルの口をハート型のやすりでこすり、ポキッと慎重におり、直径二、三センチもある注射器の先端からスーッと魔法じかけのように透明の液体を吸い上げていった。そして自分の太腿を出し、アルコール綿で何度も同じところを拭って消毒していた。アツと思う間にとがった針先をそこに突き立てる。痛みを我慢するのか眉間にしわを寄せて……。そんな母を見るのはとても怖かった。

小学校二年に進級する春休みのころ、両親と兄とで大阪城に行った。桜がたくさん咲いていたのに人影がまばらだった。ウィークデーだったのであろうか。曇り空の肌寒い日だったのを記憶している。私はくすんだピンク色の毛糸で母が編んだ透かし模様の半袖のセーターを着ていた。母は着物姿でショールをしていた。

父はよく、兄と私をあちこち連れて行った。手のかかる子供がいると母がゆっくり休めないだろうという心づかいもあったのだらうか。いつもは母がいっしょではなかったたのでその情景はよく覚えていられるかもしれない。初めてで最後の家族いっしょの外出だった。

## 母との別れ

産毛から伸ばした長い髪をいつも母が三つ編みにしてくれていた。大阪城に行った日から間もなくのある日、母は鏡台の前に座るように言った。裁縫と新聞紙と日本手拭いを持って私の後ろに立った。私は反射的に「イヤー」と叫んでいた。そして鏡の中に嗚咽をこらえ泣いている母の顔があった。「洋子、明日から編んでやれなくなるから……。お母さん、明日病院に行くからね。しばらくしたら帰ってくるから……」と私の頭を抱え込んで母は



泣いた。「短くしたら帰ってきたとき三つ編みできない」と私も泣きながら母の心も知らず言っていた。さとい子ではなかったが、子供心に母は帰ってこないのではないかと不安な予感を持った。髪を切られたくない気持ち伝えたいのに、母の緊張した厳しい表情にだまって従った。鋏を入れる前、何度も髪をすき、撫でさすってくれた母の血管の浮き出た青白い細い手。

「ジョキ、ジョキ、ジョキ」といさぎよい鋏の音にじっと耳を澄まし、目はしっかりと閉じていた。鋏の音が止むと首筋の辺りが寒かった。「よく似合うよ。おかっぱが……」という母の声にそっと鏡の中の自分を見た。自分でない気がした。とても悲しいつらい顔。悲しみをはっきり意識した初めてのときだったように思う。髪を切られたからではなく母と離れなければならぬ淋しさだった。

私の予感どおり、丸三年の長い療養生活の末、私が十一歳小学五年生の正月早々、母は不帰の人となった。肺結核は死の直後、菌が多量に体外に出るから子供は近寄せられないとの理由で（医学的に正しいかは不明だが）、病室では逢わせてもらえなかった。泣きはらした顔の大人たちが病室から出てくるのを兄とだまって見守っていた。母と最後の対面をしたのは、死化粧をし純白のヴェールをかぶり白い花に埋もれ棺の中に眠っているときだった。小さな人がさらに小さく細くなってしまうていたが、きれいだった。私は泣かなかった。髪を切ったときその覚悟をしていたのかもしれないと思う。泣いている兄を見ていた。誰とも口を利かなかった。

入院中、クリスチャンとして入信し熱心に祈りを捧げていたということを後年聞いた。咯血し息を引き取った朝もミサに参列していたという。洗礼を受けた折、牧師から母に贈られた短歌の短冊と水色の石のついたロザリオを私に残して逝った。仏陀の教えを説く寺に生まれながら、クリストの教えに馴染み敬虔なクリスチャンになるなんて。母の心中はクリストにもすがりたい思いであったのであろうか。ロザリオを見るたび変な思いがし、また心が痛んだ。母の人生の終わりがこのことは特に鮮烈に記憶している。

あれから三十六年の歳月が流れた。突然浮上した不動産問題は母への激しい思慕を目覚めさせ、「K市」に行きたい、「江西寺」が残っているならその地にたつてみたいという衝動を私に起こさせた。誰かその寺に縁の人はいないのだろうか。母の手掛かりになるものは何かあるだろうか。祖父たちの墓はどうなっているのだろうか……。

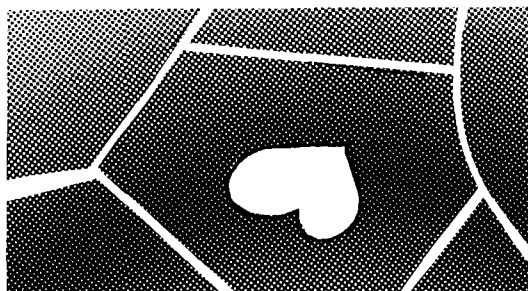
私は今、母の逝った年齢を通り越した。何と母は若くして……と思う。二人の子を残して死に難い思いをしたのであろう母を思うと、切なさで胸が込み上げてくる。

## 相続の話に心ざわつく自分

そして私には大学生になる息子がいて、下宿している彼とは別居生活である。夫と二人で勤めを持ち貧乏ヒマなしの生活である。が現在、特別手に入れたいものなどとりたててない。このまま老いてゆければいい。年を重ねるにつれ、健康と心の糧になるものを求めるようになり、これで充分と思っていたところにこんな話が飛び込んでくるなんて。

私の現在勤める会社は不動産鑑定事務所である。例えば、「土地売買」の売り手が売りたい土地の鑑定を依頼してくる。鑑定士が現地に赴き実査（実地調査）を行ない、法律に則ってその土地の価格を決めるのである。環境、立地条件、経済的利益、将来的見通し、そのときの物価状況やその時点での土地の公示価格などのあらゆる面から推論を立て、適正妥当な価格を判定し、その資料を作成するのだが、一平方米当たり、十数万円、数百万円の判定もあるのだ。そしてその土地が売れたらわずかな土地であれ「百万長者」いや今や「億万長者」となれるわけなのだ。

そんな世界は他人ごと、私にヤトンと縁がないと思っていた。今はサラリーマンが汗して働いても持ち家など夢の夢。マッチ箱を積み上げたようなマンションですら手が届かない。その「K市」の祖父の土地はたかだか七十平方メートル足らずの広さなのであるが、現在賃貸住宅に住む我が家とほぼ同じなのである。こんなところに住む我が身にとっては全く手の届かぬ話が非常に近くにあり、ひょっとしたらと思う世界に自らが入っていきそうな気



配に驚いている。

「これがン百坪、ン千坪とかの広い土地だったりすると『連続密室殺人事件もの』やね」「テレビの見過ぎよ」などという夫との会話に笑いこぼしてしまったりもした。「不動産」と聞くと、忌まわしい事件を想像したり、おぞましい欲のからんだ品性のない人間模様がみえそうで、それをさらけ出させるような連想があつて「不動産関係」の事務所に勤めるにもかかわらず、何となく嫌な感じがしないでもない。地価高騰のおおりで不当な利益を得ようとする人間が最近は余りにも多いからかもしれない。カネ、カネ、カネの世の中、自分を客観的に眺めながら私の心もさわつくのがわかる。やっぱり人間って弱いな、物は何もいらぬと言いながらも、私の目の色はきつと変わってるだろうというのが実態。

「K市」から再び連絡が入り、来阪して面会を求めてきたのをきっかけに、私はその渦中に入らざるを得なくなった。「K市」からの要件は、戦中から現在も道路として使われている所を舗装したいが、その一部が祖父の私有地であるため承諾してもらいたいとの内容であった。

「K市」の職員で実直そうな二人の男性が来阪した。私は従兄弟に同席してくれるようたのんだ。資料がカバンから出されテーブルに並べられた。「字限図(測量図)」。それを見ると問題の道路に蛍光ペンで黄色く色付けされて、それぞれの所有者名と地番が記されていた。祖父の土地は道路全体からみると猫の額ほどのものであるが、道路と地続きに広く土地を所有している者も何人かいた。その道路は戦中、皇軍の基地と飛行場を結ぶ重要な道路だったそうだ。当時「お国のため」という大義名分のもとに供出させられたのであるうか。そのころの人達にとってはごく当然のこととして無償でさし出したのだらう。これはあくまで私の推量であり事実かどうかはわからない。次に「土地登記簿謄本」。これには所在、地番、地目(宅地とか畑などの種類)、地積、登記の日付、所有者名が記載されている。仕事で見ることはあるが身近なものとしては初めてであった。

そして「戸籍謄本」の写し。祖父母、その子らである母を含め以下八人、それに従兄弟、



私までのものが十数人分がファイルされ、二十センチ近くの厚さにもなっていた。それらの資料を見ながら長々の説明が終わり、「寄付されたい」との要請に対する承諾というのが、最大かつ、第一の目的であることがわかった。話が違うではないかと私は思った。市側の職員は早くその目的を終えて帰りたい思惑があるらしく、かなりの押しで説得しようと同じことを何度も繰り返し説明した。うんざりしてきた私は、幸か不幸か仕事のなかで先輩たちから得た、私なりの浅薄な法的知識を、私の言い分として話した。

二人は「ええ、まったくおっしゃるとおりで、お気持ちもよくわかります」の一点張りで、話は進展しそうにないと思った私は「遠いところお運びいただき恐縮ですが、今日はお話を伺うだけとの約束でしたし、私のほうも考えたいと思いますので」とこちらから引き揚げることにした。気の毒と思ったが「ハイ、そうですか、どうぞ」という気にはなれなかった面談であった。二人は「また、近々その件で会議が行なわれますので、今のご意見やお気持ちを伝えるようにいたします」と丁重ではあった。字限図と土地登記簿謄本のコピー。戸籍謄本の写しはもらえなかったもので、それを元につくられた簡単な「家系図」のようなものの「のコピーをもらって二人と別れた。

## 初めて入手した母のルーツ

私は話の内容もさることながら、感動をもってその資料を何回となく見た。特に家系図であった。母には「早逝した兄がひとりいた」と聞き及んでいたのに、九人もの兄弟姉妹がいたのだから。しかし、その九人もが皆、すでに亡く、何と短命の家系なのだろう……そして尻すばみの家系だろうか。九人のうち六人もが未婚らしく、当然のことに子孫の数は少ないわけだ。現在、「私」が残ったたった一人の相続人で、次の代は息子一人なのである。九人のうち母の姉にあたる「文」さんが何と昭和五十九年まで生存していたのである。母の実家とは音信不通であったため（母は私の知る限りでは「K市」に帰ったことはなかったように思う）わからなかったが、母に縁の深い人がつい最近までいたわけだ。

生存中にわかっていたら逢いたかった。それが一番心残りに思うことである。

その母の姉「文」さんは未婚だったこともなかったが、高齢であつたらうに誰が面倒を見ていたのか、ひとりシャキッと生きておられたのか。母に似ていただろうか。母は四女で「文」さんは三女。年も近い母のことをよく知っていたに違いない。子供のころはよく一緒に遊んだのではないかしらと、また、思いにふけた。少々感傷的ではあるが、自分のルーツが少しでもわかったことは嬉しい思いであつた。「江西寺」の存在さえ不確実であつたのが証明されたことも、見方をかえればこの話を持ってきた「K市」に感謝すべきだとさえ思う。

それとはうらはらに現実的な問題を抱え込んでしまうことになり、そのことについても様々な思いが浮かんでは消えた。欲にかられてはいけなさと自制心が働き、「人はものを多く所有することではほんとの心の豊かさから遠ざかってゆくのだから」と言い聞かせていたり、「今で十分幸せ、食べることに事欠かないお金は入ってくるのだし……」と。だが一方「この幸せのうえにさらに余分な財産があればいいことないじゃない。ことさら自分から望んで手に入れようとしているわけではない。巡り合わせがあるならそれを無駄に捨てることはないのよ」とささやく悪魔(?)の声が聞こえるのも私の心の中なのである。感傷的になっている自分と現実的に処理しようとして揺れ動く私の心の中を見透かしてか、夫は『「K市」にいつておいで』と。「先祖の墓に線香の一本でも立ててあげたら」と勧めてくれた。

十数分の一の血が受け継がれている息子に「母方のルーツがわかったよ」と話して聞かせてやることができるのは、母親として感慨深いものを感じている。

「K市」行きのときは母の写真と一緒に行きたいと思う。果たして母は連れていってもらいたいと天国で思っているだろうか。

そう望んでいるに違いないと近頃思う。

(え・小島佳子)

# 西欧女性三態



私の凱門大聖堂前

埼玉県新座市

法村香音子(55歳)

チャンスがあって、九月二十七日からヨーロッパに行ってきました。ドイツ統一の二日前にベルリンを訪れ、前夜祭にはボンにいてその歴史的瞬間を体験することができました。ボンの市庁舎前の広場では十一時半に第九が演奏され、若者たちによって旗が振られ、零時には盛大に花火が上がりました。その人込みにもまれながら、ドイツの人たちと歓喜の歌を口ずさみ、ビールで乾杯しました。

わいふの会員多しといえど、こんなによい経験をする事ができた人がほかにおられたでしょうか。まずは、ホットな写真をお届けします。

## ハンブルグのホット・ドッグ娘

ハンブルグの空は底抜けに晴れていた。

リュックを背負って「六か国会話」なるアンチョコ片手に、電車とバスを乗り継いでアルトナまで行き、港からてくてく歩いて教会巡りをした私は、最後にゴシック建築の素晴らしい市庁舎に辿りついた。

市庁舎前の広場はテントを張ったりポールを立てたり、ドイツ統一のお祭りの準備が進められており、観光バスから降りた外国人(ドイツにとっての)たちで賑わっていた。

紅葉を始めたプラタナスの木の下、濃い緑に塗られた可愛いスタンドには人が群れ、そこからパンの焼ける匂いやコーヒの香りが漂い流れてきた。疲れもし、おなかもちよいいた私は、どのパラソルの下に座ろうか……、と席を物色しながらその列に並んだ。

こんがり焦げたホット・ドッグとコーヒをのせたトレーが、小さな窓から出てきた。バゲットにサラダとソーセージを挟んだのが二個ものっている。(ひゃあー、こんなに！) と思いながら、さっさからずーっとそこに腰を落ち着けている、ブロンド娘のところに私は寄って行った。



ハンブルグ市庁舎 この前のテラスでドイツ娘とホット・ドッグを食べた

(ここに座っていい?)と首を傾けると、口元を少し曲げて微かに頷く。年のころ二十二、三であろうか、細おもてのやや淋し気な、とっつきにくい冷たい面だちである。膝には紙袋を抱いている。ドイツは土曜の午後と日曜は、店は休みである。(お針子かブティックの店員さんかもしれない。誰かを待っているのだろう?)と私は思った。

どこから食べようか、と食べよいところを探し、大口をあいてバクつくくと、パンの香ばしさと熱いサラダのなんとも言えない美味しさが、ばあっと口に拡がる。コーヒーも申し分なくおいしい。しかし、食べもせず飲みもせず、黙って座っている人の目の前でバクバクやるのは、なんだかひどく落着かず格好のつかないものである。チラッと目を上げて横を見た。

すると彼女が、テーブルの上の私のホット・ドッグをジーツと見詰めているではないか。

こんなに大きいのは、二つも食べられそうにないと思っていた私であったが、とても美味しいのでこれなら食べられちゃいそう、と思っていたところであった。しかし、無視するわけにはいかない雰囲気。気が彼女にあった。

「いかが?」ゼスチャーで勧めると、「いいの?」というように眉を上げ、私が出し出した。貴婦人のようにおすましして、おいしいものを与えるとはほとんど嘸まずに吞み込んでしまい、二度舌なめずりすると、すまり返っていたあの様子をである。

私は二年前に死んだゴンちゃん(犬)を思い出した。貴婦人のようにおすましして、おいしいものを与えるとはほとんど嘸まずに吞み込んでしまい、二度舌なめずりすると、すまり返っていたあの様子をである。しかし、ブロンド娘はゴンのように舌なめずりもせず、だけどゴンそっくりな

顔つきと落ち着いた態度で、まるで何事もなかったように、優雅に陽よけの下で絵になっているのであった。

私はますますゆっくり、上品に食べた。

店の人がバラソルをすばませ、プラスチックの白い椅子を片付け始めた。すると娘はツと立ち上がり、「サンキュウ・ベリマッチ」と、いやにはっきり言うのと、私を残して人込みに消えて行った。

どうせなら「ダンケ・シェーン」って言うてくれたほうがよかったし、(もつとよく噛んで食べたらかよかったのにと、私はなんだかがっかりした。そして、(こんなにおいしい物を、あげて損しちゃった)とちよびり思った。「食べる」という作業をともに楽しめなかったのが残念だった。

いまの日本の娘さんなら、欲しくても人の食べ物にあんな目つきをしないだろうし、勧められても一応は「いえ、結構です」と言ってみるだろうし、もし貰ったら、食べながら「美味しいですね」ぐらいのお世辞は言うだろうと思う。

あのすました顔つきが目に残り、あれ

はいいたい、どういう娘だったのだろうと、未だに私は首をひねっている。

### 「ツイッギー」の未来は……

ヨーロッパといわれるケルンの大聖堂を見物し、ラインのほとりを散策したあと、列車の時間の待ち合わせのため、とあるしゃれた感じの喫茶店に入った。

もう十月というのに、暑いぐらいの陽気だ。喉が渴いていたし、この旅ではどこでもそうしたように、私はその地方産のビールを注文した。

ドイツのお店も普通の家庭も、室内の配色はコーヒー色と白がおもな色合いで、明かりはおさえた暖かい色だ。そのなかでは、溢れるような花や観葉植物がいつそう落ち着いた雰囲気醸しだし、客の金髪や彫りの深い顔立ちが映えて、どっしりと大きなおばさんウエートレスの白いエブロン姿も絵になる。

おばさんがコースターにグラスを置いて、ビールをついでくれて去るのと入れ替わりに、ほっそりしたモデルのような娘さんが二人、隣の席に腰をおろした。

東西ドイツ統一の祝いに集まった人々





東西ドイツ統一に乾杯！

一人は巻き毛が黒く、トルコ系にみえる。もうひとりにはツイッギー（ミニスカート全盛時の英国のモデル）のように細く、金髪を男のように刈り上げて、大きな金

の耳輪がよく似合う娘さんだ。肌はきめが細かく白く、細い身体に黒い服がぴったりでとても上品な感じである。やがて彼女の倍はありそうなくだんのおばさんが二人にコーヒーを置いていった。「ツイッギー」がさっそくお砂糖ポットを取り上げた。斜めにする筒先からお砂糖が出てくるあれである。グラニュー糖がザーザー落ちていた。

（へえー、さすがだなあ。あんなにお砂糖を摂っても太らないなんて、うらやましいな）

見ていると、おしゃべりしながらポットは傾けたままである。話に夢中になって忘れているのだろうか、じよろじよろ、じよろじよろ、まるで水道のように白い粒が流れ落ちていくのだ。

（おっとっと、お嬢さんお嬢さん、あんた自分は何やってるのか分かってるの？）驚いていると、おばさんがチケットを置きにきた。と、ポットは手の中で起き上がり、私もほっとした。

（すごいなあ……。まるでお砂糖を飲むみたい！）

ところがおばさんが行ってしまうと、またぞろじよろじよろが始まったのである。たぶんそのとき私はボカンとしていたことだろう。大きなカップの半分は砂糖がはいっていたに違いない。コーヒーの量は、明らかにもう一つのカップのより増えていたことだろう。

ドイツの若い娘たちは、みな細く美しい。けれど中年以上の婦人は、そのままのスタイルの人は皆無と言ってよいくらいで、ウェイトレスのおばさんのように太い。

ドイツに代表される馬鈴薯、しょっぱい味付けのソーセージや料理。そしてとびっきり甘いお菓子。それに、みんなキャンディがお好きなようだ。ドイツの人たちは食生活の改善は考えないのだろうか、と思っていたところだ。

「ツイッギー」は太る心配はしないのだろうか。それとも、自分もいずればふとちよになってしまふ運命と諦め、ならば今のうちに食べたいものを食べたか飲んだりして、うんと楽しもうと思っているのだろうか。

そのほっそりした娘に、私はなんだかドイツ国民の頑なさをかいま見たような気がした。

## おばあさんのすね犬

ヨーロッパを旅してもっとも羨ましく思ったのは、犬と人が一体になっている様子であった。犬好きが多いらしく、どこに行っても犬に出会った。

犬は飼い主にびったり付き添って電車やバスに乗り、レストランのテーブルの足元に座り、マーケットの中を主人にながれて回り、公園で走り回って子供とふざけっこをしていた。向こうの犬は、ゴンちゃんのようによその犬をみても吠えもせず、紐を引っ張ってハアハア先を急ぐようなこともなく、主人の歩調に合わせてその顔をときどき見上げながら、おとなしく歩いている。大きな犬も小さな犬も、とてもお行儀よくて従順だ。

お金持ちのような人はいかにも上等な犬を連れ、ミニスカートをはいたとてつもなく足の長いモデルのような女性は、似たように足のながいブードルをつれ

て、恋人らしき若者と腕を組んで歩いていた。「仔犬をつれた貴婦人」じゃないけど、犬のいる風景は詩になり絵になる。もっとも、気をつけないところにも糞があるのはただけながい……。

ジュネーブはコルナヴァン駅の構内を歩いていたときのことであった。

魔法使いのように黒いオーバーをきて黒い帽子を被ったおばあさんが、片手に荷物を提げ右手に紐を引っ張って、つんのめるように後ろから私のわきを通り過ぎた。お尻をふりふりよたよたついていくのは、どうひいき目にみても血統がそう良さそうにはみえない、黒いダックス・フントであった。

(お、また犬だ)

その犬が突然私の足元でボタンと横倒しになったのである。心臓麻痺で倒れたのか、とびっくりした。ところがおばあさんは、「立って、立って！ 歩きなさい」と言っているらしく、犬のお尻をピシャピシャ叩き、立たせて歩かせようとするのである。だが、犬は幾度起こしてもまたごろりと寝ころがり目をつぶるの

である。まるで討ち死にでもしたような格好だ。するとおばあさんは腰を伸ばし、ずるずると犬を引きずって歩きだした。

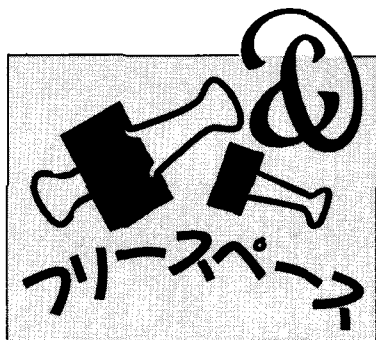
(な、なんてひどい！)

あつけにとられて見ていると、三メートルも行ったところでおばあさんは犬をひいと小脇に抱えて歩き出し、五、六歩いったところですぐに犬をおろしたのである。すると犬はまたトコトコ歩き出したのだ。どうも常習犯らしかった。その様子はまるで、子供がだっこをせがんで抱えているのとそっくりで、(ちよつとは抱いてくれたのだから、仕方ないから歩こ)というようなそぶりであった。

聞き分けのない子が恥ずかしかったのか、おばあさんは笑っている私を帽子の下から怖い顔で一瞥すると、頭をふりふりスキップするようにしながらついていく犬を連れ、エスカレーターの上に消えていった。犬とおばあさんはびったり息があっていた。

それを見送り、(やっばり、日本に帰ったら犬を飼おうかなあ)と私は思った。

(写真提供・筆者)



## ああ男たち!

東京都杉並区●西田淑子

この春、H高校卒業以来二十年ぶりの同期会が開催され、その後三回幹事会がもたれた。各クラス男女一名ずつの幹事が選ばれたが、会合が夜であったため女性の参加は少なく、常連女性二名はいずれもワーキン

グウーマン。ハクラスあったのだから、勢い男性幹事の数が多くなり、何やら男の宴にコンパニオン数名の観を呈してしまっ

た。  
H高校の男女生徒比率は三対一、それに加えて、男子の入試合格点が女子のそれを三十点ほど上回るという能力差があったため、女子のコンパニオン化は当時よりひきずっている風潮ではあった。

久しぶりの会合に、「変わらないなァ」「誰がどうした、彼がどうした」と情報がひとしきり飛び交う。そして、酒も進むほどに、記憶の糸を二十五年分手繰り寄せる。

ハイライトは何といっても東大合格回顧談。この人の人生にそれ以上いいことなかったのかなァと思うのは女の浅はかさ。進路、出世、まちまちに異なっ

てしまった現況を触れずにおこ

うというやさしい心遣い。  
男性幹事の七割が東大卒なのだから、あとの三割放ったらかし、東大合格を語って何が悪かろう——ということにしておこ

う(ちなみに慶應卒ばかりが集まっても、慶應大学合格時の話はまず出ない)。高校時代の悪さ、先生の噂話、体育祭、合唱祭、そしてかわいかった〇子ちゃんの話である。

「〇〇さん、かわいかったなァ。僕好きだったよ」

ラインの崩れ始めた目元をさらに崩し、うっとり目線を宙に漂わす。彼氏、同期会で下腹部にどっちり肉の付いた〇〇オバサンに再会したあとも、やっぱりこんな目で語っていたから、彼の記憶の中で〇〇オバサンは美女のまま凍結しているらしい。別の小学校のクラス会ではこんな話も聞いた。

当日欠席した元美女Eさんが

今も独身ということを知った男ども、酔った勢いで、彼女の自宅に、電話で呼び出しをかけたらしい。訳あって欠席したのだから、当然彼女は断わる。

諦めやらぬ男ども、ほてったほおを夜風にさらし、恥をさらし、彼女の家に押しかけた。彼らが憧れの元美女Eさんに逢えたかどうかは聞きそびれたが、とにかく彼女は頑として家から出てこなかったそう。なんだか原節子みたいな話。

いい年したオジサンが、お下げを腰まで垂らしたかわいいEさんを、それぞれ頭に思い描いて夜道を急いだのかと思うと、その純情ぶりがほほえましくもあり、またクラス会というところと真つ先に乗り込む我が身には、「女は顔だけか!」と世の不条理が腹立たしくもある。

話は幹事会の宴に戻る。女の話はまだ続いている。



「臨海学校ンときはさア、かわいい子に片端から電話して、一緒に行くって誘ったよ」

あら、私、誘われなかったワ。

「日校美女十傑というと、○田さん、×田さん……なんだ、みんな田がつくなア」

私、結婚して田がつきましたけど……。

「一組にはかわいい子が多かったなア。そういうばおまえのクラスにはかわいい子いなかったな。……いるか?……ほら、いないじゃないか」

「日校の男女比率っていったら、本当は三対一じゃないんだよ。三対〇・〇五くらいさ」

かわいくなければ女じゃないのか! 男の本音もいい加減にしてほしい。いくら私がその〇・〇五に入っているとしっかり信じているからといって、同性として悲憤に耐えない。

「ちょっとさっきから黙って聞

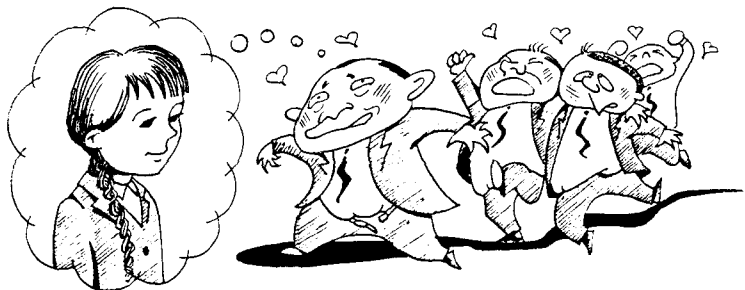
いてるとあんまりじゃない。女性の能力、性格、生き方そんなとこちつとも見てないのね。私、一緒にいて不愉快だわよ」

と叫んだけれど、ワッハッハ……と笑いの渦の中に語尾はかき消されてしまった。

公人の黒人差別発言に対する国際的非難が相ついでいる。むべなるかな。日本の男性の女性差別にその温床がある。

男女ともに美しいものに憧れる気持ちは同じだ。しかし、男の魅力が容色、能力、性格と多岐にわたっているのに対し、女の場合はほぼ容色一本やりだ。しかも、このように堂々と語られる。

なまじ勉強ができると、「頭のいい女は嫌いだ」と言う。私のアメリカのアートスクール時代と比較しても、日本男性は極端に容色一辺倒なのである。コマ切れ知識の詰め込みと、異常



に男女の世界の分かれる青少年期を過ごして、女性に対する鑑識眼が養われなかったためらし

い。

それに加えて、人為的に作られてきた男女の能力差である。劣る者は従順でかわいければいいという単細胞ぶり。小悪魔的ながいいともいうが、あればあくまで小悪魔であって、バリバリの大悪魔ではない。劣る者の存在を身近に意識することによって、強者としての男のアイデンティティを確立する貧弱な精神性。

宴の席でかわいい子ちゃん回顧談にうつつを抜かすのは、人間に対する鑑識眼と己の精神性の低さを暴露する所業、女性同席の場に於いては、マナーの悪さを示すもの以外の何ものでもない。

日校幹事会打ち上げの日より四か月後に行なわれたK中学のクラス会では、全くこの種の発言はみられなかった。入学試験のない公立中学で、男女比率は

三対一で変わらぬものの、歴然とした能力差がなかったためであらう。

「女性全員、当時より今のほうがきれいだよ」

これが唯一女性に関する話題。国際派が多かったせいかもしれない。いや、もしかすると、二十八年ぶりに私から電話を受けた男は背骨がピンと伸び、受話器を持ったまま思わず頭を下げるという、この私の絶大なる権力の未だ衰えず、といったところが真相か。

## 我が家の小さな 婦人問題

東京都品川区●宇野佳子

現在私は、パートの主婦水泳指導員です。夜の成人コース担当の日は、帰宅が九時半すぎになります。仕事の忙しい夫は、

夜中十二時前後に帰宅します。私は不安ですが、九歳、五歳、二歳の三人の子供を家に残して仕事に出ます。

保育園に子供をあずけて一年になります。子供をあずけて仕事をしようと思ったきっかけは、いわゆる企業戦士の夫に、「過労死」の不安を感じたときでした。三人の子供を育てあげる力をつけておきたいと思いました。今は、仕事と並行して、英語学校に通っています。将来、安定した職につきたいからです。

こんな小さな我が家庭の中にさえ、三つの婦人問題が含まれていると思います。

一、子育てに参加できず「過労死」をも思わせる企業戦士の夫の姿。

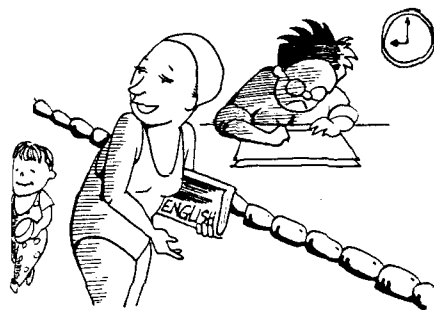
二、専任コーチを望んでも、パートにしかねない妻の姿。しかも時給が低いので、夜遅くまで働いても、英語学

校の月謝にすべて消えてしまふという現状。

三、そして、寂しく家に残されて、思うがままにテレビやビデオを見ている子供たちの姿です。

「合計特殊出生率が、戦後最低の一・五七人。半世紀ぶり『出産』への国家的取り組み」と新聞にありました。

確かに今日の日本は、高額な出産費用に始まり、住宅の狭さ、教育費の家計圧迫など、子供を育てにくい環境にあります。ま



た、苦勞して子供を育てても、その子が、自分の最後の面倒を保障してくれるわけでもありません。今のこの物価高、教育費高、そして住居難の中で、自分の楽しみや時間を犠牲にして子供を育てても、何の得にもなりません。

「子供を持つことは損」という図式が、今の世には合っているようです。

しかし、私にとって、子供は私の活動源、生きる力です。また、心のオアシスにもなっています。一日の疲れを引きずって保育園に子供を迎えに行きます。私と目があった瞬間ニコッと笑って、私の胸に駆け込んでくる子供。その子供を抱きしめる一瞬が、私の疲れを吹き飛ばしてくれるのです。

各家庭も、多かれ少なかれ、いろいろな難問や不安点をかかえながら、それぞれの営みを続

けているのでしょうか。

一、の問題は、「深夜業、労働時間など労働条件の改善と労働安全衛生の徹底」になるのでしょうか。

真の人間らしい生活とは何か、男も女も子育てに十分な時間を使える労働時間のあり方を考えます。しかし、いわゆる一流会社のエリートサラリーマンであり、会社の一つの歯車として組み込まれている夫を考えると、結局、行きつく結論は「転職」なのでしょうか。

二、の問題は、「パートタイマーの労働条件の向上」になる

のでしょうか。スイミングは、

学校や会社が終わったあとに始まるサービス業です。また、コーチは、体力や若さが必要な肉体労働です。やはりこの結論も、行きつくところは「転職」なのでしょうか。

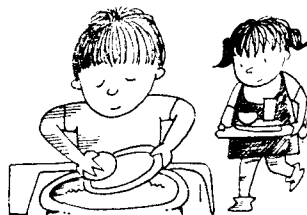
学生時代、英語を学べる環境に身を置きながら、遊び回ってしまった自分を悔やんでいます。そのしりぬぐいを、今、しているのでしょうか。今度こそ英語を習得し、安定した職につきたいと思っています。

三、の問題は、「育児・保育施策の充実」になるのでしょうか

か。延長保育や学童の問題と関係してきます。

でも、私はこの留守番に、三人の協力と自立を期待しています。子供は、日々着実に成長していくことを実感しています。

一年前は、テーブルの上は食べあともで、部屋はおもちゃで散らかり、テレビやビデオを見て



いる時間も長かった子供たちが、今は、協力しておふとんを敷き、入浴し、絵本を読みながら待っているという日があります。

まだまだ時間はかかると思いますが、三人で力をあわせて、事を処していく子供たちになっ

て欲しいと思っています。これに私たち両親の老いが加わったとき、私はまた、新たな婦人問題に直面するのでしょうか。保育園に子供たちをあずけ働き始めて丸一年。ようやく婦人問題を、我が身のこととして感じているこのごろです。

(え・西田淑子)



## もしもの時の経済的バックボーン 積立所得補償保険

ケガや病気で  
働けなくなったら  
あなたに所得を  
お届けします

入院はもちろん自宅療養もカバーします。  
最長なんと2年間。合計730日まで補償します。  
保険期間中、何回でも、同じケガ、病気で  
もお支払いします。  
満期時には満期返れ金の楽しみがあります。  
加入時の医師の診査は不要です。

例：35歳男性  
同等補償金額 30万円  
契約返れ金 100万円  
保険期間 5年  
保険料 月払いなら 1002200円  
月払いなら 20400円

かけすての所得補償保険もあります

わいふ指定代理店

東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子

☎03-260-4771

# 泥棒体験記

K・T

## デパート売場の舞台裏

十年以上も前のことになるが、某デパートの婦人服売り場で働いたことがある。パートの社員で仕事は週三日、時間は朝十時の開店から夕方六時の閉店まで八時間労働であった。

働いてみて分かったことだが、買い方にもいろんな方法があるのだ。現金をはじめ、クレジットカード、外商扱い、商品券、デパート発行のカード、代金引き替え発送、社員割引と、そのつど処理の仕方がちがう。時にはレジに座ったり両替に行かされることもあり、サイズの合わない服を売るときは寸法直しの採寸までしなければならなかった。

お客も様々で、商品の欠陥を見つけて強引に値引きを迫る人や、一週間以上も経って返品に来る人もいて、慣れないうちはオロオロしたものである。

じっと立ってお客を待つというのも単調で意外に疲れるものである。無条件に頭を下げねばならないのも初めての経験だった。しかもパートというのは日陰ものの身で、バーゲン用の安物の服ばかり売らされた。しかし、二〜三割引きで買える物ができるのは魅力的だったし、何よりも私がまったく知らなかった舞台裏を見てしまったのは大きな驚きだった。

大勢の社員にもピンからキリまである。中でも、キリのほうの行動は凄まじかった。大胆な盗みをやるのである。パート社員

の先輩格のHさんからそれを聞いたとき、私は本当にたまげてしまった。デパート側はこのようなことを防ぐため、退社時の荷物検査、保安係の店内見回りなどを行なっているが、何千人もの従業員を徹底的にチェックするなんてことは、絶対不可能なのである。特に、バーゲン商品は売り上げと在庫を照合したりはせず、売り尽くしセールするときなどレジにも打たず、手持ち金庫を傍に置いて売りまくる。

パート歴八年、五十五歳のKさんを中心とした盗みは、悪いことではあるが、見事なチームプレーであった。

Kさんはボスの存在で、主任も一目置いていた。このKさんが、手持ち金庫から、一万円札数枚をポケットに入れるところを、

若い社員が見てしまった。Kさんは慌てず口止め料として、さっと二万円をその子のポケットに入れたという。それでも黒い噂は広がっていった。おもしろいのは、若い社員たちが競ってKさんとのコンビを望んだことである。密告などして恨みをかうより、黙ってお余りにあずかるほうが賢いと踏んだのだろうか。

私達は勤務時間内に買い物をしたとき、商品持ち出し届け表に、買った品物と値段を書き、主任に見せて検印をもらい、さらにデパートを出るとき、その持ち出し表を出口で保安係に渡すという手続きをして、ようやく外に出られるのである。この厚い防壁の壁をKさんはどうやってぐり抜けるのだろうか。

「簡単なことよ。主任を抱き込んでいんだもん」とHさんが言った。ベテランのKさんには、品物を確かめず、黙って検印を押すらしい。

## 集団詐欺に巻き込まれ

そうこうしているうちに冬物一掃処分時期がやってきた。Kさんの行為を知って

いたものの、私には関係のないことであり、かわりたくないことであった。ところが、自他ともに認める真面目人間の私が、ふとしたことから集団詐欺に巻き込まれることになってしまったのである。

その日、売り場では思い切った値下げをやった。私が、欲しいなあと思っていたニットのワンピースが一万七千八百円から七千八百円になっていた。デパート側の方針はあくまでもお客様本位で、私達は売れ残ったものを買うべきなのだが、そうは言っても、お客の欲しいものは私達だって欲しいのだ。

Kさんと私を含めて六人いたその売り場

の店員は、全員そのワンピースを買うことにした。私達は欲しい品を取り置き、暇になるのを待って買う。勤務中のことなので、トラブルを防ぐため、必ず人に頼んでレジに打ってもらう。

まず私がKさんに自分のお金一万円と品物を渡した。ふつうバーゲン商品は紙の手提げ袋に放りこむだけなのに、彼女は小型の紙袋にぎゅうぎゅう詰め込み、がんじがためにセロテープで閉じた。なんでこんな手間なことをするのだろうかと思っていたら、袋をかかえてレジに行った彼女は「三千八百円」と大きな声で言った。

はっ、とした私の袖と一緒にいた若い子





が引っ張った。私はこのとき初めて、自分が犯罪に巻き込まれていることを知ったのである。

平然と戻ってきた彼女は「お待たせいたしました。一万円お預かりしましたので、六千二百円お返しいたします」と言って、ニタツと笑った。

「今日は、さん・ばー(三千八百円)でいいのね!」と、目を光らせた若い子にKさんは黙って頷いた。茫然とする私をよそに、彼女らは次々と三千八百円の買い物をした。まったく見事なチームプレーであった。私は頭にまで、ドクドクと脈の打っているのを感じた。いつもは、途方もなく長く感じられる昼休みまでの時間が、この日はあっという間に過ぎてしまった。

**どうしよう、泥棒になる……**

休憩で一人になったとき、私はどうしたものかと考えた。まず正直に申し出る。当然、私も犯罪者の一人だから、なんらかの処分の対象になる。しかもこの日の六人以外にも、芋蔓式に何人もが処分されるだろう。考えてみれば鹹になって当然の行為で

ある。全員誠にしたら、店員は半分くらいに減ってしまいそうな気がした。課長や部長の当惑した顔が頭に浮かび、思わず苦笑した。

あのときどうして止めなかったのだろうか。はっとしたあの瞬間、止められないことはなかったのに、隣にいた若い子の制止で、私は口をつぐんでしまった。

たとえ偶然巻き込まれたとはいえ、こんな不名誉なことをやっておきながら、不名誉な辞め方はしたくなかった。考えてみれば私も咬い人間である。頭の中には自分の身を守ることしかなかった。

そもそも、この仕事に就いたのは、どうしてもまとまったお金が入用だったからである。会社のためにしっかりと働くなど

いう気は、最初からさらさらなく、自分がきちんと働いて、お金さえ貰えたらそれでよかったのである。このとき、まだ三分の二しか貯まっておらず、予定の額を手に入れるには、あと四か月働かねばならなかった。

黙ってしよう。私が正直に言ったところで、自分の正義感に自己満足するだけで、誰の得にもならないではないか。やった社員はもちろん、主任も処分されるかもしれないし、係長も課長も部長も、始末書を書かされることだろう。始末書で済めばよいが、減給や降格処分になるかもしれない。

これでは、職場の混乱を招くだけである。もちろん自分の行為を正当化しようと思っただけではないが、あのときの私は、自分

を納得させようと必死だった。今振り返ると、自分のエゴイズムと職業意識のなさに愕然とする思いである。

よし、深く(?)泥棒になろうと覚悟を決め、大急ぎで菓子パン一つを食べて牛乳を飲み、職場へ戻った。

昼食も喉を通らず、あれこれ思い悩む私をよそに、若い女の子達のドライなものには驚いた。Kさんは何食わぬ顔で平然と、彼女たちは、ほんの少し得したことであうきうきと、午後の仕事にいそしんでいた。

## 保安係よ、お前もか

泥棒になろうと腹を決めたものの、私は落ち着かなかった。やはりどうしても黙っておれなくて、先輩の日に正直に打ち

# からだといぬちと 食べもの

鳥山敏子著



「いのちあるもの」の音が届く感性をからだに取り戻すために、算数も国語も理科も超えて授業は全方位の展開。大人の小さな宇宙を超えよ、と鳥山さんは子どもたちの可能性に秘かな願いを託す。

定価1648円 本体1600円 〒2600円

地球を汚さない

## 100の洗い方と

自家製

石けん

発売中

「自然食通信」編集部編

定価515円(本体500円+〒210円)

もう「ビカビカ病」からさよならしませんか。残り油や米ぬかなどを活用しての思い思いの石けん手づくりと、その石けんだって「使いすぎない」を合言葉に、昔からの洗い方マニュアルにもとどし登場してもらいます。付録に全国の小さな石けん工場をリストアップ。

続刊「冷蔵庫要らずの食べもの保存/自分で作る常備菜・化粧品/リサイクルで宝探し/便所・生ゴミの工夫/他

東京都文京区本郷2-6-10

☎03(816)3857 振替・東京5-78026

自然食通信社



明けた。

「いつものことよ。みんなやってるんだから、余計なこと言ったらダメよ」と彼女は笑った。

「でも帰るとき、挙動不審で保安係に呼び止められたらどうするのよ」

「大丈夫、あの保安のおじさんも、随分安い買い物したことあるから」

「ええっ！」と叫んで私は絶句してしまっただ。保安のおじさんというのは元刑事で、警察を退職後、このデパートの保安係をやっている。そういう目で見えるからか、よくテレビドラマに登場する目つきの悪い刑事そ

のもので、最初はいやな感じがしたものだ。しかし慣れると気さくないいい人で、時々奥さんの服を買っていくことがあった。

どういふいきさつでかは知らないけれど、保安のおじさんまで安い買い物をしたらしいと聞いて、私のなかに渦巻いていた罪の意識は薄れていった。

噂なので真偽のほどは分からないが、Kさんの不正に對し見て見ぬふりをしたのかもしれない。その見返りとしてKさんは安く服を売ったのだろうか。

「あなたがそんなことできない人だってごと、誰だって知ってるわよ」と彼女は私の肩をたたいた。私はこのことばを待っていたのかも知れない。悪いことをしていないが、本当は私は悪くはないのだと自分でも納得し、人にも認めてほしかったのである。

この日は本当にあつという間に過ぎてしまった。私は何食わぬ顔で主任の検印をもらい、「保安係よ、お前もか!」と心で思いながら、保安係にその商品持ち出し表を渡して外へ出た。

外へ出ると、思わずほっとした。と、同時に、もうこんな思いはまっぴらだと思っ

た。Kさんはここで嬉しくなって、病みつきになってしまったのだろう。泥棒をする人も、最初は案外こういった些細なことがきっかけとなっているのかも知れない。

しかしもう二度と勤務中に買い物はすまいと思った。欲しかった服なのに、私にはどうしてもその服を着ることができなかった。結局試着すらせず、三千八百円で近所の人に売ってしまった。あんなことがなければ、喜んで着たであろうに……。

その出来事以降、私は保安のおじさんに妙に親しみを感ずるようになった。不正にどっぷりつかって仕事をしなければならぬ自分も情けないが、それを摘発しなければならぬおじさんの仕事もいやな仕事であつただろう。

それから私は二か月働いて、デパートを辞めた。パート社員なのに、予想していなかったボーナスが貰え、ほぼ目的が達成できたからである。

あの時のことを思い出すと、時効になつた今も、勇気のなかった自分を残念に思う。

(え・田井亮子)



# 読・ん・で・み・ま・し・た

イラスト読本

## からだの歴史

ヒトはどのようにしてヒトになったか

黒田弘行 著

東京都八王子市

和田 好子

ヒトのからだに脊椎動物五億年の歴史を視る。おもしろくて刺激的な理科の授業である。

大学で理系に進まない限り、生物も物理も化学も、試験が終わればハイ、ソレマデよという人が多いと思うが、自然科学とはじつはこんなに興味深いものなのだ、目が覚めるような本。

地球規模での自然破壊が問題になっているが、ほかならぬ我々人間のしわざであって、環境ばかりでなく自分自身の体も破壊しつつある。

手は頭の一部である。手でものを作るには、まず頭で何をつくるか、どうやってつくるかを考えないと作れない。頭はまた、つくり方を本や他の人とのコミュ

ニケーションから、仕入れてこないと手を動かせない。ところが手で作る機会の少ない現代の生活である。頭は退化するおそれがないか？ 多くの子供たちの学習意欲の少なさは、受験競争ばかりが原因ではないと思われる。

やわらかい食物が多くなりすぎ、あごの発達が悪いと「表情筋」という筋肉も発達しない。噛む必要の少ない生活は、顔の表情を乏しくし、社会的動物である人間に非常に大切な、相互の感情交換を乏しくする。このごろの無表情な若者はこうして生まれたのではないか？

「大臀筋」、おしりの筋肉は、二足歩行をする人間だけが発達している。歩いたり走ったりして鍛えないと、発達が悪く

なり歩けなくなってくる。スマートで貧弱なおしりの今の子供たちは、疲れやすくぐたぐたし、姿勢もよくない。おしりを強くする労働も遊びもないからだ。

現代生活は便利と安易を追い求め、人間の体をしだいに破壊しつつある。

自然が破壊されれば人間も破壊される。人間は自然の一部だからだ。

著者は自然破壊を止めるには、人間も自然の一部だという認識が必要、という立場から、五億年の人の体の発達をおもしろく詳しく解説する。小学校の先生として、自然科学教育を多年実践してきた中から生まれた本である。

親と子がこんな本を中心に、活発な議論を交わすのはすばらしい家庭教育だろう。

農山漁村文化協会 一五〇〇円



## 精神医療

文／長野英子  
イラスト／一の門ヨーコ

東京都中野区 鈴木由美子

名古屋で元大臣が精神病患者に刺され重傷を負ったとき、私たちは何を考えただろうか。そんな連中を野放しにせず、閉じこめておくべきだ——もしそう思うならこの絵解き入門書を手にしてほしい。

文章を担当した長野英子氏は、精神科に入院した経験のある三十代半ばの女性。今も通院しながら編集者、ライターとして働き、二人の子供を育てている。その生活ぶりは、慢性の気管支炎や胃炎をなだめながら働く場合と変わらない。

「精神病」も他の病気と同じ一つの病気であるに過ぎないのですが、私たちに病入に与えられる同情さえ与えられません。その代り私たちに与えられるのは嫌悪・敵意・憎悪です」と彼女は書く。

精神病患者が他人に危害を加える率は非常に低いのに、「事件」が起きると、精神病患者の野放しが一般人の生活をおび

やかすというキャンペーンがくり返される。それに乗せられた世間の人々は「事件を起こした人に適切な医療が与えられていなかったのはなぜか」を考えるのではなく、「ああいう奴らは全員監禁せよ」と叫ぶヒステリーに巻きこまれていく。

日本の精神医療は、欧米の前世紀なみ。先進国では例外的にしか使われない施設付閉鎖病室が三分の二を占め、強制入院させられる人の割合はヨーロッパの百倍。入院期間も異様なほど長期にわたる。

精神病院の職員数は少なくともいいという特例があるため、カギと体罰に頼って多数の患者を家畜のように管理する例が多く、一人一人の診察・治療はおざりにされている。また医師自身がオーナーである私立病院が多いことから、患者を社会に復帰させるよりも、長く置いて公的な医療費を確保することになりがち。

家庭や社会で厄介者扱いされた人を一生閉じこめておく場所になっている。

人権問題として国際的な批判を受け、八七年に新しい精神保健法が成立したが、それは、厚生省の精神保健課長が「入口を広く出口を狭くした」と述べたような内容であった。悪徳病院に一度入ってしまえば、本人や家族の意志がどうあれ、退院・転院はきわめて難しい。

学校嫌いの子も、夫の女性関係でノイローゼ気味の妻も「広い入口」から鉄格子の中に直送されていく。私たちと無関係な問題だといえるだろうか。一の門ヨーコ氏のユーモアあふれるイラストが、読者を核心に連れていってくれる一冊。

現代書館 九七九円





# オーロラと白夜の国

連載4

## ノルウェー生活事情

東京都府中市

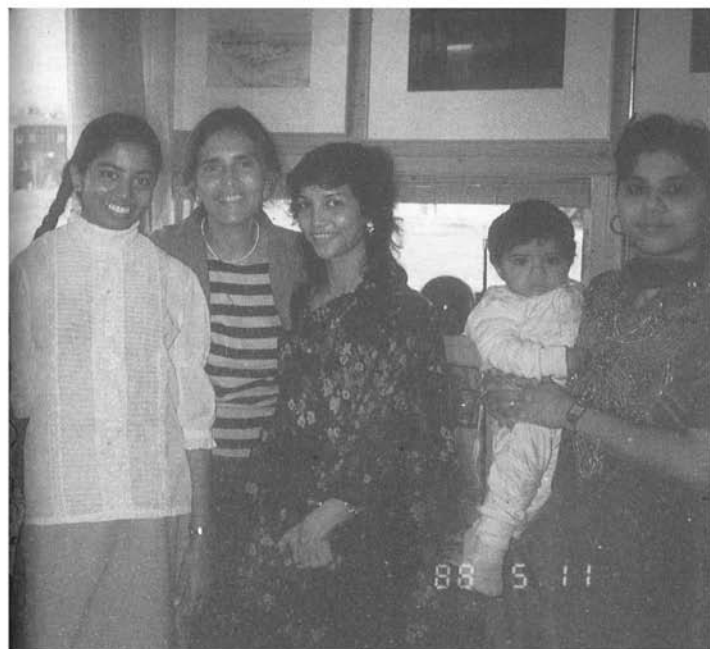
中田 慶子

### 自由？不自由？

女性が自由を得て強いことは、女性にとっては嬉しいことだが、男性にとってはそれまで無条件に享受してきた居心地の良さを失うことになるのだから、不自由と言えないこともない。しかしものは考えようで、女性はこれまでの依存的な楽な生活から、否応なく自立した生活を迫られるのだから、しんどいことかもしれない。男性のほうも、男らしくというプレッシャーから逃れて自由になったとも考えられる。

日本の生活をそのままノルウェーでしようとする、不自由と思うことがたくさんあるだろう。私は、それまでの日本での生活が特殊（？）だったのかどうか、たいして不自由と感ずることは少なかったのだが。

まず、前にも話したお酒、高い上にお店の少な



スチューデントタウンの仲間たち



いこと、大変である。しかも、他のすべての商店同様、土曜日は半ドン、日曜は休み。町じゅうのすべての店が閉じた静かな日曜日、美しく飾り付けられた店を、外からのんびりとウインドーショッピングして歩くお年寄りたちが多く見られたものだった。週末に買い物をした後、日曜日の冷蔵庫がカラッポということも起こる。普段の日だって商店は五時に閉まってしまいうから、日本人観光客が五時すぎに、お土産品店の前でボーゼンとたたずむという光景も見られる。ある大学教授は「そんなバカな」となんども商店のドアを押して絶句していたという。

タバコ、これも一箱六百円以上。おまけに、一九八八年七月一日をもって、公共の場所はすべて禁煙となって、屋外とレストランやホテルのごく一部の喫煙席を除いて、自由にタバコを吸えるの

は自宅のみとなってしまった。その自宅も追い出されて、道路でわびしげに煙をはきだしている人も多いのである。愛煙家にはまことに不自由な国である。

日本中、駅から道路まで自動販売機がないところは少ない。喉が渴けば、ビールだろうがジュースだろうが、ただちに手に入る。これもノルウェーにはない。職場にコーヒーマシンの自動販売機（紙コップ使用）があるくらいである。「缶」の容器が禁止されているから、缶ビール、缶ジュースがどこにもない。すべてガラスビンである。これも不自由と感じる人がいるだろう。

ビンはすべてスーパードラッグなどに自動の回収機があつて、ビンを入れると一本につき二十円のレシートが打ち出されて出てくる。これをレジでお金に換えてもらえる。これは、子供たちの格好のお小遣い稼ぎで、学校帰りにビンを拾い集めて、チョコレートやガムに換えている子供たちが多かった。食料品の配達などない国だから、重たいビールビンを買って帰るのは面倒だったが、ビンを返しにゆくのは子供たちが喜んでやってくれた。

遊ぶところが少ないのも不自由の一つだろうか。テニスコート、ゴルフ場はめったにない。あつたとしてもプレイしているのは外国人が多い。ラケット

トを持って歩いているノルウェー人など見たことがない。ノルウェー人の遊びは、夏は山歩き、冬はスキーである。お金もかからず健康的である。長い冬が耐えがたく退屈と聞かされて、私たちは麻雀や百人一首などダンボール一箱ぶんのゲームを持参したのだが、ふた冬滞在しても、その箱を開けることはとうとうなかった。冬の暗い日々も、それなりにのんびり楽しめるものである。

喫茶店が少ない、レストランが少なくて高い。飲み屋がとも少ない。これは人件費の高さに由来するのだろう。セルフサービスのカフェがいくつかあったが、ケーキの種類もわずか、日本で見るとような美しいケーキにはついにお目にかかれなかった。結局、友だちとしゃべるのは自宅で、となる。夕食後、お茶と手製の簡単なケーキとでえんえんとおしゃべりを楽しむ。大の男がたくさん集まっても、一滴のお酒も出ず、深夜まで話に興じることもたびたびで、夫ははじめ期待外れでがっかりしたようだ。

もちろん、飲んべえもいるにはいるのだが、若い人の中には酒を飲まない、肉を食べないなどという人も結構いて、手製のケーキを自慢してお茶で夜を更かす男性がたくさんいるのも事実である。酒が出て、人に注いだり勧めたりしない。ある

遊の11歳のパーティは仮装パーティ





七海8歳のバースデーパーティ

持ち寄りのパーティでは、部屋の隅にコーラやビールを置いて、好きな人だけがお金を置いて飲むようになっていて驚いた。個人主義もここまで徹底すれば小気味よい。

郵便局は手紙類の配達はしてくれるが、郵便受けに入らない大きなものは一切配達しない。宅急便、小包などなんでも配達してもらえる国と比べれば、不自由なことである。郵便受けに入った通知書を持って最寄りの郵便局に取りに行く。実家の母の心尽くしの十キロの小包をかかえて、ふうふ言いながら帰る。それでも冬は雪が積もるのでそれをひいて郵便局へ行き、サンタクロース気分になったものだった。

スーパーへ行くと、買い物用のポリ袋は有料（十円）である。学生街の住人は皆節約して質素に暮らしているから、古い袋を持ってきて何度でも使う。私たちも同じである。全体に、プラスチックの物は高い。ラップ、ポリ袋は日本の感覚からすると二倍以上する。気軽に使い捨てにできる価格ではない。ビニールひももなくて、荷造り用には紙ひもしかなかった。ヨーロッパでも有数の石油産出国とはとても思えない。

同じく、林業国なのに、ノートなど紙製品がやたら高い。トイレトペーパーはすべて再生紙で

できていて、黒っぽい。パーキンパルプ一〇〇パーセントの物（クリネックスのようなもの）はとても高く、使えない。普通の家庭でもほとんど使っていないかったようだ。スーパリーにならんでいる野菜、果物はパックされている物はほとんどない。バナナを買うなら、自分で必要な分だけ、備え付けのポリ袋に入れ、そばの秤にかけてバナナのポタンを押すと、自動的に重さと値段を計算してレシートが出てくるので、それを袋に張り付けてレジへ持ってゆく。バックもせず、ラベルもはらず、人手不足解消と省資源の一石二鳥の方法である。肉などは紙のトレーにはいつて、ラップしてある。魚も切ってもらうと紙に包んでくれるだけである。スーパリーへ行っても「燃えないごみ」を山と買わずに済むのは有り難い。

これだけ、缶もプラスチックも使用量が抑えられているのに、友人の女性は、

「今にノルウェー中がごみの山になるわ」

と嘆いていた。日本に連れてきて、スーパリーで買物を作せたらどんな顔をするだろうか。

## 福祉国家の医療

不自由の最たるものは医者である。地域毎に医療センターがあるのだが、すべて予約制。目が充

血したので予約したら、四日後と言われ、待っている間に治ってしまった。少々の風邪くらいでは誰も病院に行かないのがよく分かる。しかし、予約制なので時間きっちりに行けば、ゆっくり丁寧にみてくれる。救急医療はどうなっているのだろうか。と思ったが、緊急のときはレーゲバクトという二十四時間体制の、医者が乗った救急車が来てくれるシステムがある。混んでいるときでも一時間以内で来るそうである。

地域の医療センターは土、日だけでなく春の復活祭一週間、夏休み二か月間、ふつうの人が休暇をとるように、見事に休みになってしまう。あいっているのは総合病院だけである。休みの間は病気になるれない、まったく不自由なことである。

土曜日に娘の遊が骨折したことがあった。地域の総合病院の緊急窓口へタクシーを飛ばした。受付で名前と住所を言うだけで、コンピュータが遊の登録番号を打ち出し、手続終了。保険証などはなくても全国どこでも登録済みらしい。レントゲンをとり治療を終えて、帰りにコンピュータが打ち出した、郵便振込用紙をもらって後日送金すればよい。支払い窓口で待つ必要はない。遊の場合はギブスの実費のみ、千七百円ほど支払ったが、内科であれば初診料千円以外は要らない。出産し



でもすべて無料だけでなく、出産祝い金七万円がもらえる。薬代は自己負担だが、年間二万円以上は国が負担する。さすがに高度な福祉国家だけのことはある。

私も突然の夜中の腹痛で総合病院へ駆け込んだことがあった。友人が車をとばして送ってくれたが、「飲酒運転は三か月の禁固刑」という厳しい法律にもかかわらず、彼は生まれて初めて飲酒運転をし（くつろいで一杯やったあとだったのだ）、赤信号無視までして病院へ連れて行ってくれた。原因不明でそのまま入院ということになり、夫も引き揚げてしまつて心細い一夜を過ごした。

しかし、見知らぬ土地での恐怖の一夜ではあつても、やさしく声をかけて定期的に回ってくれる看護婦さん、親切な医師のていねいな応対を感じ、どこか安心してお世話になったのだった。結局、原因不明で翌日には無事退院し、ほつとしたのだが。

このとき、印象に残ったことが一つある。ベッドでうんうん言いながら寝ている私のところに、初めて医者が現われたときである。医者が黙って手を差し出すので、いったい何だろうと、しばし考えた。が、なんのことはない、医者は握手をしようとしたのである。初対面ではすべて、握手と

自己紹介が必要、というここでの生活の原則は、病院のなかでも当然あるわけで、病人になったとたん、日本的病人になつてしまっている自分がかしかった。日本の病院で自己紹介の挨拶を腰をかめてする医者がいるだろうか。私は痛みをこらえて握手の手を差し出した。

「私はケイコです」と。



## 日本語教師になった私

モシユモール・ウンデルビーセニング。

「母国語による教育」である。ノルウェーでの最も強烈な体験がこの母国語教育との出会いであった。

ベルグスコレへ娘たちが通い出して二、三日たったころ、マルギット校長が言った。

「遊と七海は日本語の授業も受けられます。時間割を考えましょう」

「????」

これは私の聞き間違いなのだろうか。この町では日本人の小学生はうちの娘たちだけだし、日本語の授業と言っても教える先生などいるの？ 英語力に極度の不安をおぼえつつ、翌日学校へ行った私に、校長先生は再び言った。

「この町には日本語の教師がいません。あなたが母国語教師としておたくの子供たちを教えたいかがでしょうか。週四時間。教室も使ってください。もちろん、報酬は市から支払われます。さっそく警察で労働許可証の申請をして下さい」

校長先生の説明によれば、驚いたことに、ノルウェーに住む十四歳以下のすべての外国人の子供たちは、週に最低四時間は、それぞれの母国語で

授業を受ける権利を保障されているのである。

「子供たちにとって母国語は大変重要なのですよ。もし、あなたがノルウェーに十年住んだとしても、ものを考えるときはやっぱり日本語で考えるでしょう。子供の知的発達には、充分な母国語の基礎が欠かせません！」

「現在は、特に、難民や亡命者の子供たちにとって母国語による教育が重要な問題となっています。彼らは、選んでこの国に來たわけではないのですよ。国を出なければ殺される、生きてゆけない、だから母国を離れているのですから」

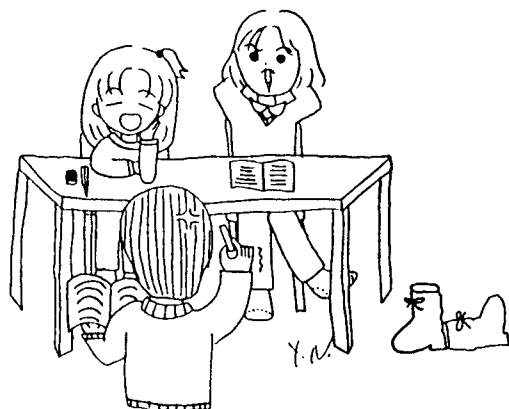
「……」

私はとっさに、日本の北方民族であるアイヌの人々のこと、戦前の朝鮮半島での日本語強制の歴史、そして現在の日本におけるインドシナ難民のことを考えた。なるほど、これが北欧の人権思想なのか、これは大変なものだとしばらくは声も出なかった。

こうしてある日突然に、私は子供たちの母国語教師となり、週に何度か学校へ通うことになった。「職員室も出入り自由です。コピー機なども必要ならお使い下さい」

小さな教室を貸してくれて、鍵も渡された。

しかし、親子の授業はやりにくいもので、とてもなごやかな授業とはいかない。



「えーっ、なんでこんな漢字が書けないの?」  
「だって、わかんないよ(ブスッ)」  
「もーっ、日本に帰ってからどうするのよ!」

なんとか楽しい授業をと、月に一度、日本の友達や祖父母あてに新聞を作って送ることを目標にし、どうにか作文や漢字の勉強を続けた。それでも、この時間が与えられたことはやはり有り難かった。友達と遊ぶのに忙しい子供たちに、家で日本語の勉強時間を作るのは難しい。ほうっておけばしだいにノルウェー語に浸食される娘たちの頭脳——特に、一年生だった次女の七海の言葉は、語順もノルウェー語的になるし、新しい言葉はノルウェー語のほうが先に頭にはいつてしまう始末だったから。

一年後、学校局からの依頼で、私はさらに二つの学校で母国語教師をすることになった。日本から来た中学三年生の女の子が一人。もう一人は、ノルウェー人の母と日本人の父の間に生まれた小学三年の男の子である。男の子のほうは母子家庭だったので日本語の勉強は全く初めてだった。そんなわけで、私は計三つの小、中学校へ出入りすることとなったのである。

## 母国語教育とは

どこのお役所へいっても、女性の管理職が多いのにはいつも驚かされるが、ここスコールコントール(学校局)も例外ではない。あたたかみのある、



グンボル・シュニッテルさん

赤を基調としたデザインの洒落た建物が学校局で、子供のほほえましい作品がそこに飾ってあり、役所的な威圧感がまったくない。受付で待っている私の横を、電動の車椅子に乗った職員がすいーっと通り過ぎていった。

母国語教育についても少し詳しく知りたいという私の希望で、マルギット校長は友人でもある学校局の担当者を紹介して下さった。グンボルさんは、この複雑な仕事を精力的にこなしている、銀髪に赤いブラウスがよく似合う素敵な女性である。

「この人口十五万人のトロンハイムでは、今、二十五か国の言語の母国語教師がいて、二七一人の子供たちが授業を受けています。英語圏の子供を別として、一番多いのはベトナム人の子供たちです。次に多いのはポーランドやチリの子供たちでしょう」

これらの国々の名前を聞いただけで、この子供たちが、戦争や内乱の犠牲となって、この北の国に逃れてきた難民、亡命者の子供たちであることを思い、胸が痛む。

「母国語教育は、第二次世界大戦後に、スカンジナビア北方のトナカイ遊牧民サーメの人々の文化や言語を守るために始められたのです（ノルウェーではラップ人という言葉は差別的表現とされ使われない）。サーメの人口はノルウェーで約二万人、昔ながらの遊牧生活のほかに、今では、林業、漁業で定住生活をしている人達も多いのです。この三十年間に彼らはサーメ語の教科書を作り、放送局を作り、議会まで持つようになったのです」

聞きながら、私は日本で正しいアイヌ語を話せる人がわずか二十数人にすぎないという最近の新聞記事を思い出していた。グンボルさんの話は続く。

「しかし、最近、北欧には難民や移民、亡命者が

たくさん人ってくるようになり、おとなりのスウェーデンで母国語の教育の重要性の研究が始まり、ノルウェーでも一九八〇年に、すべての子供に対して母国語での教育を保障するように、法律ができたんです」

「人が外国に住むとき、母国語は精神的な安定のためにとても大切なことです。自分の感情を表わすためにも、またアイデンティティの確立のためにも母国語は重要です。それに、外国で育った子供と親が同じ言葉で話せない、親子関係に深刻な問題が起こるでしょう」

母国語教育の目標は、外国に住む子供が、母国語を十分にマスターした上で、その国の言葉も理解して、その国で立派に生きてゆく力をつけることにある。母国語がしっかり身につけていないと、学力や抽象的な思考能力の発達が停滞するという研究結果があるという。

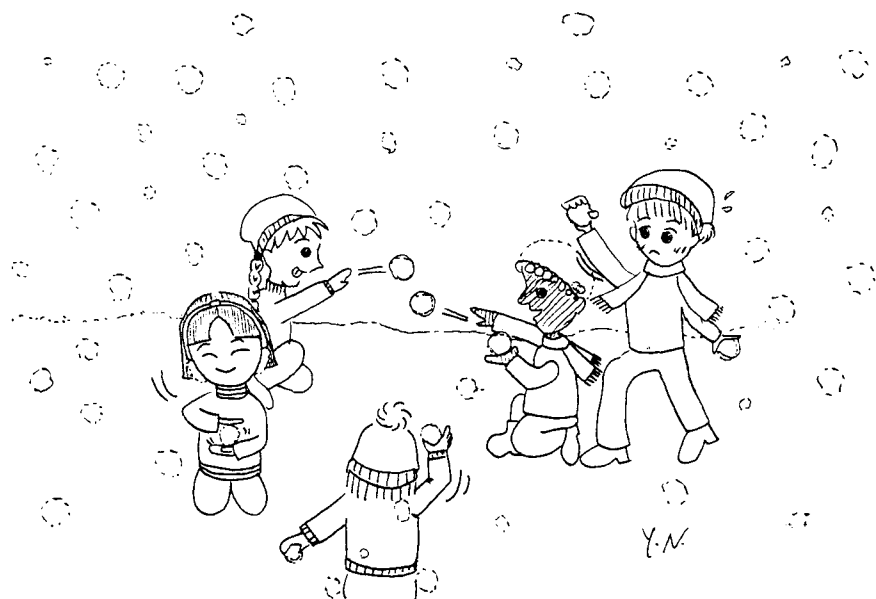
母国語教育は、ちょっと想像しただけでも、莫大な時間と、費用をかけた事業である。しかし、さまざまな民族が、さまざまな文化を伴って、この国に住み着くことは、長い目で見れば、新しいアイデア、活力をもたらすことになり、国の発展に大きく貢献するという認識がそこに流れている。言い換えれば、外国人の教育に失敗した場合の国

家の損失が如何に大きいかということである。

北極探險で有名なノルウェー人のナンセンは、第一次大戦のときから、後半生を難民救済のために尽くし、難民パスポートを発案した。以来、このパスポートで救われた難民は世界中で何百万人になるだろうか。その伝統が今も生きているからこそ、人口わずか四百万のノルウェーにインドシナ難民だけでも一万六千人が定住している（日本で定住している難民は六千人）。ほかに、パキスタン、スリランカ、イラン、チリなど世界のあちこちで戦争や内乱がおこるたびに、国を追われた人々がこの北の果てまで流れてくる。

「つい最近も、難民キャンプから、七人の子供を含む家族がやってきました。その中には、生まれてから一度もキャンプの外にでたことのない子供もいたのです。でも、その子は今、ノルウェーの子供と同じ権利を持っています。学校教育も受けられるし、大学へゆくかも知れません。そうならだんなによいでしょう。もちろん、問題はたくさんありますけどね」

グンボルさんに別れを告げて帰る道々、空を見上げると、どこまでも高く澄みきった青さが目にしみた。



## さまざまな教師たち

雪の降りしきる校庭に、にぎやかな子供たちの喚声があがっている。さまざまな髪の色、肌の色、言葉が入り乱れて雪合戦をしている。

大雪の日、地図を頼りにイーラスコーレをたずねた私は、アジア人らしい子供たちの人なつこいままなざしに、どう言葉をかけてよいものか戸惑いつつ、古い大きな扉を押して校舎の中に入った。ここ、イーラスコーレは国際学級をもつ公立の小学校で、児童の半数は外国人とのことである。一九八八年二月、トロンハイムでも初めての母国語教師のミーティングが開かれるのに、まことにふさわしい会場である。

会場の教室にはすでに三十人近い人々が集まっていた。アジア人のグループが私を見つけて早口のベトナム語で声をかけてきた。なぜか私はいつもベトナム人と間違われる。ノルウェー語で、「いや、日本人だ」と答えると、ありありと相手の顔に失望が見えた。気まずい沈黙がつかう。そのとき、「ケイコ、こっちへ来たら」と、私と同じベルグスコーレで英語の母国語教師をしているリディアが手招きしてくれて、救われるようにそちらへ行って座る。

討議の早口のノルウェー語が私にはさっぱり理解できず、リディアがざっと英語で説明してくれた。それによると、母国語教師の組合を作るので、その代表を選ぶことと、近々、母国語教師たちのために、教員養成大学で特別のコースが開かれるということ話を話し合っているのだった。

活発な議論が飛び交っている間、私は周りの一人一人の顔を眺めていた。私の前にはアラブ人、隣はフランス人、その向こうはバングラデシュから来たベンガル語の教師、イタリア人、チリなど南米の各国の人々はスペイン語の教師たち、スリランカからはタミル語の教師、ポーランド人、トルコ人、中国人、多数のベトナム人——。髪の色、目の色、肌の色、服装、持っている雰囲気まで、ほんとに違う。壮観である。

自己紹介のときに数えると、この日に出席してただけでも十四種類の言語の教師たちと幼稚園の母国語トレーナーとよばれる人々がいた。国際結婚、留学、職業上の赴任、難民や亡命、この場にいる理由はまさに千差万別。一人一人の人生を思うと、この北の果ての国の教室に、地球がぎゅうっと濃縮されて詰まっているような気がする。

ひとくちに母国語教育といっても、子供たち側のニーズはさまざまである。国際結婚したひとの

子供、一定期間だけ親の都合で滞在している子供、移民や難民として将来も住む子供……、家庭で使う言葉もさまざまなら、子供の母国語の能力もさまざま。四、五人の子供を教えていても、各目のレベルがばらばらということはザラにある。教えるほうにとっては難問山積み。現場の悩みをぶつけ合って、教師たちは真剣に話し合っていた。

しばらくたって、ベトナム人のスウォンの母国語授業を見せてもらう機会があった。スウォンはイラスコレーで十七人の子供たちを教えている。

ちょうど二年生四人の歴史の時間で、ベトナム語で書かれたベトナムの歴史の本を、子供たちが朗読をしていた。すべてノルウェーで生まれた子供たちである。親たちがボートピープルとして国を脱出してきたのは十年ほど前のことになるだろう。スウォンは子供たちに、毎日ベトナム語で日記をつけることを宿題にしている。見事な筆跡のベトナム語のノートだが、残念ながら私には読めない。スウォンが笑いながらノルウェー語になおして読んでくれた。「今日は雪でした。外で友達と雪だるまを作りました。おばあさんが滑って転びました」。

スウォン自身もボートピープルである。夫と幼



ベトナム語の授業中

子供とともにベトナムを脱出し、もう八年間ノルウェーで暮らしている。祖国でも中学の教師をしていたらしい。非常に優秀な女性で現在大学にも通っている。ノルウェー政府の難民政策は、日本では想像もできないほどゆきとどいたものだ。住居、教育、就職、福祉、すべての面においてノルウェー人と同等の権利が認められている。

「でも、私はアジアに住みたかった。ここはともいところだけど、私の髪、肌の色はやっぱり違う。私たちはどこに住むか、選べなかった。日本の船に救われた人は、日本へ行ったし、私たちはノルウェー船に救われたのです。私は、いつかベトナムに帰りたい。私はただ、そのときを待つだけなの」

スウォンは美しい黒い髪をなでながら、つぶやくように言った。私に何が言えるだろう……。ベトナムがフランスの植民地だったなごりでスウォンはフランス語は話せても英語が話せない。それで私たち二人の間では、私のつたないノルウェー語でしか会話ができない。アジアから遠く離れたこの北の果ての国で、アジア人同士がノルウェー語で話す、そのことが私にはたまらなく淋しかった。

付記 一九八九年一月の全欧安保再検討会議では、欧州三十五か国の参加で、外国人労働者の子弟が、滞在国内で母国語教育を受けられるように配慮すべし、との合意がなされた。北欧で始まった母国語教育の思想が全欧に広まりつつある。

(写真提供・筆者 イラスト・中田 遊)



# サーブレシーブ

## 「仕事を持つ女達へ レジスタンス」の 二二六号合評会に答えて

神奈川県藤沢市 望月 緑

ズバリもう一度一言書かせてもらえば、「みんなが働いてしまえば、全然問題なくなる」なんて、あまりにも短絡的。今の日本経済のサイクルは、とてつもなく巨大であり、個人では揺るがすことのできない力とスピードを持っている。そのサイクルの中に、女達がどんどん吸い込まれていくとしたら……。今すぐではなくとも、近い将来大切なものが消えていってしまうのではないだろうか。

何も専業主婦がすべてを支えているなどと言っているのではない。平たく言えば、男も、女も、子供も、老人も、共存し共有しているという実感のある地域社会——こ

れだけは、絶対に失いたくないのだ。

ここまで来ると、二二六号合評にも少しもめがない自分にあきれるばかり！

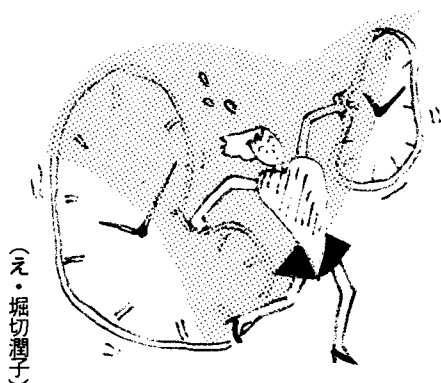
「働く」ということは、「時間」の提供でもある。例えば、昼間の地域活動などを夜にしたとすれば、もしかしたら、その「時間」は穴埋めできるかもしれない。でも、私がもし、しばしば夜のPTA会合に出るとすれば、まわりのだれかの力を借りなければ無理だ。夫、身内、近所の友……。

そうやって「時間」を作り出せたとしても、その夜は家族とゆったりとすごせる夜ではない。夜は、唯一、子供にとっても心の潤いを感じる「ひととき」はず（ここで、専業主婦ならゆとりを持ってこういうことができる、などと言っているわけではないことをつけ加えておく）。

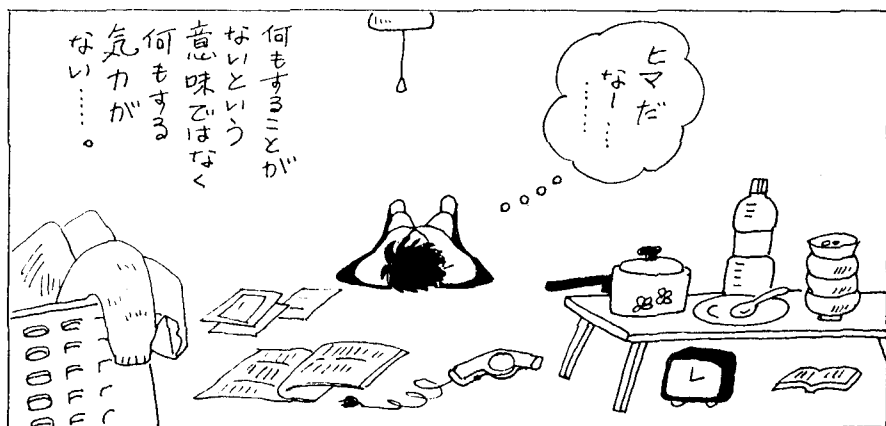
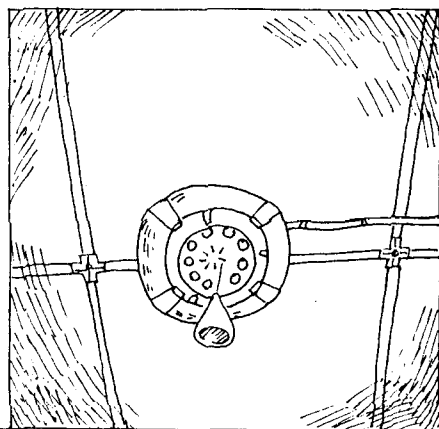
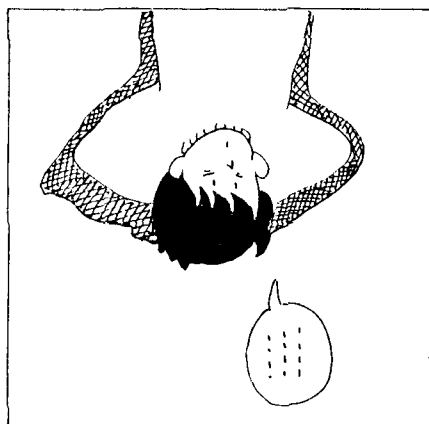
「働くこと」そのものに目を向けてきた今までの社会——その中で今、さまざまな歪みが生まれているのは確かだ。ゆっくりとした時間に、ゆったりと人と話すること

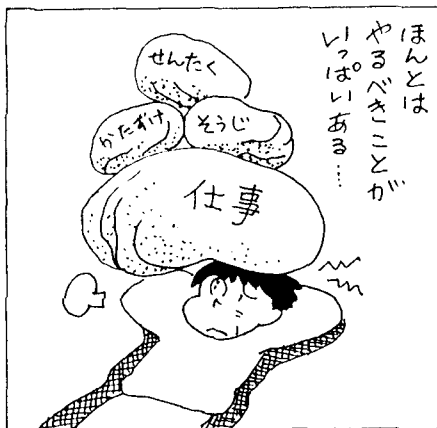
こんなことすら近ごろ失われていく。

「仕事」という境界線のために、女達の中に生まれる後ろめたさやいらだち。これを除くのは容易でない。今までの「働き方」に方向転換を迫ることだから。物中心の社会から、「心」をとりもどすこと。そんな優しい働き方、暮らし方ができたらと、思うのだが……。

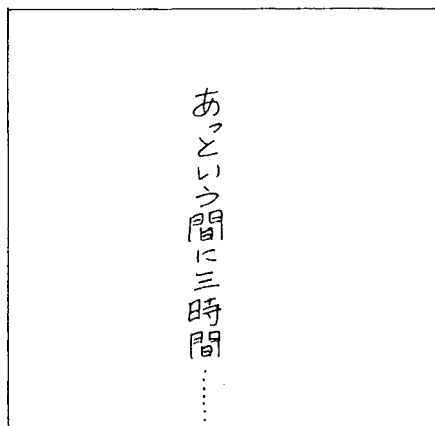
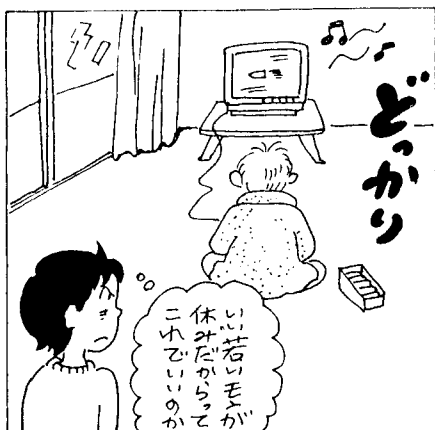


(え・堀切潤子)











南 千歌子 著

『週刊朝日』に連載された「太腕おばさん株テク日記」には、不安定な投資環境下で生活防衛のために、銀行、証券会社、株式評論家、株主総会、不動産屋、保険会社等々にアタックして、バブル経済の理不尽さと格闘す

る「太腕おばさん」の活躍ぶりを書き下ろしてある。外貨預金のカラクリ、株式評論家が匿名で明かすうちあけ話、あるいは一般株主の理解を超える株主総会の実態、はたまたマシオンころがしのために「偽

装離婚」をすすめる不動産屋など、「カネ余り社会」の悲喜こもごものエピソードがユーモアと皮肉たっぷり描かれている。「資産もみくちや」庶民の嘆きと怒りを代弁した痛快な一冊だ。

平凡社 二二九〇円(Ｙ)

おばあちゃんのひり語り



松吉千津子 著

戦争も次第に敗色濃くなってきた昭和二十年の春、アメリカ軍の上陸に備えて、高知市外の海岸に海軍の一個中隊が配置された。本の語り主のおばあさんの家にも四十人の予科練生が宿泊したが、まだ十四、五歳位の少年兵である。すでに死を覚悟し

黙々と壕掘り作業に励む姿を見るのはおばあさんにとってはせつなく、夜中にそっと餅をさし入れたり、時には隊長の鉄拳から体を張って彼等を庇ったりする。やがて終戦——解散、その間の兵連の行動や当時の混乱ぶりが、高知の方言そのままに訥

々と語られている。現実はおつと暗くて辛いはずの話が、方言のもつ柔らかな言いまわしとおばあさんの温かい人柄とに融和されて、いつしか声を出して読みたくなるほど懐かしいぬくもりの伝わってくる本である。

径書房 八二四円(Ｔ)



平井雷太 著

東京・文京区でユニークな学習塾「スペース・らくだ」を開いている著者の教育システムを、あらゆる角度から描きだした一冊。

「教えない、強制しない」のに、子どもたちが自ら学び、あらゆる他の学習においてもやる気をだし、ものごとに生き生きと取り組むようになる、その秘密は、子どもの進度にふさわしいドリルを、子ども自身が選び、自分で採点するシステムに潜んでいる。

そこまで子どもの自主性に任せていいのか、本当にやる気ができるのか、という疑問は、読み進むうちに解消するだろう。教育について思い悩む親が、一度は手にとるべき一冊である。

新曜社 一三三九円(Ｋ)

オフィスにもちこまれる性

セクシュアル・ハラスメントの探究



著 杉井 静子  
村瀬 幸浩

どうして職場で、学校で、あらゆるところで、女性の人権は踏みつけにされるの？  
本書は、セクシュアル・ハラスメントは最後に残る（と断定することに疑問はあるが）性差別であり、「性」と「生」を侵す

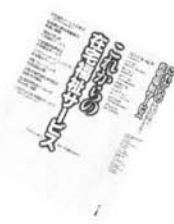
もの、という視点から書かれている。  
女性を差別する男の性を、歴史的、社会的背景から、また受精卵がヒトとして成長する過程までも本書は説明する。女性も男性とともに、平等に人間らし

く生きるといふ願いは、それを許さない男性優位文化からの絶え間ない攻撃の中で、少しずつ、確実に力を得てきている。  
女性の人権を守れずには「人権後進国」の汚名は消せまい。

大月書店 一四五〇円（H）

これからの在宅福祉サービス

住民のためのあるべき姿を求めて



編〔著〕 河合 克義

施設福祉から在宅福祉への流れの中で、公的制度の不備を補う民間の有料福祉サービスが多様な広がりを見せている。「誰もがどこでも、いつでも、的確で質のよいサービスを、安心して、気軽に受けることができる」老後はやって来るのだろうか？

本書は、行政による家庭奉仕員派遣事業と、福祉公社、社協、ファミリー・サービス・クラブ、市民グループ、中高年雇用福祉事業団、生協による在宅福祉活動の実態を紹介しながら、質的にも量的にもまだ不十分な現在の在宅福祉の問題点にメスを入

れている。  
公的責任の縮小と福祉の商品化に「待った」をかけ、行政による専門的サービスの充実と、地域住民のネットワークによる福祉活動と運動の方向を探る書である。  
あけび書房 二九八七円（K）

プロレス少女伝説

新しい格闘をめざす彼女たちの青春



著 井田 真木子

「女らしさ」とはもったも遠いところに位置する女の格闘技の世界、それがプロレスだ。どんな女性がレスラーになり、どんな女たちが観客なのだろう。  
一九八三年、それまで好色な中年男の対象として存在してい

た女子プロレスに、少女たちの大群がファンとして出現し、帰れコールを浴びせて男たちを駆逐してしまふ。それらの熱狂的ファンの姿、ガイジンを含む女子レスラーの個人史、極端に閉鎖的・抑圧的な内部の人間関係、

興業としてのプロレスのありかた。  
丹念な取材と筆づかいであらゆる角度から女子プロレスという特殊な世界を描き、読者を考えこませる一冊である。  
かのう書房 一五四五円（T）

# わいわい がやがや

## 団地の火事と 宗教

●匿名

十年前の旧盆の夜の十二時ごろ、アルバムの整理をしていたトントンという音に玄関に出ると、お隣の奥さんがお向かいが火事みたいだと言う。少し前からキナ臭いのでご主人に告げたが、「人騒がせな、黙っていなさ

い」と言われた。それでもやっぱり気になり、中廊下になっている一軒一軒のにおいを嗅いで回ったら、やっぱりお向かいが臭うという。

慌てて服に着がえ、新聞受けを開けて覗くと煙が流れ出てきた。急いで夫を起こし、お向かいの左隣のご主人を起こす。寝ぼけていたのか、いずれも緊迫感が少なく「なーに」という感じだった。左隣に至っては壁一重向こうが火事だというのに、植木が大事だからちよつと動かしてくるなどという。

まずはお隣のご主人と夫で消火をやるのだが、火事の右隣は留守でその隣からベランダ伝いに入るのに、屋根がないから結構危ない思いをしようやく入った。

そのころは上階の人も、煙が出ていする臭いと下りてきていた。

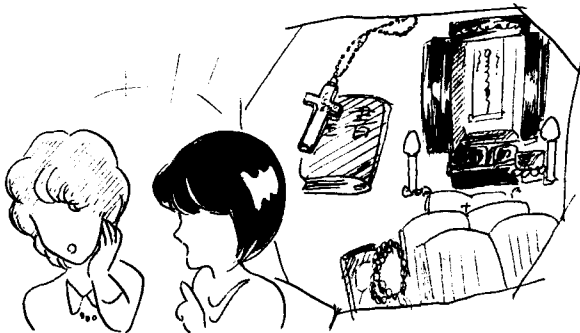
入ったらカーテンが燃えていたので、とっぱずして下の駐車場へ捨てたという。消火するの水道の水がバケツにたまるのがじれったかったが、あとで玄関から入ってきたお向かいのご主人が「水は風呂場にあるじゃない」と言ってくれて、やっとそのことに気がついたそうだ。

とにかく三人で消火できた。そのころまだ煙が残っている廊下には、結構人だかりがしていた。同じ階にあるスーパの寮の若い店員達は怖いと騒いでいるし、小二だった息子もその日買ったばかりのグローブを大事そうに抱えこんでいた。

消火後、しばらくしてから消防署の人達がドカドカきて、土足で家の中に入っていくのを「もう消えたのだから靴をぬいで入って下さい」などと言っている奥さんもいたが、やっぱり土足でドカドカ入っていた。

ダイニングの床とテーブルと柱が燃えていたという。

ずい分長い時間、興奮さめやらないで廊下にいると、お隣の奥さんの連絡で隣県の実家から





その家の奥さんが帰ってきたが、若いのに落ちついていて感心した。きっと私なら火事のことと、近隣に迷惑をかけてしまったとの気持ちで、もしかしたら泣いていたり、ごめんなさい、ごめんなさいと悲愴な顔で帰ってきたのではないかと思う。

火事はご主人が友達を呼んで飲んでいっているうちに、外で飲むということになり、灰皿をカーテンの側のチリ箱にあけて出かけ、そこから火が出たのだという。

消火した三人はその後、感謝状と金一封(二百円)を贈られた。しばらくしてお隣の奥さんが、「お父さんがあんなに危ない思いをして消したのに。消してあげなければよかった」と言う。「どうして」と聞くと、「お向かいの奥さんは、宗教を信仰しているお蔭であのくらいですんだというのよ」と怒って

いた。喋る相手を間違えているんじゃないのと二人で話したことがあった。

結局、信仰している人を助けてくれるのは神様と宗教の仲間だけらしい。

## 父の背中

東京都練馬区●関根裕子

昨日夕食のとき、父が少し照れながらボソツと言った。

「シルバー人材センターに登録してきたんだよ」

父は六十九歳、今年はじめまで機械部品工場を自営していた。白内障の手術後、視力低下と体力の限界を自覚し、勇退したので。

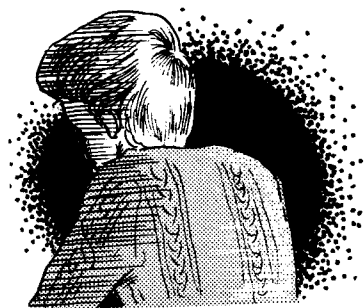
仕事が生きがいの働きの父が、ゲートボールの参加だけで満足できるはずがない。まだ枯

れたくなくて、意を決して人材センターに行ったのだ。

「公園の清掃とかの仕事しか、ないらしいがね……」頭髮も眉毛も白くなった父に、母がきっぱりと言いつつ放った。

「掃除なんて、みっともない。いやですよ。近くでやらないで下さい」

母にしてみれば、小規模とはいえ、会社の経営者であった父が、今さら他人に雇用され苦勞せずとも……という気持ちが生



じたのかもしれない。

「職業に貴賤はないのだから、お父さん、何でも好きなことをやったらよいよ」

私は、父に心から声援を贈りたいと思った。

「そうだ、そうだ。おじいちゃん」娘も同調した。母は食後、黙って自分の部屋に行ってしまった。

東北の農家の三男坊に生まれ、学歴も、コネも、金もなく、東京の工場で働きに働き、五十歳で脱サラをして、会社を設立した。不渡り手形をつかまされたことも、オイルショックで、経営の危機におちこんだときもあった。幾度かの病氣、怪我で入院を経験し、母と二人三脚で、乗り越えてきた父の人生。悔しさ、辛さに耐えた父の背中が、今日は小さくみえる。

母に叱られて、しゅんとした子どもみたいに小さく、かしこまった父の背中であった。

# 脱・事業専従者

静岡県浜松市 ● 芥川菜穂子

税法上の事業専従者（家族従業員）になっていて、実際にはたいした仕事がないのに、外へ働きに出ると、夫にかかる税金が増えてしまうために、宙ぶらりんの状態にある自営業者の妻は、多いのではなからうか。

自営業者の妻といってもいろいろで、店頭で働く八百屋や魚屋のおかみさんもあれば、開業医や弁護士などの奥様で、ちょっと顔を出す程度で、月給数十万円を事業経費として落としている例もある。パートに出て月に五、六万円稼いでみても、そのために専従者と認められなくなってしまうのでは、経済的にかえってマイナスである。

この、一見脱税に近い計上の仕方が通用してしまう状況が、逆に彼女たちを閉じこめている。サラリーマンの妻なら一定額までの収入は無税だから、扶養家族のままで働きに出ることが可能なのだが、自営業者の妻たちは、専従者であるという大義名



分によって、自立の道を自ら閉ざさざるを得ないのだ。この数年間、前述のような悩みを抱えながら、私も自営業者

の妻として業務補助を続けてきた。

しかし、もう悩むのはやめようと思う。税金は怖いけれど、そのために自分の思い描く人生をあきらめるのはばからしい、という当然のことによりやく気づいたからだ。

税法やら規則やらというのは後からついてくるもので、先回りしてこちらから従ってやる必要はないのだ。まちがっていたなら、後であちらが裁いてくれる。人生ってそんなふうに自由なものだったんだ。

嫁となり母となって、完璧に近くあるために自分を律し続けて十年、ちょっと真面目に生きすぎてつまらない人間になっていた。

やりたいようにやってみよう。なんだかホッとして、生きるのが楽しみになってきた。

（え・田村幹代）

お友達にへわいふへをおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

へわいふへ年間分をプレゼントにお使い下さい。

●結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

# 次号投稿募集

## ▼特集テーマ原稿

二二八号の特集テーマは、「夫の定年」です。

とかく「産業廃棄物」「濡れ落ち葉」などと呼ばれがちな定年後の夫。ワークホリックの末路は哀しいものですが、長い人生のつげが最後の二十年間にまわってくる、これは夫にとっても、妻にとっても避けられない現実です。

しかし「濡れ落ち葉」や「ワシも族」ばかりでなく、悠々自適、妻との関係も好ましい夫も存在しているはず。

定年後のあなたの夫、あなたの父親はどんな日常を送っていらっしゃいますか。またその日常は、これまで彼の送ってきた仕事人間、家庭人間としての生活とどのような関係しているか、また妻との仲がどのように変ってきたか、そのへんも含めてレポートをお寄せください。

分量は四百字詰原稿用紙十枚前後。

## ▼ワンポイント情報

次回は「大病院、ここがやり切れない」です。

三時間待って三分診療、というのはよく言われることですが、待ち時間ひとつをとっても、もしも病院側に本当に患者を尊重する気があれば、整理券をくばるなど、患者の体力と気持ちを消耗させない方法はいくらもあるはず。

しかし診察を受けてからお薬を貰い、お金を払うのにまたしても待たされる。診察室のなかの声が筒抜けなど、患者の神経を逆なでにするような現実がいまだにまかり通っています。

患者の側で声をあげなければこの現実はいま変わりません。「わいふ」に、その声を寄せてみませんか。

あなたの気づいた大病院のシステムのいやなところ、困ったところをワンポイント情報にお寄せください。但し医師への個人的不平や、医療過誤などの問題ではなく、システムとして指摘したい部分に限ってください。分量四百字前後。

以上締め切りはいつも十二月二十五日。

ご投稿のさい、次の

ことにご注意下さい

●住所変更や本のご注文など、事務連絡を原稿末尾に書いたり、びんせんに書いたものを同封することは間違いが起ります。ちです。

編集部では原稿と思って扱うので、見落したり、封筒に残って発見されなかったりします。何度か例がありますので、別便になさるか、同封の場合は表書きに「事務連絡同封」と赤ペンでお書き下さい。

●原稿用紙を二つ折にし、製本のように重ねて、ホチキスで二・四か所もとじてくる方があります。二つ折ですと整理、割り付けが困難です。ホチキスを大苦心ではずして、開かなければなりません。原稿用紙は開いたまま、右肩一か所をホチキスなどで止めていただくと助かります。●投稿のさいはまず投稿規定をよくお読み下さい。

# わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも（男性でも 投稿できます。原稿には住所氏名を（都道府県名から）明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

・エッセイスト・クラブ（一六〇〇字まで）

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

・ズバリ一言（八〇〇字まで）

マスコミ、事件、商品、サービスその他目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

・私の生活エリア（一六〇〇字まで）

全国各地からの地域紹介レポートをお寄

せください。名所旧跡、美術館などの見どころ、名産品、おいしいものの案内、買い物、食事どころの穴場など、住んでいる人でなければ提供できない情報をどうぞ。写真をそえてください。（絵はがき、パンフも可）

・奥さんから外さんへ（一六〇〇字まで）

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったもの etc をお書きください。

・マイ・ジョブ／マイ・プロフェッション

（一六〇〇字まで）

あなたのしているらっしゃるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも・サブリゼーション（八〇〇字まで）

本誌の投稿や記事についての反響をおのせします。感想、反論、なんでもどうぞ。

・一人一芸（一六〇〇字まで）

音楽、絵画、お茶、お花、染色、バレエ、日舞、ヨガ、はてはマージャンからパチンコまで、あらゆる趣味活動の面白さを知っているかた。それを身につけたプロセスと、必要な適性、上達の秘訣、醍醐味、長続きのこつなど、その苦しみと楽しみをレポートしてください。

・人間マンガラ（一六〇〇字まで）

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

・親の言い分・教師の言い分（二六〇〇字まで）

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かっては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的ににお書きください。

・フリースペース（八〇〇字まで）

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇〇字論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

・わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

・読んでみました(ハ〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

・情報コーナー(ハ〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、なんでも。なるべく短く、要点をまとめてください。

・サークルだより(ハ〇〇字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りた、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというおたよりをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後については、次号まわしとなります。

規定枚数はより多くの投稿をのせるために、もって戴きたいと思えます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもおのせします。

## コラム以外の投稿募集

・特集・テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

## ・ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますので、募集欄をごらん下さい。

・特別寄稿 ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適合と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推せんします。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

・絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、合わせてお送り下さい。

## 注意

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレシーブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです

ので、ヨコ書きはご遠慮下さい(書き直すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記して下さい。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書き下さい。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮下さい。居住地もとくに理由がなければ記載したいのではありません。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただき、ということですが。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断り下さい。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断りします。

●ワープロ打ち原稿の字づめは、二十字で行間、字間をあまりつめないように。

## 編集だより

●特集「子どもの出現」には十七通にものぼるご投稿をいただきました。ほとんどがなんらかの意味で、母親としての満足感を述べたもので、日本の女性にとっての子どもの存在の大きさを改めて感じました。ただしそれだけに内容は大同小異、どれを掲載すべきか選択には大いに苦労しました。

●ワンポイント情報、今回は残念ながら二通しか集まらず、また情報としては密度がうすいものでしたので掲載を見合せました。ご了承ください。

●つい最近、作り話を実話として投稿なさった方があることが明るみにでて、すでに掲載されており編集部一同ショックを受けました。

世には「やらせ」の投稿を、実話として掲載する雑誌も存在するらしいのですが、「わいふ」の投稿は、女性の生活の真実が描かれている点にこそ価値があり、私たちもだからこそ情熱をもって編集をつづけているのです。

フィクションを実話のように仕立てて投稿なさることは、絶対になさらないでください。もしそういう事実が判明した場合に、その方のご投稿は以後掲載をおことわりいたします。

●各地でずいぶんいろいろなサークルができています。ときどきサークルだよりをお寄せくださるところは、活動のようすが分かっていのですが、編集部で存在を知らないサークルもところどころにあるようです。

発足以来満十五年、サークルの全リストを集めたいと思います。どんな小さなサークルでも結構ですから、ぜひニュースをお知らせください。

●一九七六年から八九年夏までの「わいふ」への投稿のうち、すばらしいものを選んで「わいふ傑作選」、まだ多少在庫がありますので、読みたいかたはお申し込みください。次号と一緒に送りすれば送料五十円増しですみます。

定価は千六百円。  
ではみなさまお元気です！

### □購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。  
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上とまりますと送料が半額以下になります。

### わいふ NO.227.

(隔月刊)

1991年1月1日発行

編集・わいふ編集部

定価 460 円 (本体 447 円)

(年間購読料送料共4020 円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03) 260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

### □購読中止は……

必ずお申し出下さい。  
送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。

労働教育センター

東京都千代田区神田駿河台三二一〇一  
電話 〇三三(一五三) 三三六二

2 季刊誌・最新刊・910円 (本体 882円)

# 子どもと健康

No.23 特集Ⅱこれからどうする「学校健診」Ⅱ「学校健診はとうあるべきか」山田真／「学校健診改訂の動向」三橋敦子／「受ける立場から」久繁哲徳／「学校の中での被曝」島かおり

# 女子教育もんだい

No.45 特集Ⅱいま「女子教育もんだい」を考えるⅡ「出発と歩み」奥山えみ子／「働くことをどう教えるか」藤井治枝／「家庭での男女関係」ますのきよし／国信潤子／山住正己

# 女たちの反原発

三輪妙子編著

四六判並製  
240頁、1339円

「反原発」を生きる12人の女たち!

現地からの報告に加え、さまざまな女たちが想いを述べ、語り合う。伊藤ルイ／千葉仁子／小木曾美和子／松浦雅代／落合誓子／伊藤至頼／堤愛子／三輪妙子／石塚友子／添野ふみ子／村田まり子／水沢靖子

人間の尊厳を守りうる 医療・福祉の実現をめざして

## 第14回 老人福祉問題全国研究集会

と き 1991年1月25日(金)13時  
～ 1月27日(日)12時

ところ 横浜開港記念館／神奈川県勤労会館ほか

- ▶ 参加費(資料代含) 9,000円  
(会員7,000円・65歳以上と学生8,000円)
- ▶ 宿泊費(1泊) 9,000円
- ▶ 記念講演「豊かさとはなにか」(仮題)  
(1月25日15時～) 陣峻淑子(埼玉大学教授)
- ▶ 市民公開講座 大熊由紀子
- ▶ シンポジウム(1月27日9時～)

「人間の尊厳を守りうる福祉労働の実現めざして」

小野哲郎・佐藤嘉夫・岸田孝史  
(司会) 井上英夫

### ▶ 分科会(1月26日9時～)と助言者

- (1)保健と医療
- (2)老人ホームのケアと労働条件
- (3)地域福祉
- (4)ホームヘルパー
- (5)老人保健施設と特別養護老人ホーム
- (6)老人病院
- (7)費用負担
- (8)まちづくりと住い

大野 勇夫  
野口 典子  
唐 鎌 直 義  
木下 安子  
中川 晶 輝  
太田 貞 司  
小川 政 亮  
鈴木 晃

### ▶ 基礎講座

- (1)老人性痴呆とその対応 長谷川和夫
- (2)90年代の医療の動向 ①西岡幸泰②鐘ヶ江正志

主催 全国老人福祉問題研究会

〒173 東京都板橋区大山東町59-8 ドルメン大山101

TEL=FAX 03-579-8721

後援 采け老人をかかえる家族の会／医療を守る  
神奈川県民連絡会／神奈川県生活と健康  
を守る会連合会／横浜市従業員労働組合

価格は消費税込みです

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
〒607 ☎(075)581-5191(代)

# 沈黙をやぶった女たち

「女の人権と性」シンポジウム有志編

青木やよひ  
芦野由利子  
金住 典子  
草野いづみ  
駒野 陽子  
田中喜美子  
堂本 暁子  
丸本百合子  
宮 淑子  
ヤンソン由実子

## ●映画「中絶—北と南の女たち」をめぐる

中絶の問題に真向から取り組んだ映画に寄せられた女たち・男たちのホンネの声をもとに、中絶と女の人生、女の選択、生命を考える、女と男の関係性、国家と性、などの視点から中絶の現状と今後を考えます。

シリーズ〈女・いま生きる〉29・1545円

●好評のロングセラー・シリーズ〈女・いま生きる〉より  
新版 私「女性学」講義  
暮らしのなかの女性学  
女性のライフサイクルと法

小松満貴子著 最新の  
テキスト 二六〇〇円  
富士谷あつ子編者 身  
近な素材で二〇六〇円  
佐々木静子編著 家庭・  
職場・社会 二〇六〇円

## ★単にお世話をするだけでなく、生活の質を高めるケアを！ 高齢者の在宅ケア

E・M・ピンクストン／N・L・リンズク著 浅野 仁／芝野松次郎監訳  
家族を訓練して行動療法が実施できるようにする手続と、地域サ  
ービスと家族を結び付ける手続を中心に、高齢者の在宅ケアを具  
体的に解説。尿失禁、活動能力や自立能力の低下、言語障害、記憶  
障害や妄想、不衛生、社交性のなさ……といった、入院や施設入所  
につながる問題を抱える高齢者が、在宅生活を送れるようになった  
という事例がいくつも報告されています。  
予価 三三〇〇円

老後のセックスは  
枯れてしまうのか？

### 目次

VM III I I  
最後のセックスのすゝめ―性と死を語る会  
ふれあい性相談  
変わる老人の性意識(第二回調査結果は語る)

## 性ぬきに老後は 語れない

大工原秀子

性をイキイキ楽しむために

●続・老年期の性 セックスは枯れてしまうのか？  
タブー視された老いらくの性を明らかにした「性  
意識調査」その結果から、変わる高齢者の性を  
真正面からとらえ、老いても性をイキイキ楽しむ  
道を、第一線の実践家が提言する。 一四〇〇円